山梨県韮崎市

後田堂ノ前遺跡

USHIRODA DOHNOMAE SITE

韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴う発掘調査報告書

1997

韮崎市遺跡調査会
韮崎市教育委員会

山梨県韮崎市

後田堂ノ前遺跡

USHIRODA DOHNOMAE SITE

韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴う発掘調査報告書

1997

韮崎市教育委員会
韮崎市遺跡調査会

巻　頭　図　版

後田堂ノ前遺跡から八ツ岳を望む

序

韮崎市は山梨県の北西部、甲府市より北西12kmのところに位置し、南東は三角形をした甲府盆地の一角にあたり、南に富士山、北に八ツ岳、西に南アルプスの山々が望める風光明媚な地であります。近年、市内では県営圃場整備事業、一般公共事業あるいは民間開発事業等により長閑かな田園風景から自然と調和した田園都市としてその様相を変えつつあります。韮崎市ではそうした開発事業に伴い数多くの遺跡発掘調査に迫られ適切かつ迅速に対応するため、遺跡調査会を組織し遺跡保護に努めてまいりました。すでに1989年、韮崎市立北東小学校建設にともなう発掘調査に際して、調査面積19,295㎡、竪穴住居址423軒、掘立柱建物54棟にもおよぶ遺構を検出した宮ノ前遺跡を始め、何カ所かの遺跡調査を行ない多大な成果をあげております。

今回ここに報告する後田堂ノ前遺跡は韮崎市藤井町北下条字後田・坂井字堂ノ前地内において1996年に韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴い調査を実施した遺跡であります。事業予定地周辺の藤井町は市内を南北に貫流する塩川右岸の河岸段丘上に位置し、古来より「藤井五千石」と称される穀倉地帯として知られております。またこうした肥沃な土地を背景として、太古より人々が連綿と生活を営み続けてきたことは近年の開発事業に伴う発掘調査によって次第に明かとなってきました。

後田堂ノ前遺跡からは弥生時代後期から平安時代にかけての住居址16軒、その他土坑・溝状遺構・水田址が検出されました。これまで藤井平においては多くの遺跡が調査され多大な成果を収めていますが、今回の調査によってこれまでの成果が補強され、更には豊かな歴史的展開が期待出来るものです。このように古くから豊かな歴史のあるこの地域で今回発掘調査が行なわれたことは実に意義深く重要なものでありました。貴重な発見があった後田堂ノ前遺跡の報告書が今回ここに刊行されたことは喜ばしいことであり、本市の歴史に新たな１ページが加わるとともに、地域の歴史を再認識する機会となれば、この上ない喜びであります。

最後に、発掘調査並びに報告書作成に関し、多大なる御理解と、御協力、また御指導、御助言を賜りました関係諸機関及び関係者の皆様に深甚なる感謝を申し上げる次第です。

平成９年３月31日

韮崎市遺跡調査会

会　長　秋山幸一

韮崎市教育委員会

教育長　口野道男

例　　言

1　本書は、山梨県韮崎市藤井町北下条字後田261-1～263-1、及び坂井字堂ノ前76-1、77、78に位置する後田堂ノ前遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴う事前調査であり、韮崎市教育委員会より韮崎市遺跡調査会に委託され、調査が実施されたものである。

3　発掘調査及び出土品等の整理及び報告書の執筆・編集は韮崎市遺跡調査会調査員伊藤正彦が行った。

4　石器の石材鑑定では山梨地学会副会長　樋口　正氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げたい。

5　発掘調査及び報告書作成に際して、多くの方々から御指導・御協力を頂いた。一方御芳名を上げることは遺漏あることを怖れ、避けさせて頂くが厚くお礼申し上げる次第である。

6　航空写真測量は株式会社フジテクノに委託した。

7　本報告書にかかわる出土品及び記録図面、写真などは一括して韮崎市教育委員会に保管してある。

凡　　例

1　本書の挿図縮尺は、各挿図ごとに示した。

2　遺構断面図の水糸レベルは海抜高（m）を示す。

3　挿図断面図の　　は石をあらわす。

4　歴史時代土器断面、白ぬきは土師器、黒は須恵器をあらわす。網点は陶器をあらわす。

5　住居址実測図、写真図版の遺物番号は、挿図中の番号と対応する。

6　本書で用いるスクリーントーンは以下の通りである。

遺構実測図中　　は焼土の範囲

土器実測図中　　は赤彩部分　　は黒色処理部分をそれぞれ表示している。

目　　次

序
例　　言
凡　　例

第1章　発掘調査の概要 …… 1

第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査組織 …… 1
第3節　調査区域の設定と調査方法 …… 2

第2章　遺跡環境 …… 3

第1節　遺跡の位置と地理的環境 …… 3
第2節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 3

第3章　遺構と遺物 …… 15

第1節　住居址と出土遺物 …… 15
第2節　土坑と出土遺物 …… 44
第3節　溝状遺構と出土遺物 …… 48
第4節　水田址と出土遺物 …… 54
第5節　溝状凹地遺構と出土遺物 …… 55
第6節　遺構外出土遺物 …… 57

第4章　ま　と　め …… 66

挿　図　目　次

第１図　後田堂ノ前遺跡①と周辺の遺跡 …… 6
第２図　調査区位置図 …… 7
第３図　第１～３調査区遺構全体図 …… 9～10
第４図　第４、５調査区遺構全体図 …… 11～12
第５図　基本層序 …… 13～14
第６図　第１、２号住居址実測図 …… 16
第７図　第１号住居址出土遺物 …… 17
第８図　第２号住居址出土遺物 …… 19
第９図　第３号住居址実測図・出土遺物 …… 20
第10図　第４号住居址実測図 …… 22
第11図　第４号住居址出土遺物 …… 23
第12図　第５号住居址実測図 …… 24
第13図　第５号住居址出土遺物 …… 25
第14図　第６号住居址実測図 …… 27
第15図　第６号住居址出土遺物 …… 28
第16図　第６号住居址出土遺物 …… 29
第17図　第７、８号住居址実測図 …… 31
第18図　第８号住居址出土遺物 …… 32
第19図　第９号住居址実測図 …… 32
第20図　第10号住居址実測図 …… 33
第21図　第10号住居址出土遺物 …… 33
第22図　第11号住居址実測図 …… 34
第23図　第11号住居址出土遺物 …… 35
第24図　第12号住居址出土遺物 …… 36
第25図　第12号住居址実測図 …… 36
第26図　第13号住居址出土遺物 …… 36
第27図　第13号住居址実測図 …… 36
第28図　第14号住居址出土遺物 …… 38
第29図　第14号住居址実測図 …… 39
第30図　第15号住居址実測図 …… 40
第31図　第15号住居址出土遺物 …… 41
第33図　第16号住居址出土遺物 …… 44
第34図　第１～３号土坑実測図 …… 46
第35図　第４号土坑・第１号集石土坑実測図 …… 47
第36図　第１～４号土坑出土遺物 …… 47
第37図　第１・３号溝実測図 …… 49
第38図　第２号溝実測図 …… 50
第39図　第１号溝出土遺物 …… 51
第40図　第２号溝出土遺物 …… 51
第41図　第４号溝実測図・出土遺物 …… 52
第42図　水田址出土遺物 …… 54
第43図　溝状凹地遺構出土遺物 …… 56
第44図　遺構外出土遺物（第１、２区） …… 58
第45図　遺構外出土遺物（第３区） …… 59
第46図　遺構外出土遺物（第３、４、５区） …… 60
第47図　石器（１） …… 61
第48図　石器（２） …… 62

図　版　目　次

巻頭図版　遺跡遠景

図版１　遺跡遠景

図版２　試堀調査・調査風景・調査区全景（１区・２区）

図版３　調査区全景（３区～４区）、第１・２号住居址

図版４　第４・５・10号住居址

図版５　第11～13号住居址

図版６　第14～16号住居址

図版７　第12・15号住遺物出土状況、第１～４号溝、第１号集石土坑、調査風景

図版８　第１・２・４・５号住居址出土遺物

図版９　第６・８・10・12・15号住居址出土遺物

図版10　遺構外出土遺物

第1章　発掘調査の概要

第1節　調査に至る経緯

韮崎市文化ホール前通り線建設工事について、市開発部局より計画提示を受け、それに伴い韮崎市教育委員会が事業予定地内の埋蔵文化財確認調査を実施し遺跡の存在を確認したのは平成7年（1995）3月であった。その結果を基に、韮崎市教育委員会・開発部局及び山梨県教育庁学術文化課を含めた三者で協議を行い、韮崎市遺跡調査会を調査主体として、遺跡名は調査対象地が2つの小字に係ることから後田堂ノ前遺跡とし、建設工事に先立って約1800㎡を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。発掘調査は平成8年4月23日から開始し、途中約4ケ月の中断を挟んで12月20日に終了した。引き続き遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が終了したのは平成9年3月であった。

第2節　調査組織

1　調査主体　韮崎市遺跡調査会

2　韮崎市遺跡調査会組織（平成9年3月31日現在）

会長	韮崎市長	秋山幸一
副会長	韮崎市助役	古屋輝雄
	韮崎市教育委員長	輿石　薫
	韮崎市文化財審議会会長	山寺仁太郎
理事	学識経験者	磯貝正義
	学識経験者	野沢昌康
	学識経験者	谷口一夫
	学識経験者	萩原三雄
	学識経験者	波木井市郎
	学識経験者	志村富三
	社会教育委員会会長	木下昭二
参与	山梨県教育庁学術文化課	出月洋文
	山梨県埋蔵文化財センター	八巻與志夫
監事	韮崎市収入役	雨宮　高
	韮崎市監査委員	石井俊之

3　発掘調査及び整理作業参加者（順不同、敬称略）

岡本 嘉一、小沢 高恵、小沢 栄子、小沢 久江、小沢 治代、大柴 欣子、岡本 保枝
小田切昭子、乙黒きくゑ、五味ゆき子、志村 冴子、阿部由美子、上野 理江

4　事務局（平成９年３月31日現在）

事務局長	韮崎市教育長	口野道男
事務局次長	韮崎市社会教育課長	深谷　卓
事務局員	韮崎市社会教育課主査	内藤晴人
	韮崎市社会教育課副主査	山下孝司
	韮崎市社会教育課主任	野口文香
	調査員	伊藤正彦

第３節　調査区域の設定と調査方法

韮崎市文化ホール前通り線建設工事は現況道路を直線化する改良拡幅工事であったため、拡幅部分を調査対象地とした。調査区は最大幅が約10ｍ、延長約140ｍの狭長な範囲となる。調査区現況は水田あるいは宅地となっており、そのため調査区は一筆ごとに東側から１区～５区と設定した。調査にあたり生活道路等の確保や構造物の存在、あるいは安全面への配慮などから多くの規制が生じ、調査対象地の全てにおいて調査を実施することができなかった。このため、各調査区は必ずしも互いに接合しない結果となってしまった。

調査は表土・耕作土を重機で排除した後、人力で精査を行い遺構の検出に努めた。遺構確認面に至るまでに出土した遺物は各調査区遺構外出土遺物として一括して取り上げた。遺構の掘り下げに際しては原則的に平面プランを確認した後、十字にセクションベルトを設置し土層の堆積状況を確認・把握しながら掘り下げを行ったが、遺構の平面プランが確認困難な場合には適宜にトレンチを設定し遺構の範囲を確認しながら掘り下げを行った。遺構確認面以下の出土遺物は原則として出土高さ・位置を平面図に記録後に取り上げた。

調査は東側の１区から開始した。遺構の重複など少なかったため調査自体は比較的順調であったが、６月の水田耕作期以降、水路から調査区内に水が差し遺構が水没する状況も見られた。建物の撤去が終わっていなかった４区を除き７月末をもって調査は一時中断し、建物撤去後の12月になって調査を再開した。

第2章　遺　跡　環　境

第1節　遺跡の位置と地理的環境

後田堂ノ前遺跡は山梨県韮崎市藤井町北下条字後田・坂井字堂ノ前地内にまたがって位置する。

韮崎市は山梨県の北西部、甲府市より北西12kmのところに位置し、南東側は三角形をした甲府盆地の一角にあたる。西側には南アルプスの前衛巨摩山地が走り、東側には秩父山地の前衛茅ケ岳から続く緩やかな裾野が穂坂丘陵として広大な広がりを見せている。北側は八ヶ岳から韮崎まで30kmに及ぶ韮崎台地があり、その先端は舌状の台地となり本市中心にまで達している。この台地をはさんで東側には秩父山地から塩川が、西側には南アルプスに源を発す釜無川が南流し、本市南側にて合流し甲府盆地へ向かって流れ出している。このように韮崎市は西・東・北の三方を山で囲まれ、南には平野が開けた地理的環境にある。

遺跡立地の地形は大きく台地上と比較的低地となる河岸段丘上に分けられる。具体的には4地域をあげられる。(1)茅ケ岳南麓の穂坂丘陵、(2)塩川右岸の河岸段丘上、通称藤井平と呼ばれる地域、(3)本市中央部にある韮崎台地、通称「七里岩」と呼ばれる釜無川・塩川の両河川に挟まれた細長い台地上、(4)釜無川右岸の河岸段丘上である。

後田堂ノ前遺跡はこのうち(2)の藤井平地域に位置する。本市の中央部を流れる塩川によって約9.5kmにわたり、幅数百m～1kmに及ぶ平坦で長大な河岸段丘が形成されている。藤井平と呼ばれる段丘面上は古来「藤井五千石」と称される穀倉地帯であったことが知られ、現在でも肥沃な水田地帯が広がっている。しかし、一見すると平坦地の様相を呈する当該地域は塩川の流路が現在のように安定する以前は藤井平の段丘面上で様々に流れを変えたらしく、自然堤防状の埋没微高地が所々に発達していることが微地形分析によって明らかとなった。藤井平ではこうした埋没微高地上に遺跡が点在しており、本遺跡の標高は381m前後を測る。

第2節　周辺の遺跡と歴史的環境

近年、韮崎市では公共事業・民間開発事業等に伴って、遺跡調査の必要に迫られている。最も組織的調査のメスが入れられている藤井平では縄文時代前期後半から平安時代・中世までの住居址が検出されている。藤井平で人々の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代前期後半～末である。宮ノ前遺跡⒁では前期末住居址1軒と土坑が、上本田遺跡でも前期末住居址が検出されている。山影遺跡(6)では中期初頭五領ケ台式期の住居址が2軒発見されている。中期後半曽利式期は後田(9)、北後田⑾、中田小学校遺跡㉑などから住居址や配石遺構の検出がある。縄文後期では称名寺～堀之内期の住居址3軒が宮ノ前遺跡から発見されている。晩期では住居址1軒が発見された中道遺跡、及び溝状遺構から縄文晩期～弥生前期にかけての土器が多数検出した宮ノ前遺跡がある。

弥生時代では宮ノ前遺跡から弥生前期の水田を検出している。弥生時代後期になると遺跡数の増加が見られ、本遺跡で住居址5軒、後田第2遺跡(2)で6軒、北下条遺跡(4)で1軒、下横屋遺跡(3)で8軒、堂の前遺跡(10)で4軒、中田小学校遺跡で住居址3軒の検出がある。いずれも櫛描波状文を主体とした土器が出土しているが、東海地方の影響を受けたものも見られる。

古墳時代では前期の住居址を検出した後田遺跡、立石遺跡(18)がある。また、七里岩台地上には後述するように百軒近くにも及ぶ住居址を検出した坂井南遺跡が展開しており、藤井平が大きな生産基盤となっていたことが窺われる。古墳時代中期では現在の塩川段丘崖近く、藤井町相垈に住居址2軒を検出した枇杷塚遺跡(5)がある。地下水位が高く、調査時には次々に水が湧き出す遺跡であった。古墳時代後期では本遺跡から住居址が3軒検出され、昨年度調査を実施し、南方300mに位置する後田第2遺跡からも住居址6軒を検出し、坏・甕など当該期の良好な資料が出土している。また本遺跡に隣接し昨年度調査した坂井堂ノ前遺跡(8)からも住居址2軒が検出されており、次段階への土器変遷を把握するのに良好な遺跡となろう。最後に後期古墳と思われる火雨塚古墳(7)が本遺跡の西側300mにある。地元藤井町にはこの古墳に関する伝承が伝わっており、それによるとかつてこの周辺には群をなして「つか」が存在したことが窺われるが、現在残っているのはこの1基のみである。現状では墳丘の盛土は失われ石室の石が一部残るのみである。

奈良・平安時代では爆発的な住居址の増加がみられ宮ノ前遺跡の竪穴住居址417軒・掘立柱建物址54軒を始め、北後田遺跡の52軒、中田小学校遺跡の18軒、堂の前遺跡の16軒、他に北下条遺跡、下横屋遺跡、坂井堂ノ前遺跡、後田遺跡、宮ノ前第2遺跡(17)、宮ノ前第3遺跡(12)、駒井遺跡(16)、前田遺跡(20)、立石遺跡(18)など多くの遺跡から住居址の検出がある。また宮ノ前第2遺跡からは仏堂と考えられる掘立柱建物址が検出され瓦塔や鬼瓦片が、宮ノ前第3遺跡からは県内初の漆紙文書が出土している。

中世では中田小学校遺跡から住居址3軒が検出されている。他に金山遺跡(15)などもある。また蔵の前塁址、殿田屋敷、相垈塁址、三光寺塁址などの館跡も知られている。

七里岩台地上では学史的に著名な坂井遺跡(23)を始め、縄文から平安時代までの住居址106軒、そのうち古墳時代前期住居址98軒、方形周溝墓12基を検出した坂井南遺跡(24)がある。また武田氏最後の居城として有名な新府城(22)もこの台地上にある。

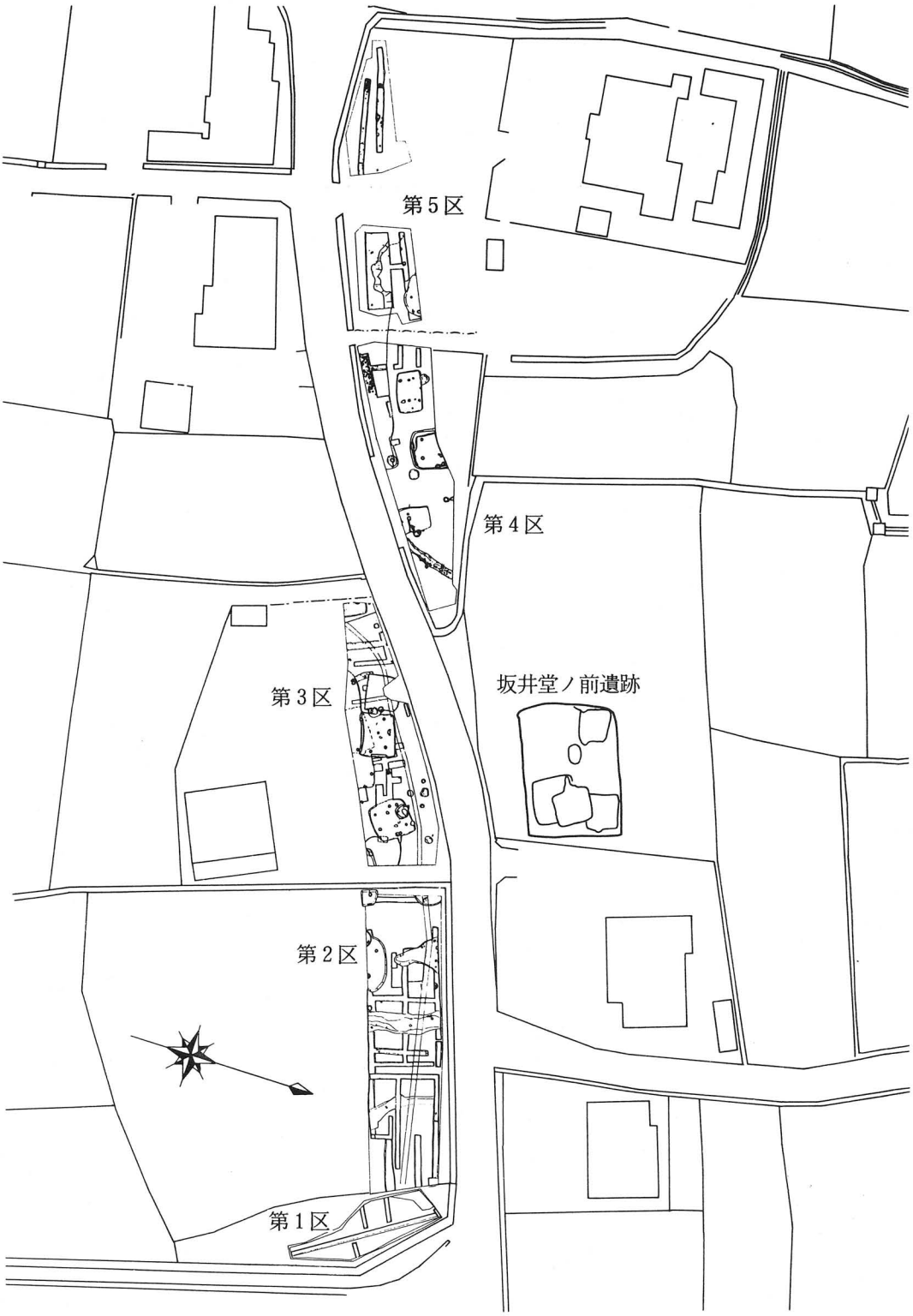
釜無川右岸の河岸段丘上には縄文時代中期初頭の五領ケ台式土器が出土した円野町宇波円井の宇波円井遺跡、縄文中期の住居址3軒を検出した円野町上円井の北堂地遺跡、縄文後期の土器が主体的に出土した神山町武田の新田遺跡(26)がある。弥生時代では遺構に伴わないものの円野町下円井の二反田遺跡、新田遺跡、旭町上条北割に位置する大輪寺東遺跡から土器の出土がみられる。古墳時代では、始めてこの釜無川右岸の河岸段丘上に組織的調査のメスが入れられ、住居址4軒が検出された久保屋敷遺跡がある。平安時代では住居址6軒を検出した新田遺跡、住居址2軒を検出した大輪寺東遺跡、住居址2軒と水田址が検出された円野町の二反田遺跡等

がある。中世から戦国時代にかけては先の大輪寺東遺跡の調査で溝等で囲まれた建物群の存在や、各種の陶磁器類や漆製品が出土し居館の存在が確認されている。戦国武将武田氏の家臣甘利氏の居館が文献資料などにより有力ではあるが断定にまで到っていない。その北方、神山町武田には市指定史跡武田信義館跡㉕がある。武田信義館跡から南西に約1.3kmには武田信義の要害城といわれる白山城㉗がある。このように本遺跡の周辺には、縄文時代から中世の館跡・城郭まで多数の遺跡が存在する。

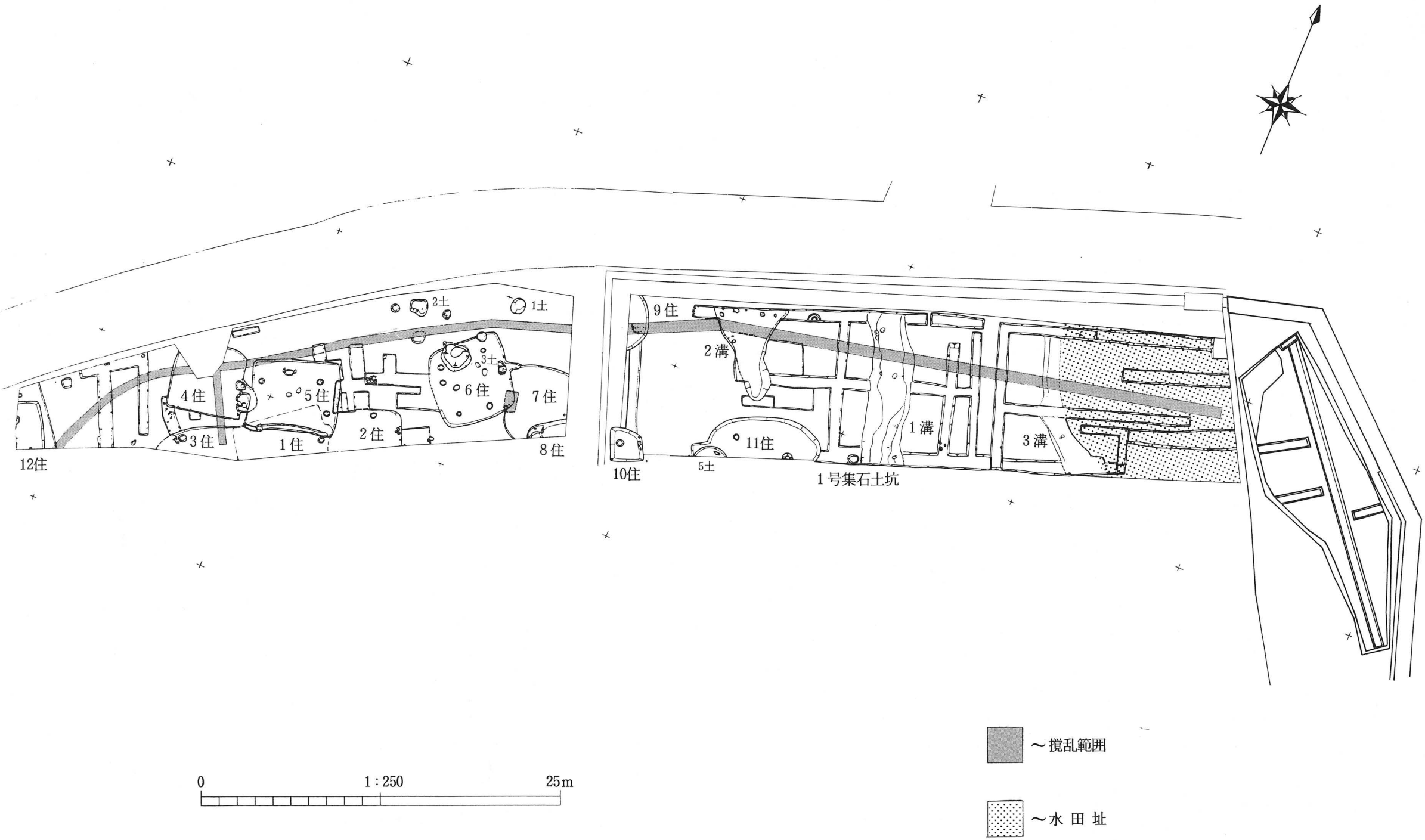
第1図中に示した遺跡の内訳は、以下のごとくである。

1　後田堂ノ前遺跡（弥生後期～平安時代）
2　後田第2遺跡（弥生後期、古墳後期）
3　下横屋遺跡（弥生後期、平安時代）
4　北下条遺跡（弥生後期、奈良・平安時代）
5　枇杷塚遺跡（古墳時代中期）
6　山影遺跡（縄文時代中期初頭）
7　火雨塚古墳（古墳時代後期）
8　坂井堂ノ前遺跡（古墳後期、奈良時代）
9　後田遺跡（縄文中期、古墳前期、奈良・平安時代）
10　堂の前遺跡（弥生後期、平安時代）
11　北後田遺跡（縄文中期、奈良・平安時代）
12　宮ノ前第3遺跡（平安時代）
13　宮ノ前第4遺跡（平安時代）
14　宮ノ前遺跡（縄文前期末～晩期、弥生前期、奈良・平安時代）
15　宮ノ前第5遺跡（奈良・平安時代）
16　駒井遺跡（奈良時代）
17　宮ノ前第2遺跡（奈良・平安時代）
18　立石遺跡（古墳前期、平安時代）
19　金山遺跡（中世～近世）
20　前田遺跡（奈良・平安時代）
21　中田小学校遺跡（縄文中期、弥生後期、奈良・平安時代）
22　新府城（中世）
23　坂井遺跡（縄文前期～中期）
24　坂井南遺跡（縄文中期、古墳前期、平安時代）
25　武田信義館跡（中世）
26　新田遺跡（縄文後期、平安時代）
27　白山城（中世）

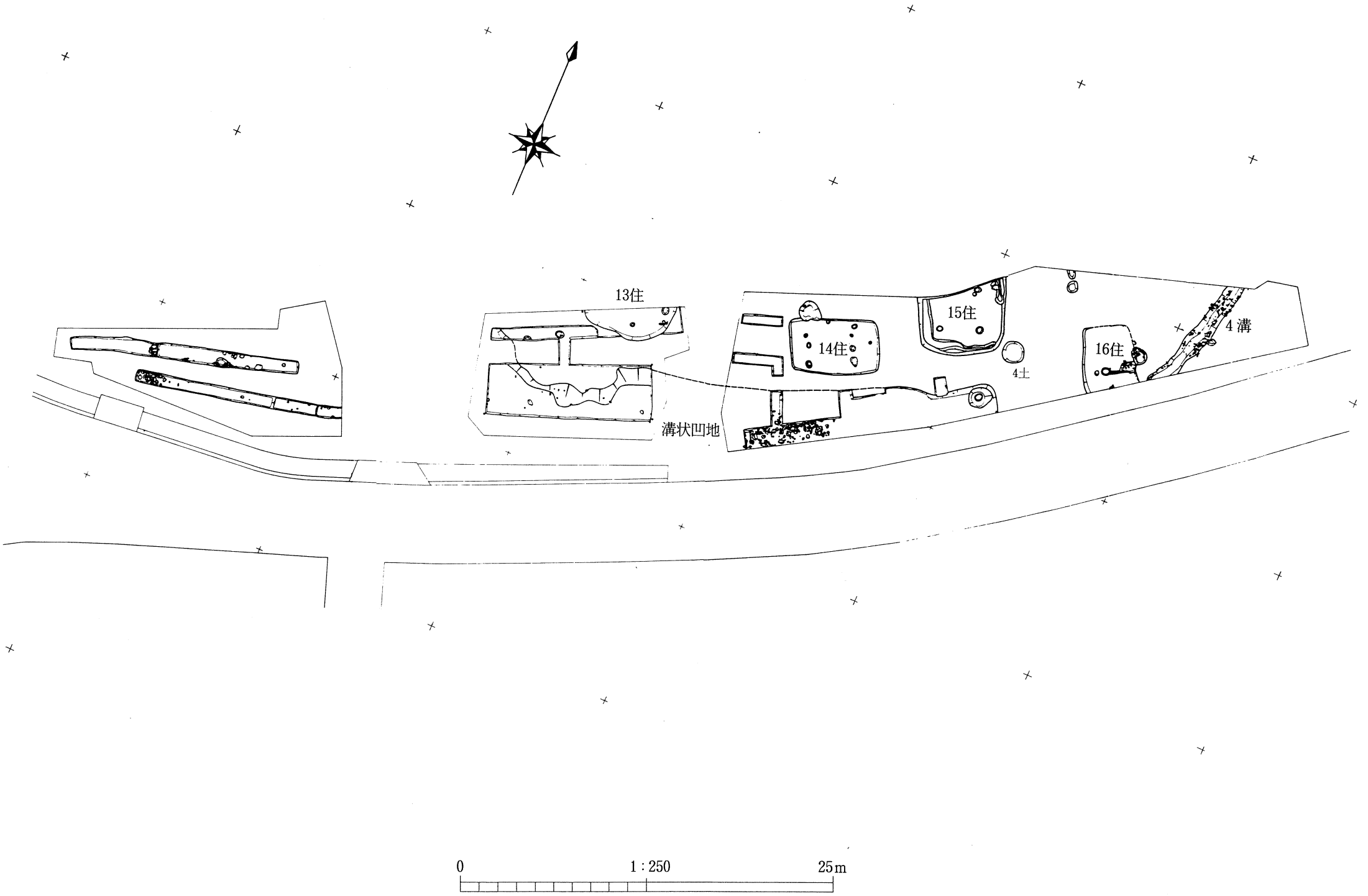
第１図　後田堂ノ前遺跡①と周辺の遺跡（１：25,000）



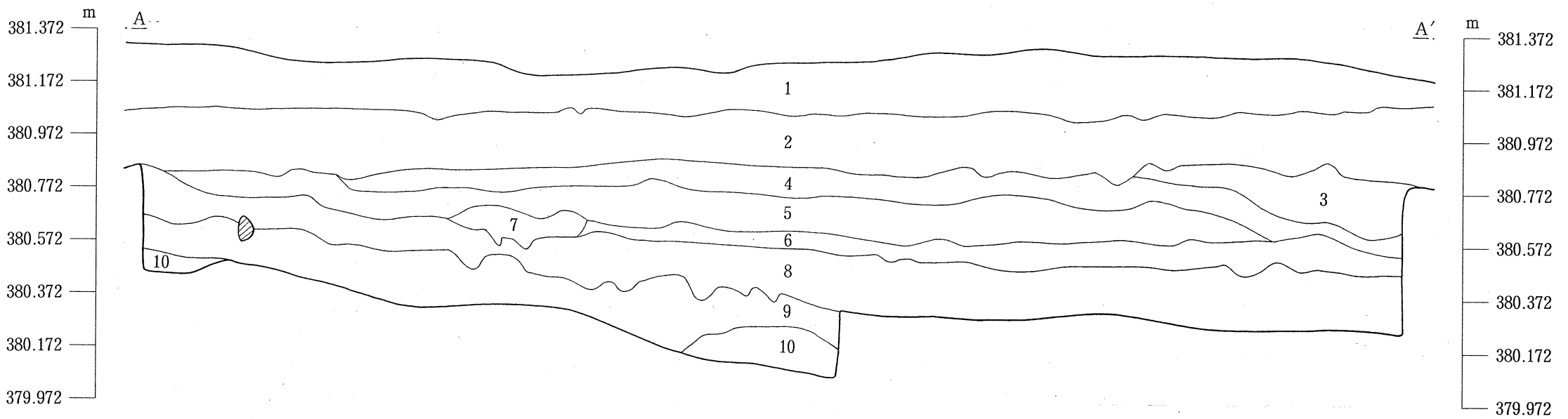
第2図　調査区位置図（1：750）

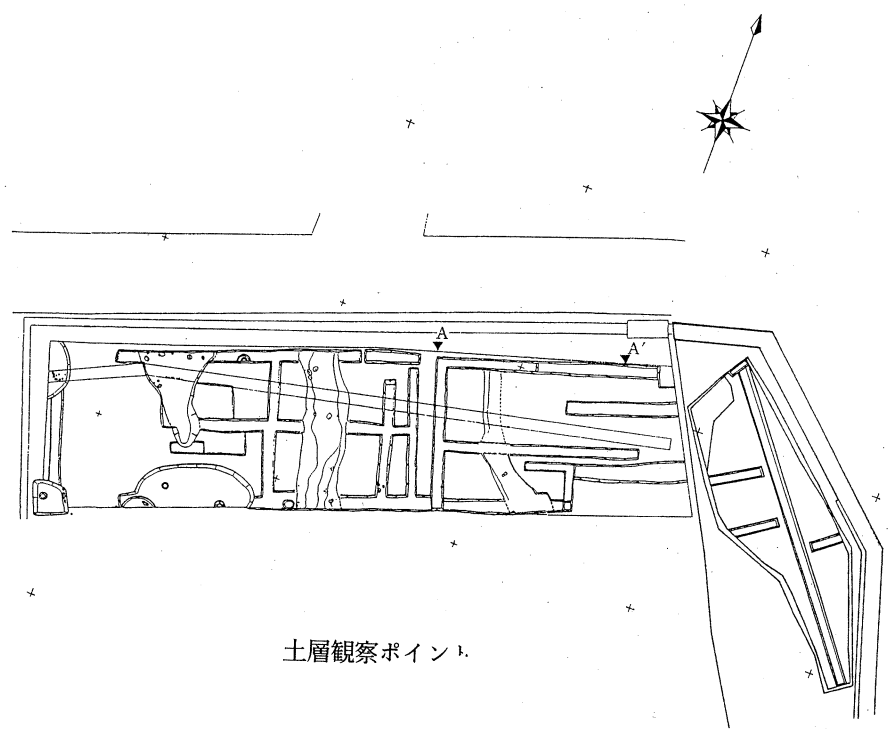


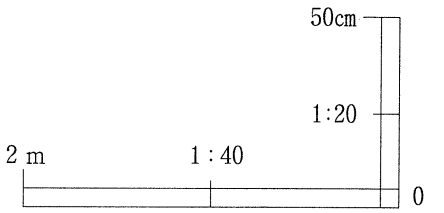
第 3 図　第1～3調査区遺構全体図



第 4 図　第4・5調査区遺構全体図







1、灰色土～水田耕作土

2、明褐色土～水田床土

3、灰褐色土～白・黒色粒子を含み、小礫が混る。
班鉄が散見される。しまり、粘性あり

4、明褐色土～炭化物を含み、小礫・砂粒が若干混る。
しまりあり、粘性あり

5、暗灰色土～やや褐色味を帯び、しまりのない土である。
小礫・微砂粒が混る。粘性あり

6、暗褐色土～酸化鉄の沈着が顕著、小礫・砂粒が混る。
しまりあり、粘性あり

7、灰黒色砂礫土～第3号溝の覆土となる。礫・砂粒が多量に混る。
しまりあり、粘性あり

8、黒色粘質土～褐色土・灰色土が班状に混り、微砂粒を含む。
しまりなく、粘性強い。

9、灰褐色粘質土～黒色土・褐色土が班状に混り、微砂粒・小礫を
僅かに含む。しまりなく、粘性強い。

10、暗灰褐色土～砂粒・小礫を多量に含み、しまりがなく、粘性あり

第5図　基本層序

第3章　遺構と遺物

調査の結果、竪穴住居址16軒・土坑5基・集石土坑1基・溝状遺構4条・水田址が検出された。以下住居址・土坑・溝状遺構・水田址の順に説明していく。

第1節　住居址と出土遺物

第1号住居址（第6図）

カマドの存在から住居址と確認できたが、遺構の重複関係を見誤ったため規模・形態・内部施設など詳細に無し得なかった。僅かに土層断面よりおおよその範囲と壁の立ち上がり及び掘り込みが確認できた。平安時代の住居址である。

（位置）　第3区に位置する。

（規模・形態）　土層堆積から範囲を推移すると南西約4.80m程度、南北は約2.50mの範囲を確認した程度である。隅丸方形を呈するだろう。

（覆土）　4層からなるが、1・2層は旧水田の耕作土と床土であり、実際は3・4層の褐色土が覆土となる。覆土下層には焼土・炭化物が多量に混じり、焼失建物であった可能性もある。

（内部施設）　前述したように僅かに土層堆積から得られる情報のみとなってしまったが、掘り込みは約25cmを測り、壁は外傾して立ち上がる。床面は僅かに一部、踏み固められたところが存在した。

（カマド）　住居北壁中央に掘り込まれていたと推定できる。構築石材が僅かに残る状態であった。推定規模は長軸85cm、短軸50cm、深さ15cm程となる。覆土には炭化物・暗褐色土が混じる焼土層が約5cm堆積していた。

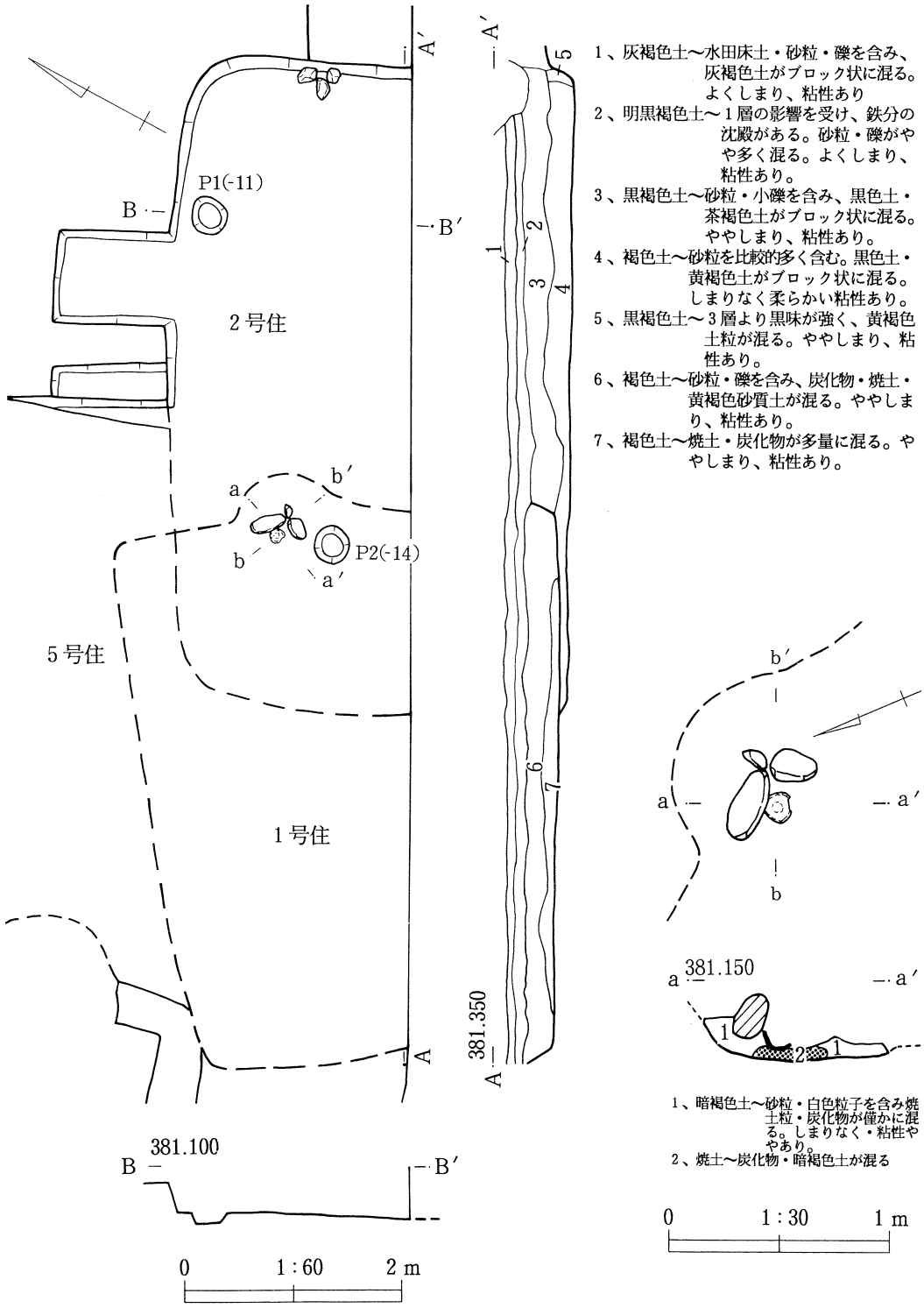
遺物（第7図）

本住居址に確実に伴う遺物はカマド内より出土した1の坏1点のみである。底部回転糸切り未調整で、口唇部が丸く、底部よりやや内湾気味に立ち上がる。器壁は厚く、「甲斐型」坏の消滅以後に位置付けられる土器である。11c前葉に位置付けられる。2～4は覆土中よりの出土である。2・3の坏は1と同様のものであろう。4は灰釉陶器の椀である。5の甕の口縁部片は5号住からの混入であろう。古墳時代後期に位置付けられる。

〈第1号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

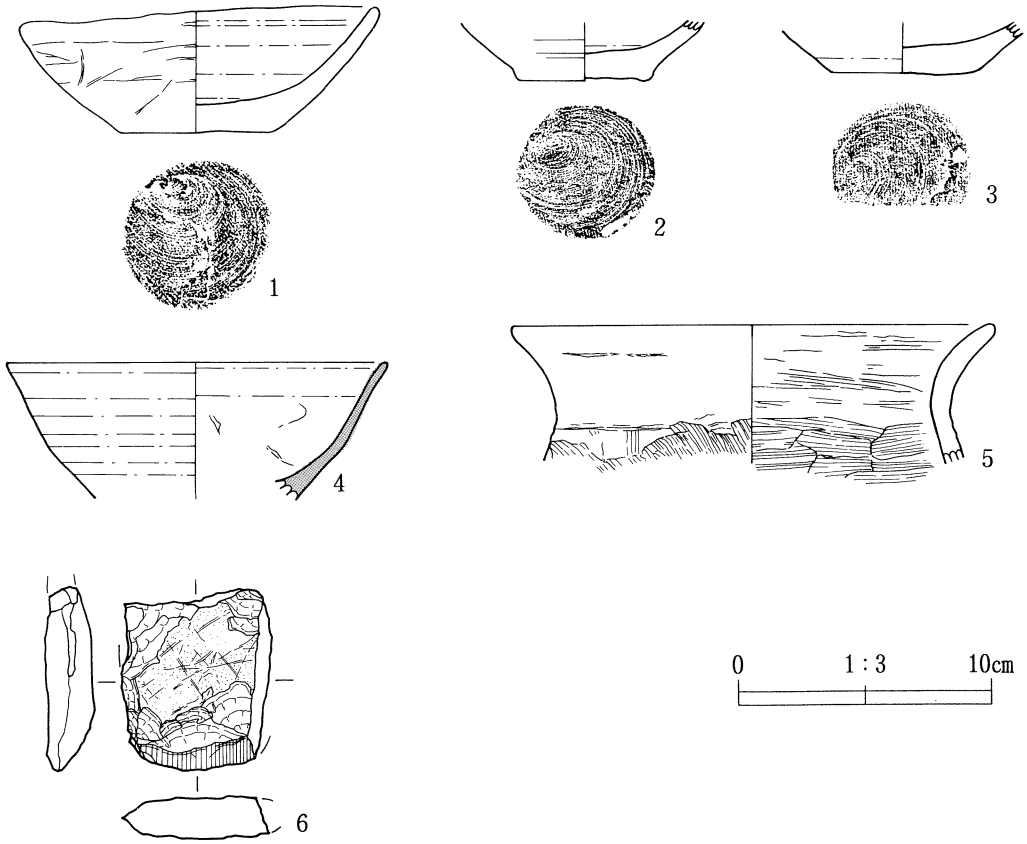
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	4.9，14.2，6.0	赤・白色粒子を含み密	灰赤色 灰褐色	(内・外)ロクロ撫で 底部回転糸切り痕	略完形



第6図　1、2号住居址実測図

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
2	土師器	坏	(2.3), ―― ,(5.4)	砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内・外)ロクロ撫で 底部回転糸切り痕	底部破片
3	土師器	甕	(2.0), ―― , 5.6	赤・白・黒色砂粒を含み密	にぶい橙色	底部回転糸切り痕	底部破片
4	灰釉陶器	椀	(5.4),(15.0), ――	白色砂粒を含み密	暗灰褐色	(内・外)ロクロ撫で	口縁部破片
5	土師器	甕	(6.3),(19.0), ――	赤色粒子・砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)横刷毛目 (外)口縁部横撫で、胴部斜位刷毛目	口縁部 1／5残
6	石　器	打製石斧				石器観察表（P65）に一括する	



第7図　第1号住居址出土遺物

第２号住居址（第６図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して黒褐色土の広がりと掘り込みを確認した。調査区外に南側約1／2程度が広がり、西側では第１・５号住居址と重複関係にある。結果として約1／4程度が確認されたのみで、加えて炉などの内部施設は定かではないため住居址と認定して良いものか不安が残る。時期は不明である。

（位置）　第３区に位置する。

（規模・形態）　土層の堆積状況から推定すると東西5.79ｍ程となり、南北方向は2.20ｍ程が確認された。小判形を呈するであろうか。

（覆土）　５層からなる。１・２層は旧水田の耕作土と床土であり、実際は３～５層が覆土となる。堆積状況から第１号住居址に切られているのは明瞭であるが、第５号住居址との新旧関係は判然となし得なかった。

（内部施設）　前述したようにカマド等の住居址内部施設は検出されなかった。壁高は東壁で27㎝、北壁で26㎝を測りほぼ垂直に立ち上がる。ピットは２つ確認された。Ｐ１は径36×32㎝、深さ11㎝、Ｐ２は径34×32㎝、深さ14㎝を測る。

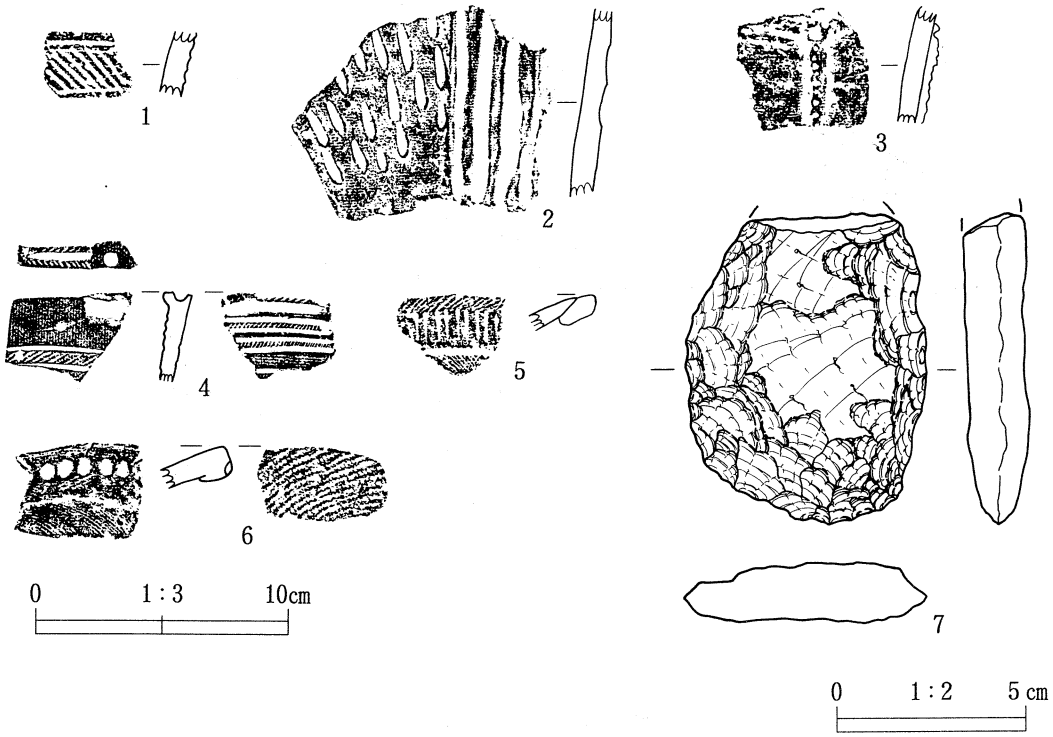
遺物（第８図）

いずれも覆土中からの出土であり、しかも時期的にばらつきがあるため、はたして本住居址に伴うものが判然としない資料ばかりである。１～４は縄文土器で、１は五領ケ台式、２は曽利式、３は堀之内式、４は加曽利Ｂ１式にそれぞれ比定できる。５・６は弥生時代後期の折り返し口縁壺の口縁部片である。

〈第２号住居址出土遺物一覧〉

（単位　㎝）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	縄文土器	深鉢	―，―，―	金色雲母・砂粒を含む	褐色	(外)横位沈線間に斜行沈線	破片
2	縄文土器	深鉢	―，―，―	金色雲母・砂粒を含む	暗褐色	(外)刺突文・隆帯貼付	破片
3	縄文土器	深鉢	―，―，―	金色雲母・石英・砂粒を含む	灰褐色	(外)隆帯貼付	破片
4	縄文土器	鉢	―，―，―	金色雲母を含む	にぶい黄褐色 黒褐色	(内)横位の沈線間に刺突文 (外)横位の沈線間に単節ＬＲ縄文 口唇部刻み	口縁部破片
5	縄文土器	壺	―，―，―	金色雲母・白色粒子を含む	褐色	(外)櫛歯状工具による刺突文	口縁部破片
6	縄文土器	壺	―，―，―	金色雲母・石英・砂粒を含む	明褐色	(内)単節ＬＲ縄文 (外)刷毛目　口縁部刻み	口縁部破片
7	石器	打製石斧				石器観察表（Ｐ65）に一括する	



第8図　第2号住居址出土遺物

第3号住居址（第9図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して黒褐色土の広がりと掘り込みを確認した。遺構の大部分は調査区外に広がる。出土遺物は大部分平安時代に属するものである。カマドなど内部施設が確認できなかったため、掘り込みのみから判断した。住居址と認定するのにやや不安な遺構である。

（位置）　第3区に位置する。

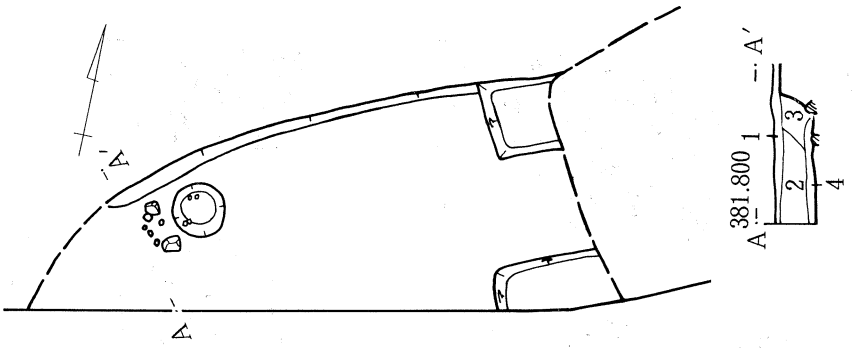
（規模・形態）　南北方向1.84m、東西方向4.75mを検出したにすぎず、形態は不明である。

（覆土）　4層からなる。暗褐色土を主体とした覆土で焼土・炭化物の混入が認められた。

（内部施設）　柱穴、周溝、カマド等は検出されなかった。壁高は北壁で23cmを測り、外傾して立ち上がる。床面は特に硬化した部分は無かった。

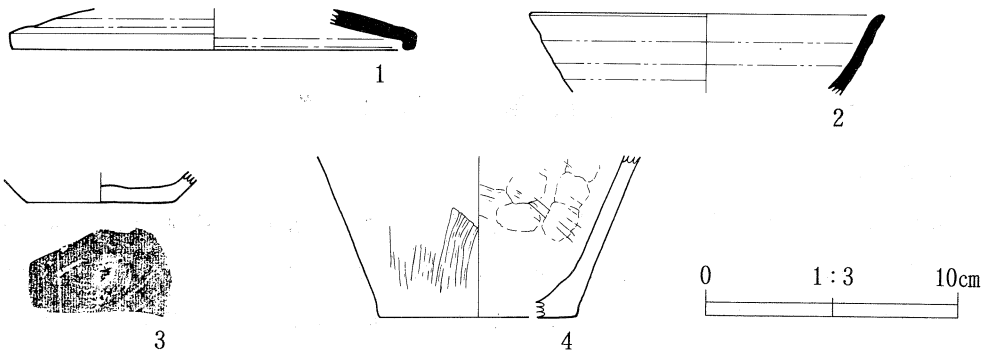
遺物（第9図）

いずれも覆土中から細片となって出土したものである。1・2は須恵器蓋と坏、3・4は「甲斐型」の坏と甕である。3の坏は底部糸きり離し後、外周のみヘラケズリしている。暗文は観察できない。9世紀前半以降に位置付けられよう。4の甕は外面縦方向のハケメが、内面には横方向のハケメが施される。



1、暗茶褐色土～砂粒・礫を含み、よくしまりかたい。
粘性ややあり、水田床土。
2、暗褐色土～砂粒・小礫を含み、焼土粒・炭化物が若干混る。しまりややあり、粘性強。
3、暗褐色土～2層より焼土・炭化物が多く混る。
しまりややあり、粘性強。
4、黒褐色土～砂粒を多く含み、しまりなくやわらかい。
粘性強。

0　1:60　2 m



第9図　第3号住居址実測図・出土遺物

〈第3号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 (内面) (外面)	整形・特徴・その他	残存率
1	須恵器	蓋	(1.5),(15.8), ——	白・黒色粒子を含む	灰色	(外)回転ヘラ削り	口縁部破片
2	須恵器	坏	(3.1),(14.0), ——	白色粒子を含む	灰色	(内・外)ロクロ撫で	口縁部破片
3	土師器	坏	(1.2), —— ,(5.8)	白色粒子を含む	橙色	底部回転切り痕	底部破片
4	土師質	甕	(6.3), —— ,(7.8)	金色雲母・石英・白色粒子を多く含む	暗褐色 黒褐色	(内)指頭痕 (外)縦刷毛目、二次焼成によりおこげが付着	底部～体部破片

第４号住居址（第10図）

遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して褐色土中に黒褐色土の落ち込みを確認する。街灯が設置されていた住居址中央部分は調査を諦めざるを得なかった。奈良時代の住居址である。

（位置）　第３区に位置する。主軸はＮ－74°－Ｅをとる。

（規模・形態）　南北方向3.90ｍ、東西方向4.12ｍを計測し、隅丸方形を呈する。

（内部施設）　調査された範囲からは柱穴、周溝等は検出されなかった。壁高は東壁が35㎝、北壁が27㎝を測り、比較的緩やかに立ち上がる。床面はカマド南側がやや低くなる以外ほぼ平坦である。また床面には硬化した部分など認められなかった。

（カマド）　住居址東壁の南東コーナー寄りに掘り込まれ、煙道部は５号住と切りあっている。袖石が僅かに残り、カマド周辺全体に焼土粒が散っていた。長軸約1.19ｍ、短軸0.78ｍ、床面からの掘り込み９㎝を測る。カマド北側には掘り込みと焼土粒の集中がみられた。作り替えがあったものと思われる。

遺物（第11図）

図化できたのは僅かであった。１は床面直上から、２は覆土より、３・４はカマド内からそれぞれ出土した。１は盤状坏で、底部は雑にヘラケズリされる。２の須恵器坏は還元されてはいない。底部糸きり離し後、外周のみナデられている。３はロクロ整形土師器甕である。４の甕は口縁部が僅かに外反するのみで、以下直線的に胴部へ達する器形となる。外面粗いハケメが施されている。

〈第４号住居址出土遺物一覧〉

（単位　㎝）

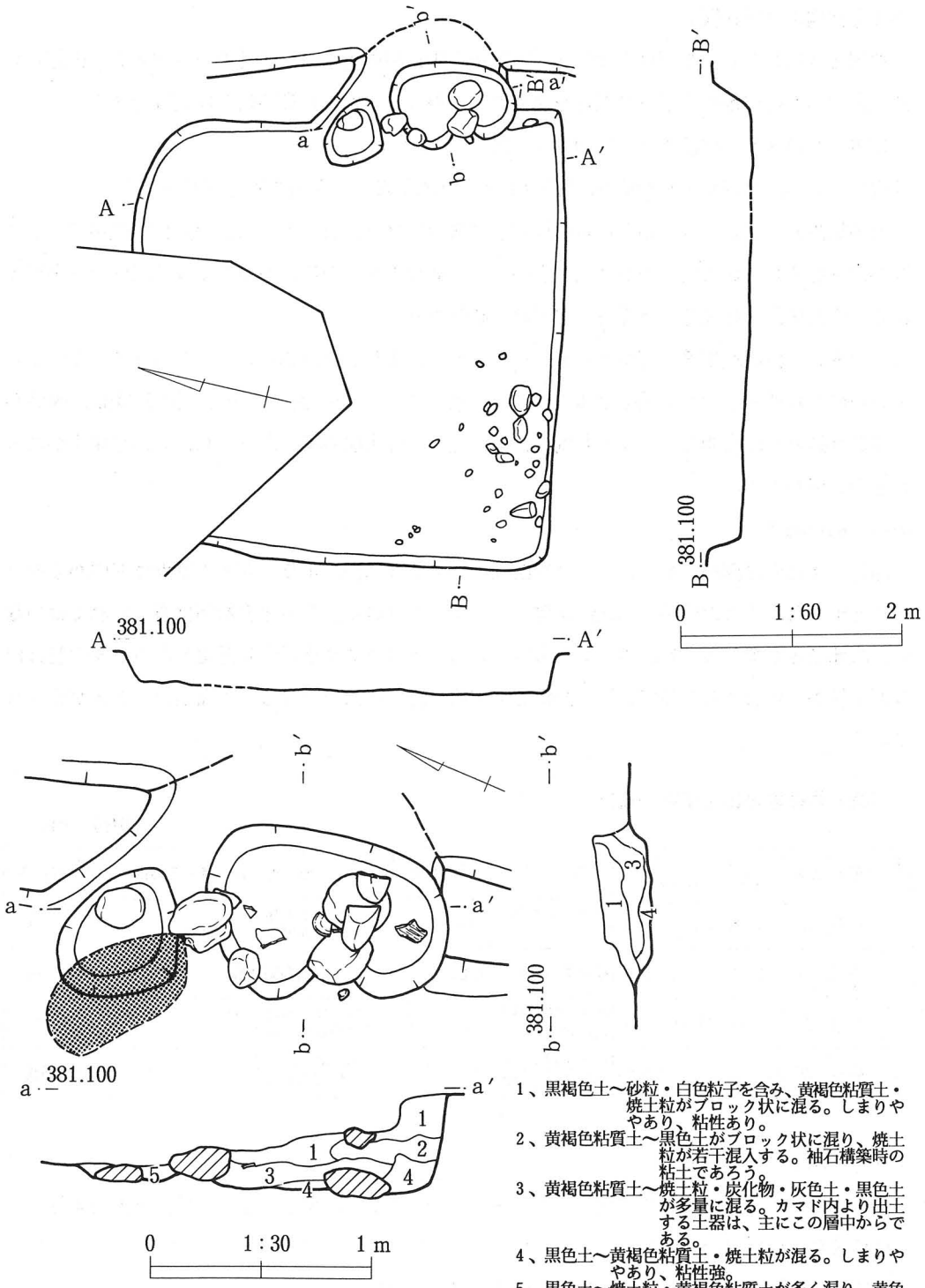
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	4.0，15.2，10.0	赤色粒子を含み密	橙色	(外)ロクロ撫で 底部雑なヘラ削り	4／5残
2	須恵器	坏	(2.6)，――，7.6	砂粒を含み密	橙色	底部回転糸切り痕	底部破片
3	土師器	甕	(14.7)，(25.0)，――	赤・黒色砂粒を含み密	にぶい黄橙色	(内)輪積み痕あり (外)ロクロ撫で	1／6残
4	土師器	甕	(12.1)，――，(9.0)	金色雲母・白色砂粒を多く含む	にぶい赤褐色	(内)刷毛目・撫で (外)縦刷毛目	1／6残

第５号住居址（第12図）

トレンチ掘り下げに際して黒褐色土の落ち込みを検出した。第１・２・４号住と重複する。古墳時代後期に位置付けられる。

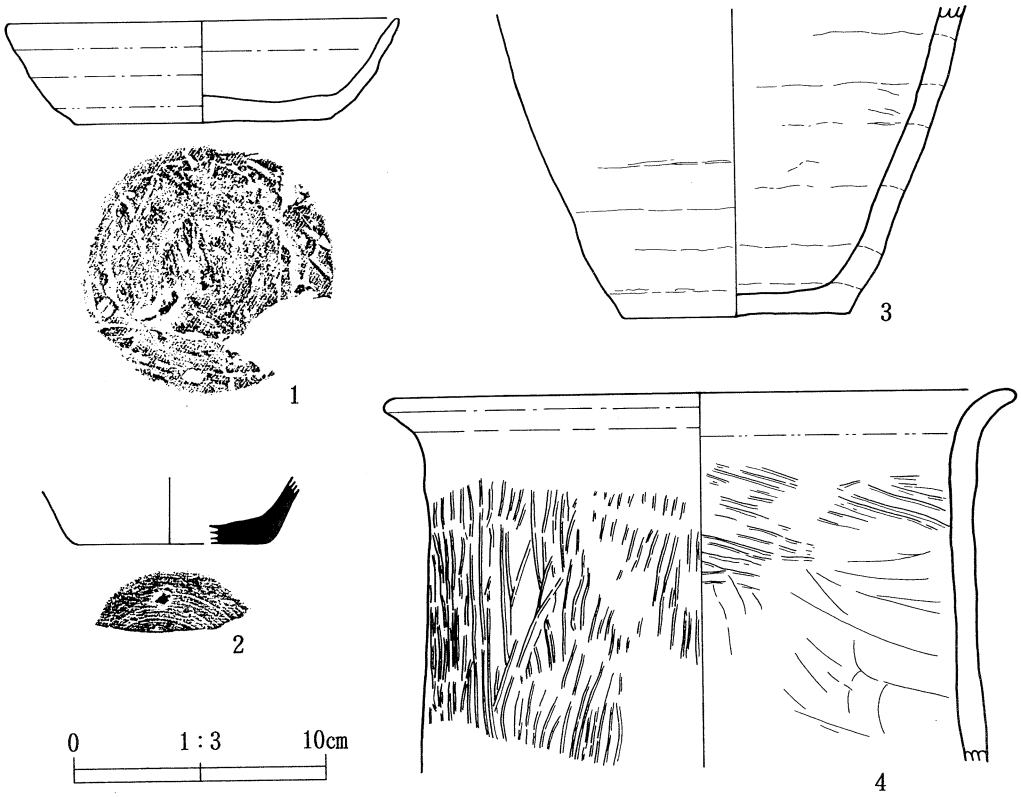
（位置）　第３区に位置する。長軸方向はＮ－21°－Ｗである。

（規模・形態）　南北方向3.98ｍ、東西方向4.92ｍとなる。形態は隅丸方形を呈する。



1、黒褐色土～砂粒・白色粒子を含み、黄褐色粘質土・焼土粒がブロック状に混る。しまりややあり、粘性あり。
2、黄褐色粘質土～黒色土がブロック状に混り、焼土粒が若干混入する。袖石構築時の粘土であろう。
3、黄褐色粘質土～焼土粒・炭化物・灰色土・黒色土が多量に混る。カマド内より出土する土器は、主にこの層中からである。
4、黒色土～黄褐色粘質土・焼土粒が混る。しまりややあり、粘性強。
5、黒色土～焼土粒・黄褐色粘質土が多く混り、黄色砂質土がブロック状に混る。しまりややあり、粘性あり。

第10図　第４号住居址実測図



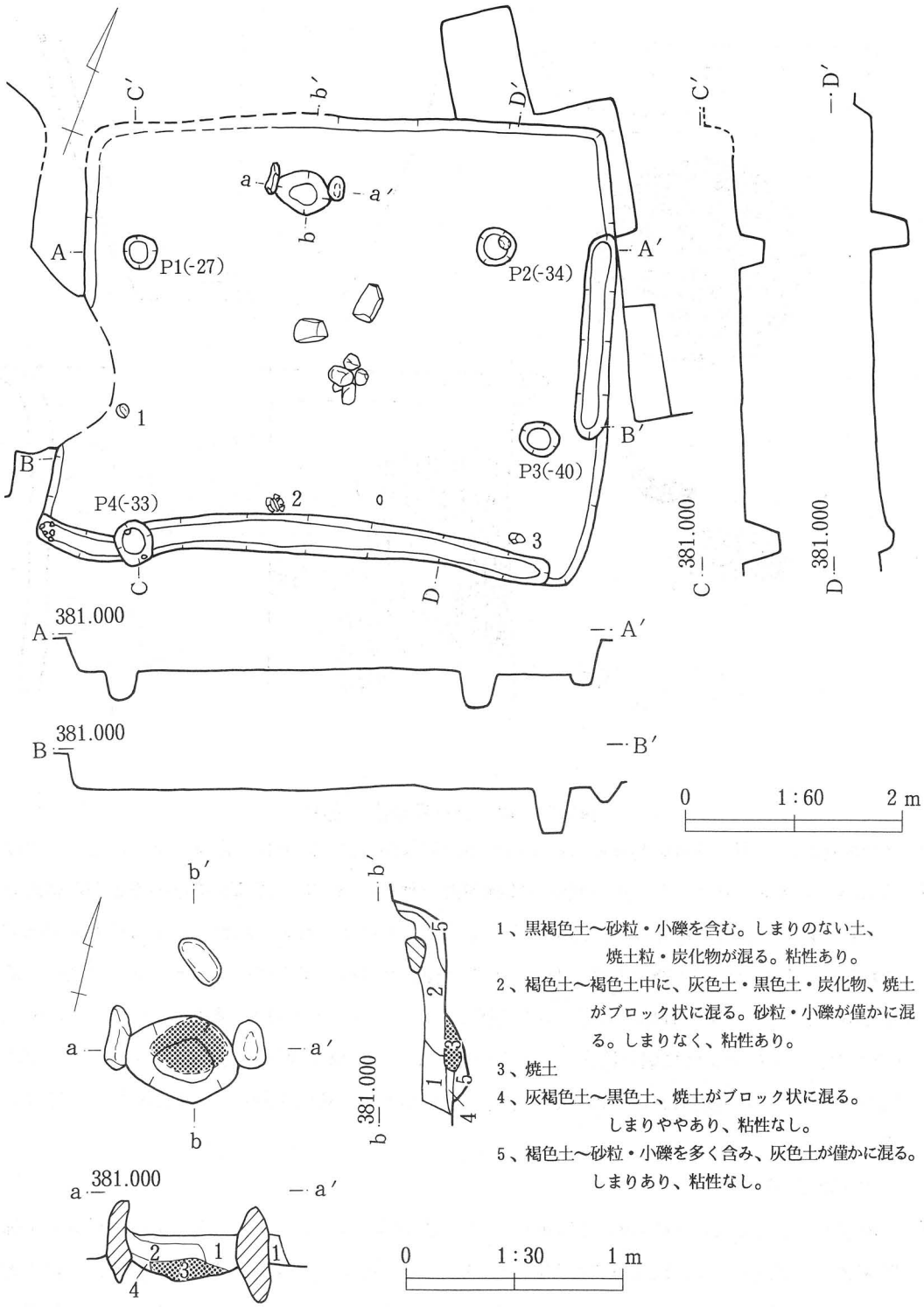
第11図　第４号住居址出土遺物

（内部施設）　南壁は重複関係にあるため検出出来なかった。北壁は北西コーナーからカマド部分にかけて攪乱されていた。東、西壁は30cm前後を測る。部分的に周溝が東壁中央と南壁に認められた。幅22～36cm、深さ６～20cm程度となる。ピットは４つ確認された。Ｐ１は径32×32cmで深さ27cm、Ｐ２は径36×35cmで深さ34cm、Ｐ３は径37×30cmで深さ40cm、Ｐ４は径33×40cmで深さ33cmとなり、いずれも規模・形態ともに同様である。この内Ｐ４は他の遺構に伴うものであろう。

（カマド）　住居址北壁に掘り込まれ、袖石が残っていた。煙道部は攪乱されていたため一部不明瞭であった。長軸約91cm、短軸73cm、床面からの掘り込み10cmを測る。焼土が約10cmの厚さで堆積していた。

遺物（第13図）

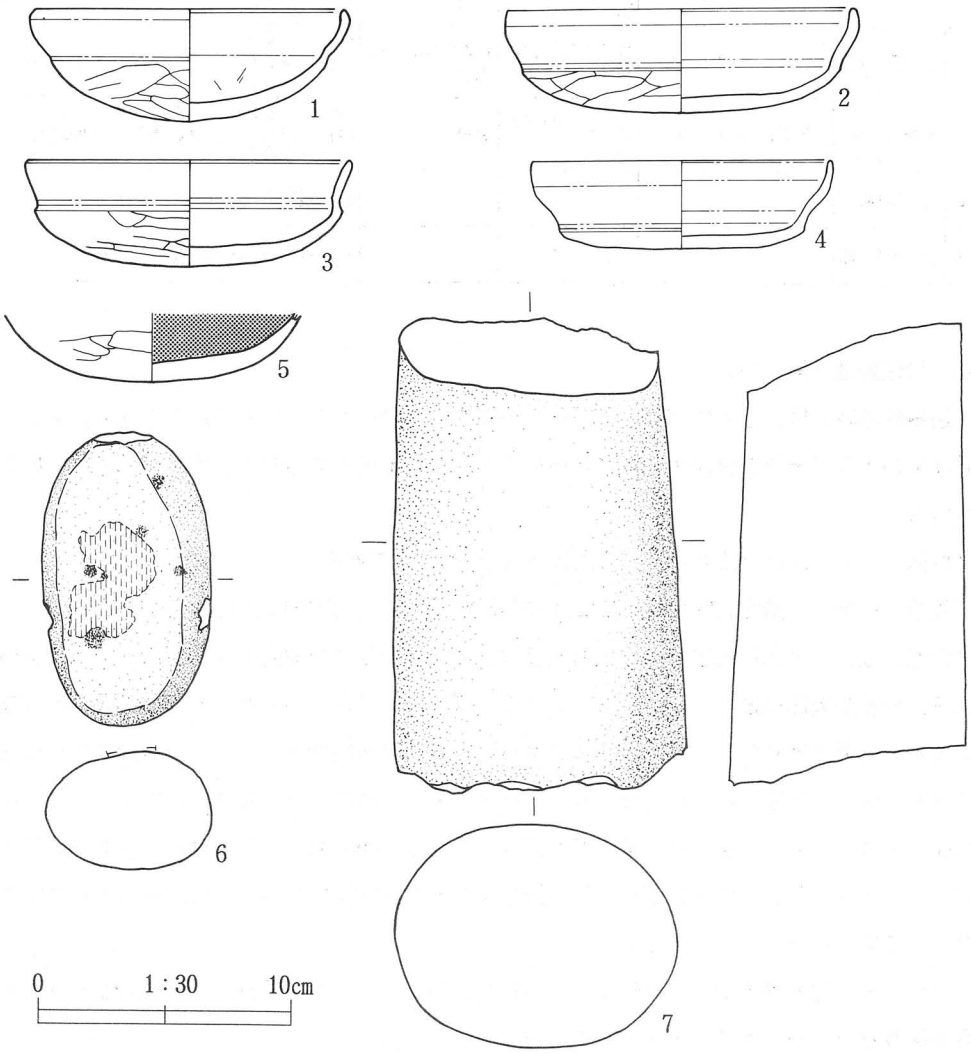
遺物の出土は少ないものの器形が判断出来る土器が得られた。いずれも須恵器坏蓋模倣の土師器坏ばかりである。１、２、４は口唇部に到り内湾するもので、３は屈曲部から口縁部にかけて大きく外反する形態となる。１は床面より若干浮いて出土したものであるが、口縁部を一部欠損する以外、完形である。外面に屈曲部があり稜を有する。底部は丸底となり、内面には屈曲部が見られず、「椀形」を指向するものである。２～４は体部と口縁部の境に屈曲部を有し、いずれも平



1、黒褐色土～砂粒・小礫を含む。しまりのない土、焼土粒・炭化物が混る。粘性あり。
2、褐色土～褐色土中に、灰色土・黒色土・炭化物、焼土がブロック状に混る。砂粒・小礫が僅かに混る。しまりなく、粘性あり。
3、焼土
4、灰褐色土～黒色土、焼土がブロック状に混る。しまりややあり、粘性なし。
5、褐色土～砂粒・小礫を多く含み、灰色土が僅かに混る。しまりあり、粘性なし。

第12図　第５号住居址実測図

底気味となる。2・3は床面直上から、4覆土中からの出土である。5は床面直上から細片となって出土したもので、底部から口縁部かけて著しく欠損する。底部ヘラケズリ後ヘラミガキされる。6の磨石様の石は先端に敲打痕があり、磨面も僅かにある。7は縄文時代の石棒である。



第13図　第5号住居址出土遺物

〈第5号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 (内面 外面)	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	4.4，12.2，——	赤・白色粒子を含み密	橙色～にぶい橙色	(内)ヘラ磨き　内・外面一部黒変している (外)口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ削り後ヘラ磨き	口縁部～体部一部欠損
2	土師器	坏	4.1，13.8，——	金色雲母・赤・白色粒子を含み密	褐色	(内)ヘラ磨き (外)口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ削り後ヘラ磨き	3／4残

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
3	土師器	坏	4.2，12.6，—	金色雲母・赤・白色粒子を含み密	にぶい赤褐色～暗褐色	(内)ヘラ磨き (外)口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ削り後ヘラ磨き	口縁部一部欠損
4	土師器	坏	3.5，12.0，—	金色雲母・白色粒子を含み密	にぶい褐色～黒褐色	(内)ヘラ磨き (外)口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ削り後ヘラ磨き	4／5残
5	土師器	坏	(2.7)，—，—	赤・白色粒子を含み密	黒褐色	(内)ヘラ磨き、黒色処理されている (外)口縁部ヘラ磨き、体部ヘラ削り後ヘラ磨き	1／4残
6	石器	磨石				石器観察表（P65）に一括する	
7	石器	石棒				石器観察表（P65）に一括する	

第6号住居址（第14図）

遺構確認時に黒色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げを行なう。第7号住及び第3号土坑と重複する。7号住を切り、3号土坑に切られる。古墳時代後期に位置付けられる。

（位置）　第3区に位置する。長軸方向はN－58°－Wである。

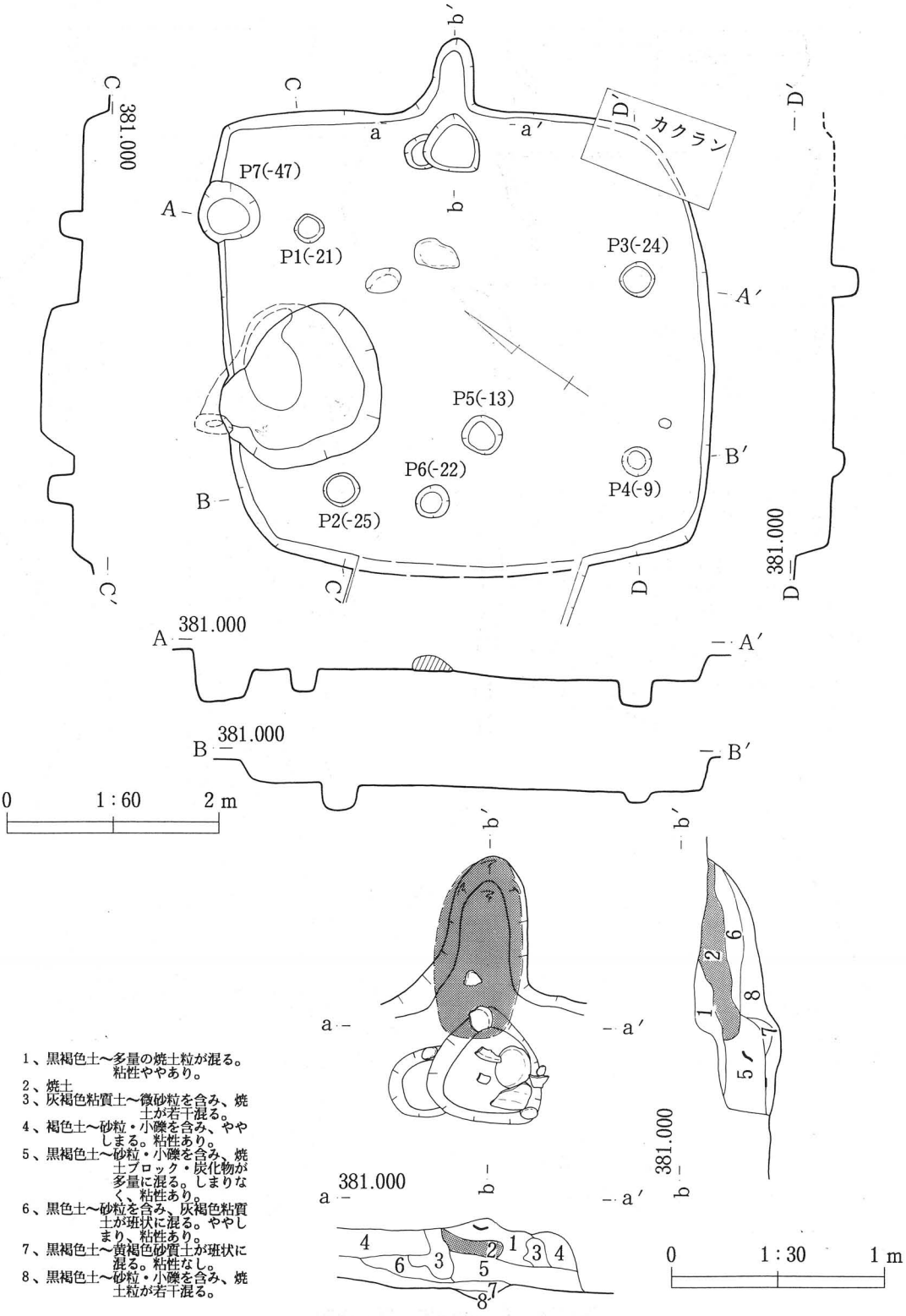
（規模・形態）　南北方向4.62m、東西方向4.26mとなる。形態は隅丸方形を呈する。

（内部施設）　壁高は南壁で30cm、南西壁付近で28cmを測りやや高くなる以外、他は20cm前後を測る。西壁中央部は掘り下げ時に壁の立ち上がりを検出できなかったため、他の遺構と重複しているものと考え掘り広げてみたが特に遺構らしきものは検出できなかった。床面には特に踏み固められて硬化した部分はなかった。ピットは7つ確認された。P1は径27×28cm、P2は径34×32cm、P3は径33×33cm、P4は径27×28cm、P5は径36×38cm、P6は径32×30cm、P7は径54×57cmとなり、P7以外いずれも平面規模・形態とも同様である。この内柱穴となり得るのはP1～4であろう。

（カマド）　住居址東壁に掘り込まれ、構築石材が残っていた。長軸1.24m、短軸40cm、床面からの掘り込み5cmを測る。焼土が厚く堆積していた。

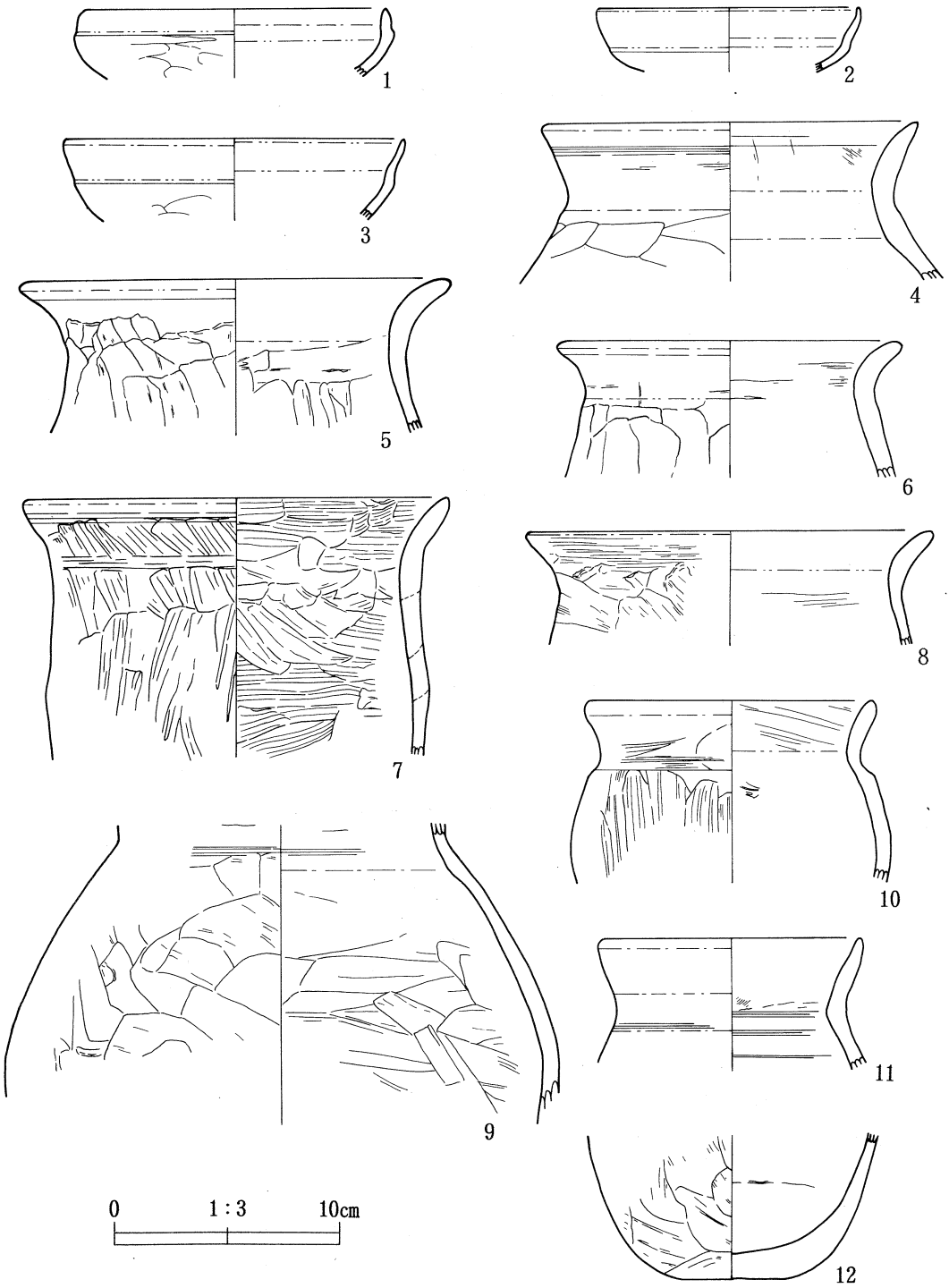
建物（第15、16図）

遺物の出土は完形とはならないものの、カマド周辺より比較的多く見られた。1～3は覆土中から出土した土師器坏である。1は口縁部が短くやや内傾気味に立ち上がる。2は口唇部に到り内湾する形態で、3はやや大型のものとなろう。4～12はカマド内あるいはその周辺より出土した土師器甕である。10、11などは小型となり、9は胴部球形となる胴張の甕である。7、10がハケメ整形される以外、他はケズリにより整形される。13～20は覆土中の混入である。今回は取り上げなかったが、縄文土器から中世の遺物がみられた。

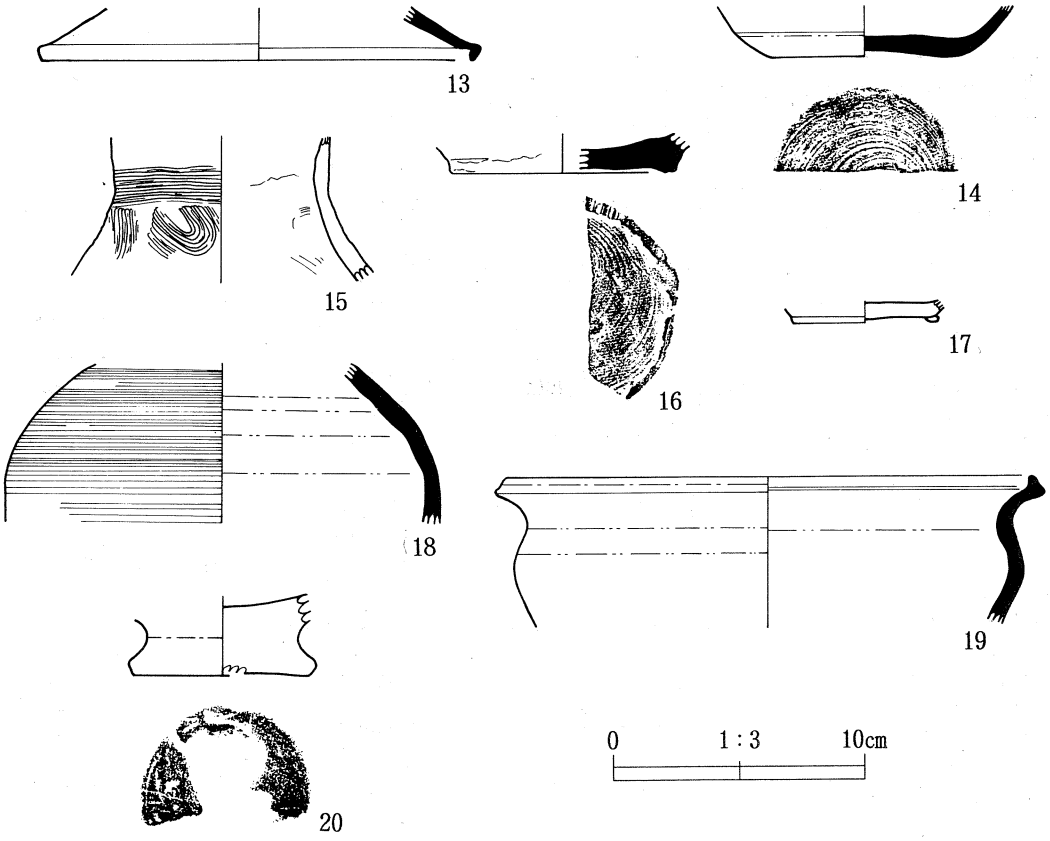


1、黒褐色土～多量の焼土粒が混る。粘性ややあり。
2、焼土
3、灰褐色粘質土～微砂粒を含み、焼土が若干混る。
4、褐色土～砂粒・小礫を含み、ややしまる。粘性あり。
5、黒褐色土～砂粒・小礫を含み、焼土ブロック・炭化物が多量に混る。しまりなく、粘性あり。
6、黒色土～砂粒を含み、灰褐色粘質土が斑状に混る。ややしまり、粘性あり。
7、黒褐色土～黄褐色砂質土が斑状に混る。粘性なし。
8、黒褐色土～砂粒・小礫を含み、焼土粒が若干混る。

第14図　第6号住居址実測図



第15図　第６号住居址出土遺物



第16図　第６号住居址出土遺物

〈第６号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 (内面 外面)	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	(3.0), (13.4), ——	赤・黒色砂粒を含み密	黒色 暗褐色	(内)横撫で (外)口縁部横撫で体部ヘラ削りの後横撫で	口縁部破片
2	土師器	坏	(2.8), (11.6), ——	黒色粒子を含み密	にぶい赤褐色	(内・外)ロクロ撫で	口縁部破片
3	土師器	坏	(2.6), (14.8), ——	赤色粒子を含み密	暗赤褐色	(内)ロクロ撫で (外)体部ヘラ削り	口縁部破片
4	土師器	甕	(7.0), 16.6 , ——	白・黒色粒子を含み密	にぶい橙色	(内)口縁部横撫で、胴部撫で (外)口縁部横撫で、胴部ヘラ削り	口縁部破片
5	土師器	甕	(6.8), 19.2 , ——	赤・白・黒色粒子を含み密	橙色	(内)口縁部横撫で、胴部ヘラ撫で (外)口縁部横撫で、胴部ヘラ削り	口縁部 1／2残
6	土師器	甕	(6.0), 15.2 , ——	白色砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)口縁部横撫で、胴部撫で (外)口縁部横撫で、胴部ヘラ削り	口縁部破片
7	土師器	甕	(11.4), 18.8 , ——	赤・黒色粒子を含み密	にぶい赤褐色	(内)横刷毛目、輪積痕あり (外)粗い刷毛目	口縁部 1／3残

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
8	土師器	甕	(5.0), 18.0 , ——	金色雲母・白・黒色砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)撫で (外)口縁部撫で、胴部ヘラ削り	口縁部破片
9	土師器	甕	(11.5), —— , ——	白・黒色粒子を多く含み密	にぶい褐色	(内)撫で (外)ヘラ削り	胴部破片
10	土師器	甕	(8.0),(12.9), ——	白・黒色砂粒を含み密	にぶい褐色	(内)撫で (外)縦刷毛目	口縁部破片
11	土師器	甕	(5.8),(11.8), ——	砂粒を含み密	赤褐色	(内・外)横撫で	口縁部破片
12	土師器	甕(?)	(5.8), —— ,(5.5)	白・黒色砂粒を含み密	褐色	(内)撫で (外)ヘラ削り	1／5残
13	須恵器	蓋	(2.1),(17.0), ——	白色砂粒を含み密	灰色	(内・外)ロクロ撫で	口縁部破片
14	須恵器	坏	(2.0), —— , 7.4	白色粒子・砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内・外)ロクロ撫で 底部回転糸切り痕	底部破片
15	弥生土器	壺	(5.7), —— , ——	砂粒を含み密	褐色 にぶい橙色	(内)横撫で (外)頸部10条１単位の平行線文、胴部U字状弧線文	頸部破片
16	須恵器	高台付坏	(1.6), —— , 9.0	白色砂粒を含み密	黄灰色	底部回転糸切り痕	底部破片
17	土師器	高台付坏	(0.9), —— , 5.8	微砂粒を含み密	灰褐色	(内)暗文あり	底部破片
18	須恵器	壺	(6.2), —— , ——	黒色砂粒を含み密	灰黄色	(内)横撫で (外)横刷毛目	胴部破片
19	須恵器	甕	(5.9), 20.8 , ——	砂粒を含み密	灰色	(内・外)ロクロ撫で	口縁部破片
20	土師質	柱状高台皿	(3.2), —— , 7.0	砂粒を含み密	橙色	底部回転糸切り痕	底部破片

第７号住居址（第17図）

第６・８号住居址と重複し、更に調査区外に一部広がる。切り合い関係から６・８号住に切られている。遺物の出土が少なく住居址の時期は古墳時代後期以前としか判断できない。

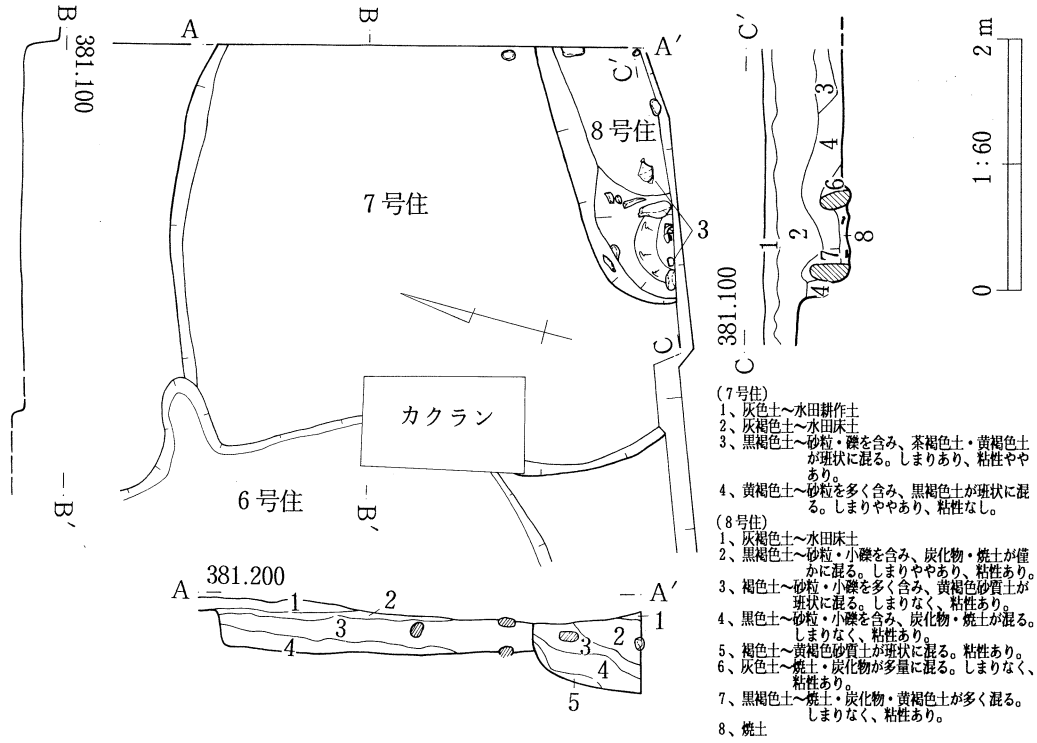
（位置）　調査第３区東端に位置する。

（規模・形態）　検出した限りで、南北方向4.00ｍ、東西方向3.38ｍとなる。形態は隅丸方形を呈するだろうか。

（覆土）　４層からなる。大部分は３層の黒褐色土であり、土層堆積から８号住に切られていることは明瞭であった。

（内部施設）　調査範囲内からはカマド、住穴、周溝等内部施設は検出されなかった。壁高は北壁で28cmを測る以外定かではない。床面は特に硬化した部分はなかった。

（遺物）　遺物の出土は小片が数点出土したのみで図化には到らなかった。



第17図　第７・８号住居址実測図

第８号住居址（第17図）

第７号住の床面精査時に黒褐色土の広がりを確認する。第７号住居址と重複関係にある。遺構の大部分が調査区外に広がるため、僅かな範囲のみの検出である。古墳時代後期に属す。

（位置）　第３区東端に位置する。

（規模・形態）　確認した範囲のみでは東西1.95m、南北0.85mとなる。形態は不明である。

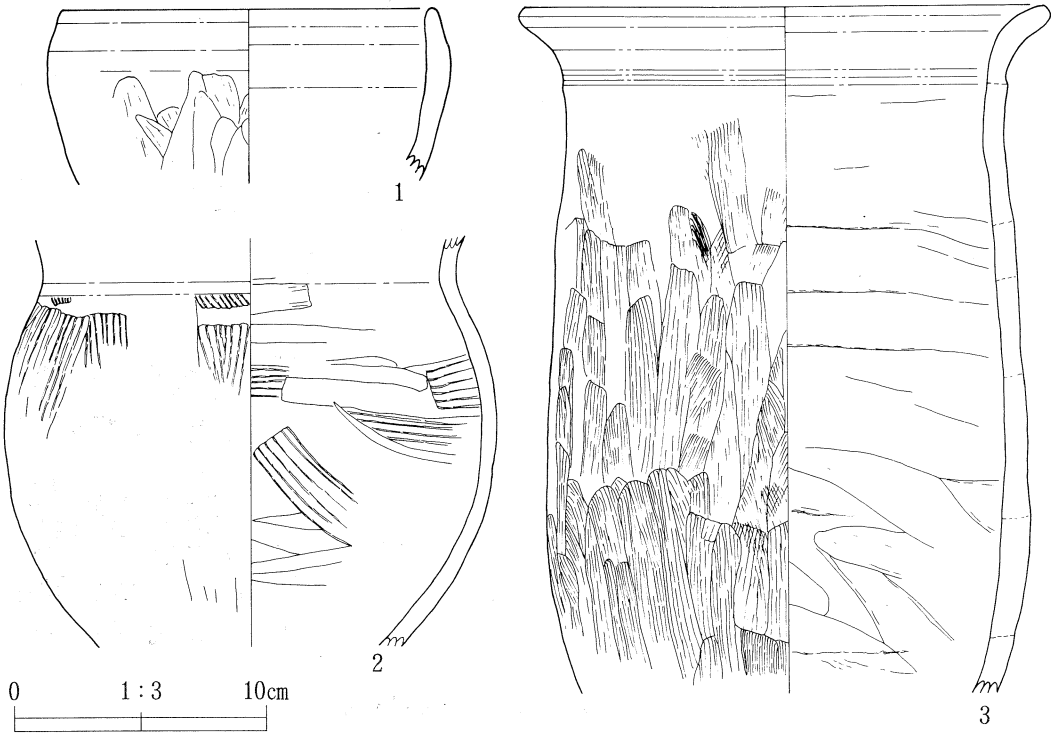
（覆土）　５層からなる。僅かな範囲であったが、レンズ状の堆積が認められた。覆土中には焼土・炭化物が多く混じっていた。

（内部施設）　前述したように僅かな検出から得られる情報のみとなってしまった。柱穴、周溝等はなくカマドを一部検出したのみである。掘り込みは約38cmを測り、壁は垂直気味に立ち上がる。床面には踏み固められたようなところはなかった。

（カマド）　住居北壁に掘り込まれていたと推定できる。両袖石が残り、検出した規模は長軸62cm、短軸86cm、深さ16cm程となる。覆土には炭化物・焼土粒が多量に混じり、焼土層が約５cm堆積していた。

遺物（第18図）

本住居址からの出土土器は必然的にカマド内及びその周辺からとなる。出土土器のほとんどは甕の破片であった。１は椀の口縁部片、２は胴部が球形となる甕で、ハケ整形の後ミガキが施される。３はハケ整形される長胴の甕である。



第18図　第８号住居址出土遺物

〈第８号住居址出土遺物一覧〉

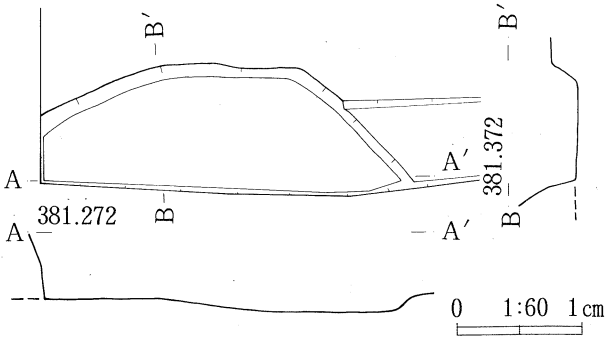
（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	埦	(6.8),(14.8), —	金色雲母・赤・白・黒色粒子を含み密	暗赤褐色	(内)横撫で (外)口縁部横撫で、体部ヘラ撫で	口縁部破片
2	土師器	甕	(15.9), — , —	金色雲母・赤・白・黒色粒子を含み密	にぶい橙色	(内)横撫で (外)頸部横撫で、胴部縦刷毛目の後磨き	1／5残
3	土師器	甕	(27.0),(21.0), —	細かい金色雲母を多く含み赤・白・黒色粒子を含み密	明赤褐色 にぶい赤褐色	(内)横撫で (外)口縁部横撫で、胴部縦刷毛目	1／2残

第９号住居址（第19図）

遺構確認のトレンチ掘り下げ時に黒褐色土の広がりを確認する。遺構の大部分は調査区外に広がり、僅かな範囲のみの検出である。柱穴、カマド等内部施設も確認できず、掘り込みのみの確認であるため住居址と認定するのに不安なものである。時期不明である。

（位置）　調査第２区西端に位置する。



第19図　第９号住居址実測図

（規模）　確認した範囲のみでは東西0.97ｍ、南北2.95ｍとなる。形態は不明である。

（内部施設）　前述したように柱穴、周溝、カマド等内部施設は検出できなかった。掘り込みは約22cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面には踏み固められたようなところはなかった。

（遺物）　本遺構から出土遺物はなかった。

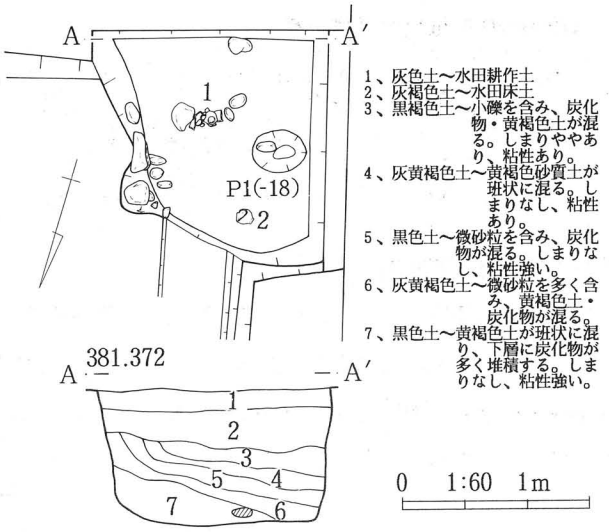
第10号住居址（第20図）

遺構確認時に黒褐色土の広がりを確認し、掘り下げを行う。大部分が調査区外に広がるため、僅かな範囲の調査であった。掘り込みが深く、水路の際だったため常に水が差すような状態であった。弥生時代後期に位置付けられる住居址である。

（位置）　第２区西端に位置する。

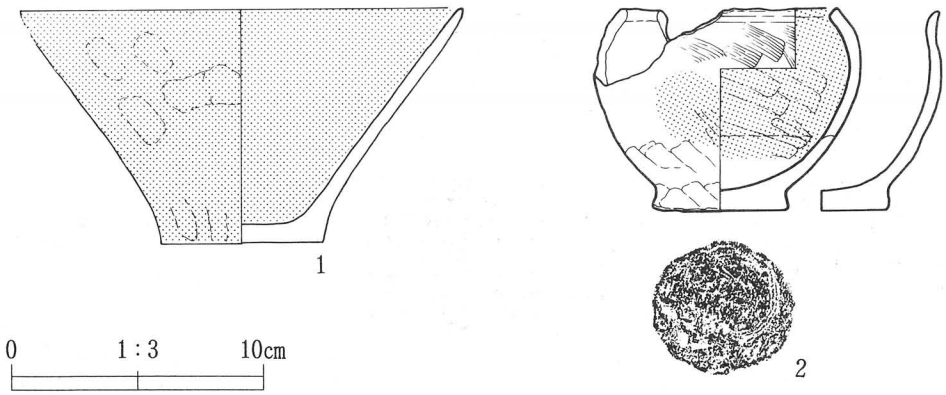
（規模・形態）　調査した範囲で東西1.79ｍ、南北1.86ｍを測る。

（覆土）　７層となるが、この内３層以下が住居址覆土となっている。黒色土と灰黄褐色土が交互にレンズ状に堆積しているのが明瞭に観察できた。



第20図　第10号住居址実測図

（内部施設）　僅かにピットが１つ確認された。径43×34cmと平面楕円形となり、深さは18cmを測る。住居址の掘り込みは54cmあり他に柱穴、周溝等は検出できなかった。床面は硬化した部分はなく軟弱であった。



第21図　第10号住居址出土遺物

遺物（第21図）

床面直上より２点の土器が得られた。１は内外面とも丁寧にミガキが施され、赤彩される鉢、２は一部欠損するもののほぼ完形となる片口土器である。体部はハケ整形の後ナデによってハケメが消されている。内外面とも一部赤彩されている。

〈第10号住居址出土遺物一覧〉　　（単位　cm）

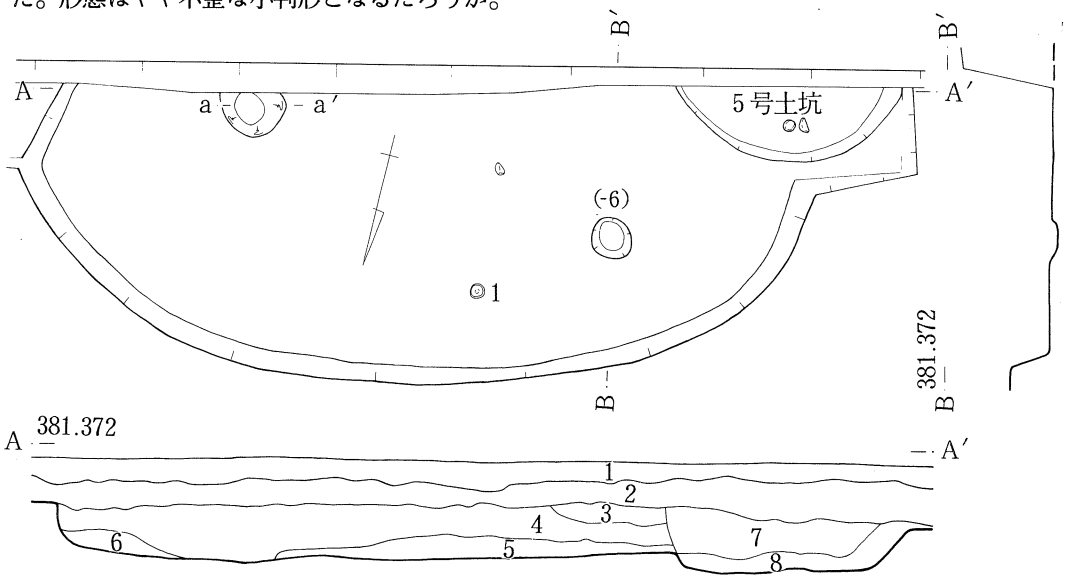
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	弥生土器	鉢	9.2，(17.4)，6.4	金色雲母・白・黒色粒子を含み密	赤色 赤褐色	(内)撫で、赤彩 (外)撫で、指頭痕、赤彩	3／4残
2	弥生土器	注口土器	8.0，9.3，5.4	金色雲母・白・黒色粒子を含み密	明赤褐色 (内側底黒変)	(内)口縁部横撫で、胴部ヘラ撫で (外)口縁部横撫で、胴部刷毛目後撫で 底部回転糸切り後ヘラ削り	4／5残

第11号住居址（第22図）

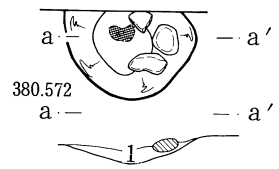
南側半分は調査区外に広がり、第５号土坑と重複する。弥生時代後期の住居址である。

（位置）　第２区に位置する。主軸方向はＮ－78°－Ｅである。

（規模・形態）　調査区外に一部広がるため定かではないが、東西6.31ｍ、南北2.28ｍを検出した。形態はやや不整な小判形となるだろうか。



1、灰色土～水田耕作土
2、灰褐色土～水田床土
3、黒褐色土～微砂粒を含み、しまり、粘性ややあり。
4、黒褐色土～砂粒・小礫を含み、僅かに炭化物・黄褐色土が班状に混る。しまりなし、粘性あり。
5、黒褐色土～４層より黄褐色土が多量に混る。しまりややあり、粘性あり。
6、黄褐色土～黒褐色土が班状に混る。しまりややあり、粘性あり。
7、黒褐色土～砂粒・小礫を含むしまりややあり、粘性あり。
8、黒褐色土～黄褐色土が班状に多量に混る。７層より黒味も弱い。しまりなく、粘性あり。



1、灰黒色土～黒色土・灰黄色土・焼土が班状に混る。しまりなし、粘性あり。

0　1:60　2 m

0　1:30　50cm

第22図　第11号住居址実測図

（覆土）　覆土の大部分は黒褐色土であり、僅かに炭化物が混入する程度であった。遺物の出土はほとんど見られなかった。土層の堆積状況から５号土坑に切られていることが理解できた。

（内部施設）　壁高は北壁で37cmを測り、外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦であった。ピットは１つ検出され、径32×32cmの平面正円形で深さ６cmとなる。

（炉）　住居ほぼ中央東側に偏って検出され、調査区外に一部広がる。確認された範囲で長軸52cm、短軸35cmとなり、深さは10cmである。礫が「コ」の字形に配されていた。

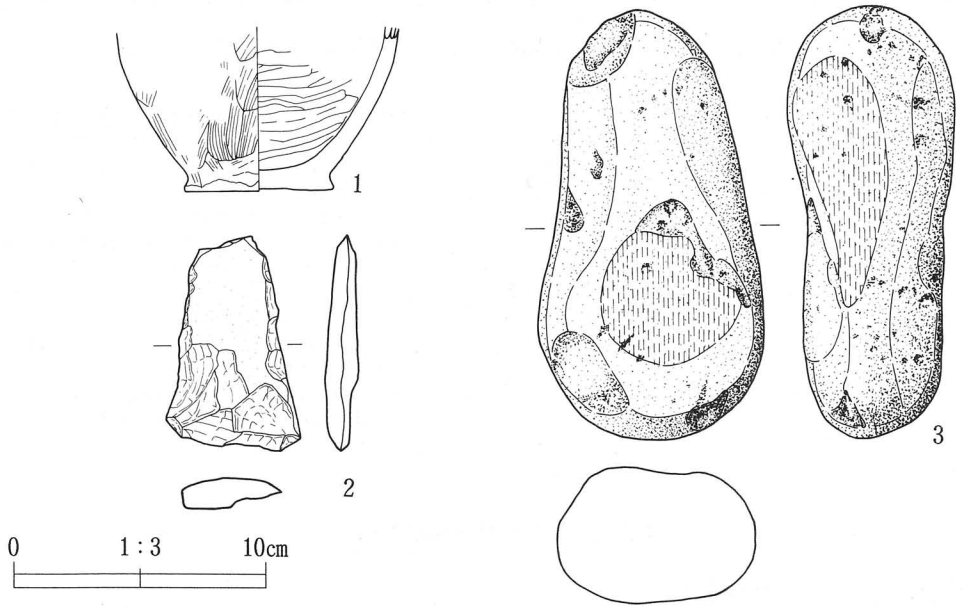
遺物（第23図）

遺物の出土は非常に少なく床面直上から１の底部片が出土したのみで、２・３は覆土中からの出土である。

〈第11号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	弥生土器	鉢	(6.3), ―― , 5.9	金色雲母・白・黒色砂粒を含み密	にぶい褐色 褐色	(内)ヘラ撫で (外)縦刷毛目	1／2残
2	石器	打製石斧				石器観察表（P65）に一括する	
3	石器	磨石				石器観察表（P65）に一括する	



第23図　第11号住居址出土遺物

第12号住居址（第25図）

遺構確認時のトレンチ掘り下げに際して褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、掘り下げを行う。大部分が調査区外に広がるため検出した範囲は僅かである。弥生時代後期の住居址である。

（位置）　第３区西端に位置する。

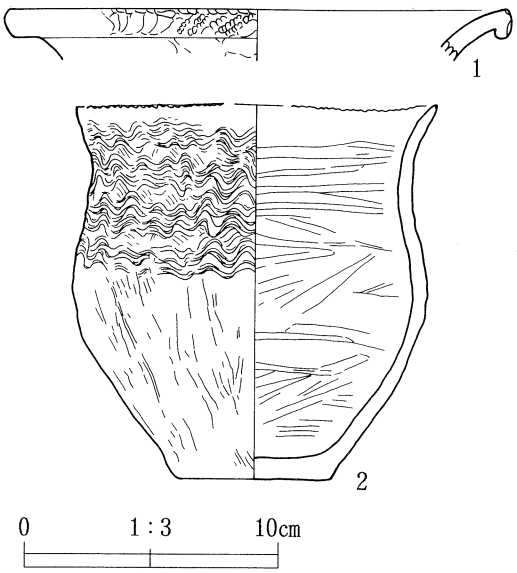
（規模・形態）　調査区外に広がるため確認した範囲で東西1.54ｍ、南北2.66ｍとなる。

（覆土）　覆土の大部分は４・５層の粘性の強い黒色土となり、僅かに炭化物が混入する程度であった。覆土中から遺物の出土はほとんど見られなかった。

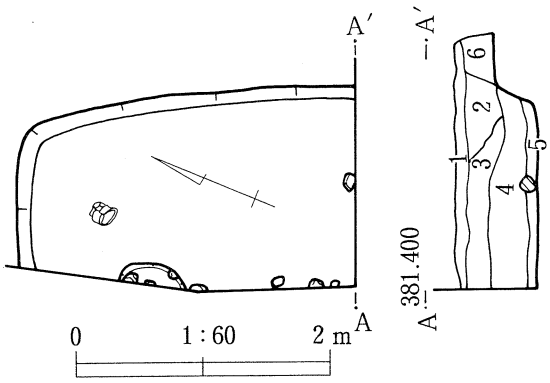
（内部施設）　炉・周溝等は検出されなかった。壁高は30cmを測り、外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦で、特に硬化した部分は認められなかった。ピットは１つ検出されたが完掘には至らなかった。

遺物（第24図）

遺物の出土は非常に少なく１は覆土中から、２は床面直上から出土した。１は折り返し口縁となる壺の口縁部片である。折り返し部に縄文が施される。２は肩が張らず、くびれ部から胴部にかけて緩やかなプロポーションとなる甕である。５条一単位の櫛描波状文が口縁部から胴中位にかけて４段巡る。波状文は途中何回か途切れ、胴部から口縁部へと施されている。



第24図　第12号住居址出土遺物



1、明褐色土～水田床土。砂粒・礫を含み、灰褐色土がブロック状に混る。かたくよくしまる。粘性ややあり。
2、黄褐色土～黄褐色砂質土がブロック状に混る。しまりややあり。粘性ややあり。
3、黒褐色土～砂粒・礫を含み、黄褐色土粒が混る。しまりややあり、粘性あり。
4、黒色土～砂粒・小礫・白色粒子を含み、褐色土が混る。しまりなく、粘性強。
5、黒色土～炭化物・黄褐色土ブロックが混る。しまりなし、粘性強。
6、黒色土～砂粒・礫を含み、灰色土と褐色土がブロック状に混る。しまりややあり、粘性あり。

第25図　第12号住居址実測図

〈第12号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	縄文土器	壺	(2.0),(20.0), ——	白色砂粒を含み密	褐色	(内)撫で (外)折り返し口縁、口縁部刻み、折り返し部縄文、頸部指頭痕	口縁部破片
2	弥生土器	甕	14.8，14.2，5.8	砂粒を含み密	褐灰色 にぶい橙色	(内)ヘラ磨き (外)口縁～頸部撫での後５本１単位の櫛描波状文、胴部よりしたヘラ撫で	口縁部一部欠損略完形

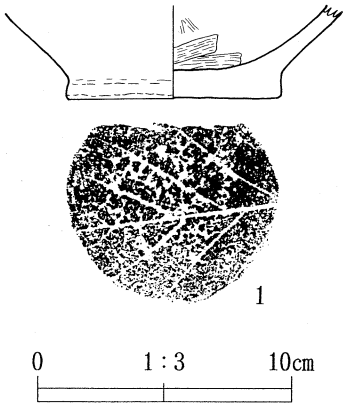
第13号住居址（第27図）

遺構確認時のトレンチ掘り下げに際して黄褐色砂質土中に黒褐色土の広がりを確認する。北側半分が調査区外に広がる。弥生時代後期の住居址である。

（位置）　第５区に位置する。

（規模・形態）　調査区外に一部広がるため定かではないが、南西4.41ｍ、南北2.64ｍを検出した。形態は小判形となるだろう。

（覆土）　１・２層は耕作土及び水田床土、３層以下が覆土となる。砂粒・礫を多く含み粘性のない覆土であった。覆土下層に僅かに炭化物が認められた。

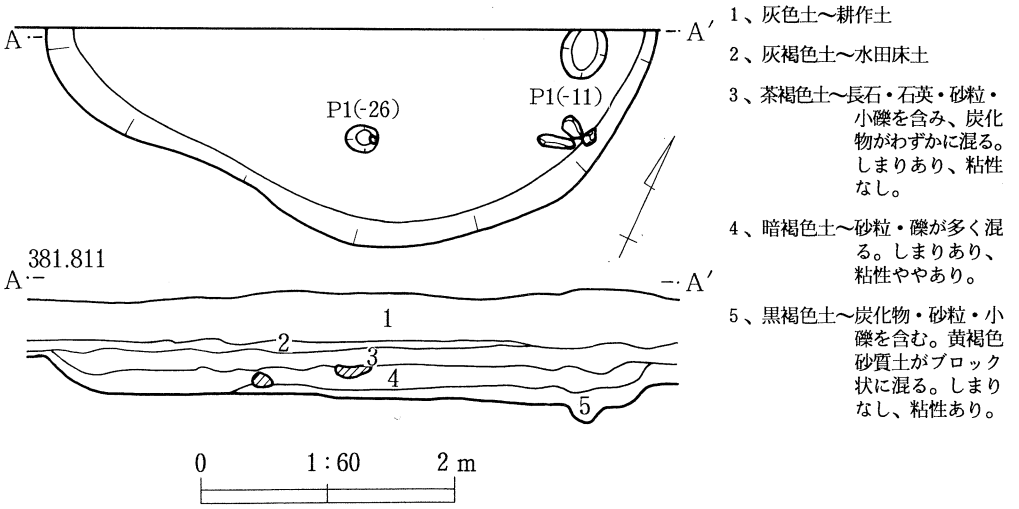


第26図　第13号住居址出土遺物

（内部施設）　ピットが２つ確認されたのみであった。Ｐ１は径26×21cm、深さ26cm、Ｐ２は径38×36cm、深さ11cm程となる。他に炉、周溝等は検出されなかった。

遺物（第26図）

覆土中からの遺物の出土は非常に少なかった。僅かに床面直上から壺ないし甕の底部片が１点得られたのみである。他に遺物の出土はなかった。



第27図　第13号住居址実測図

〈第13号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	甕	(3.3), ——, 8.4	金色雲母・赤・白・黒色粒子を含み密	にぶい黄褐色	(内)横撫で (外)底部木葉痕	底部破片

第14号住居址（第29図）

遺構確認に際して黄褐色砂質土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げを行う。古墳時代後期の住居址である。

（位置）　第４区西側に位置する。主軸はN－19°－Wとなる。

（規模・形態）　東西4.64m、南北3.00mを計測し、形態は横長の方形となる。

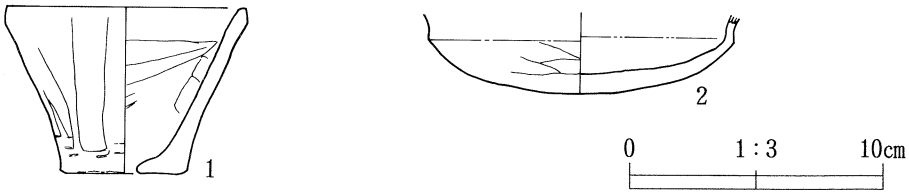
（覆土）　２層のみ確認された。砂粒・礫を多く含み粘性のない覆土であった。土層堆積からＰ８は後の掘り込みであることが理解できた。

（内部施設）　ピットが10基確認された。Ｐ１は径22×18cm、Ｐ２は径22×30cm、Ｐ３は径36×33cm、Ｐ４は径25×22cm、Ｐ５は径21×25cm、Ｐ６は径27×29cm、Ｐ７は径24×21cm、Ｐ８は径29×31cm、Ｐ９は径37×52cm、Ｐ10は径19×23cmとなる。いずれも平面形態・規模ともに大差ない。主柱穴と成り得るものはＰ８が後の掘り込みであることからＰ１・３・７・９の４本であろう。壁高は北壁で21cm、西壁で11cmとなる以外、他は15cm前後を測る。床面には特に踏み固められた部分は認められなかった。

（カマド）　住居北壁の西側に掘り込まれていた。構築石材などは残っておらず、また袖石を据え付けた痕跡なども認められなかった。長軸1.10m、短軸1.08m、掘り込みは29mを測る。焼土が班状に認められた。

遺物（第28図）

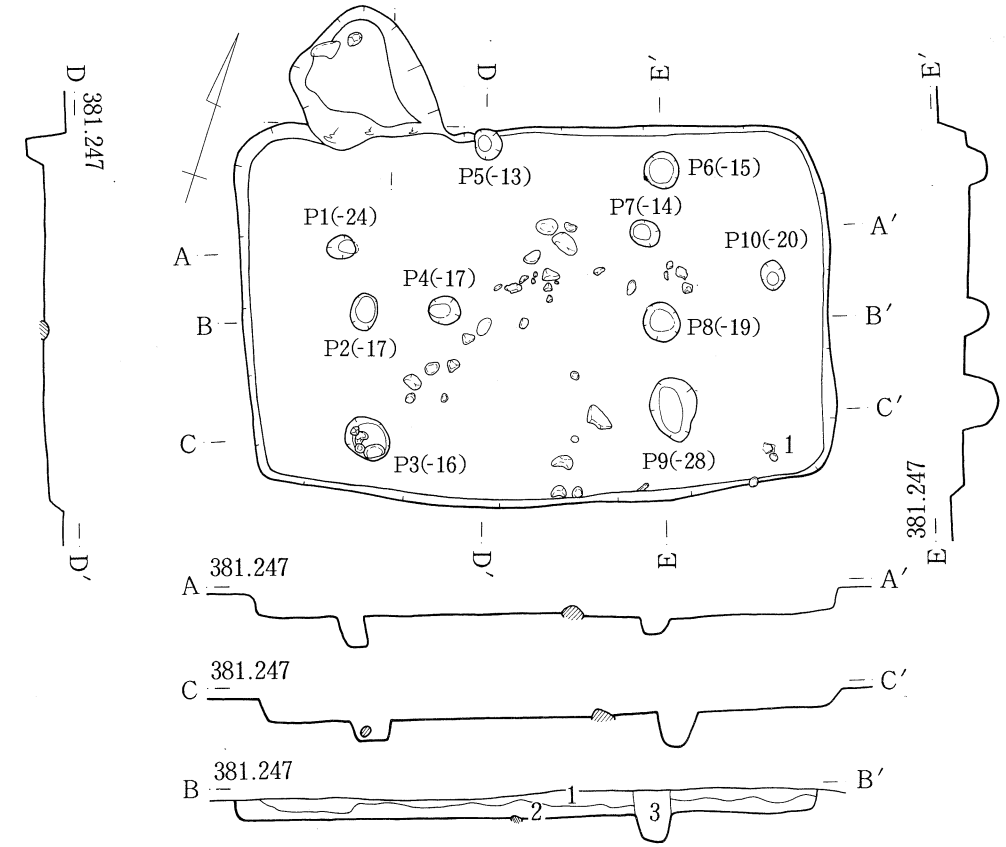
覆土中からの遺物の出土は非常に少なく。僅かに確認面から器形の知れるものが得られた。１は住居南東隅から出土した甑形土器である。外面ナデ整形、内面雑なヘラミガキが施される。２はカマドの前面付近から出土した土師器坏である。口縁部を欠損し、丸底の底部から体部と口縁部の境に稜を持って立ち上がる形態である。外面ヘラケズリの後ヘラミガキ、内面ヘラミズキが施される。



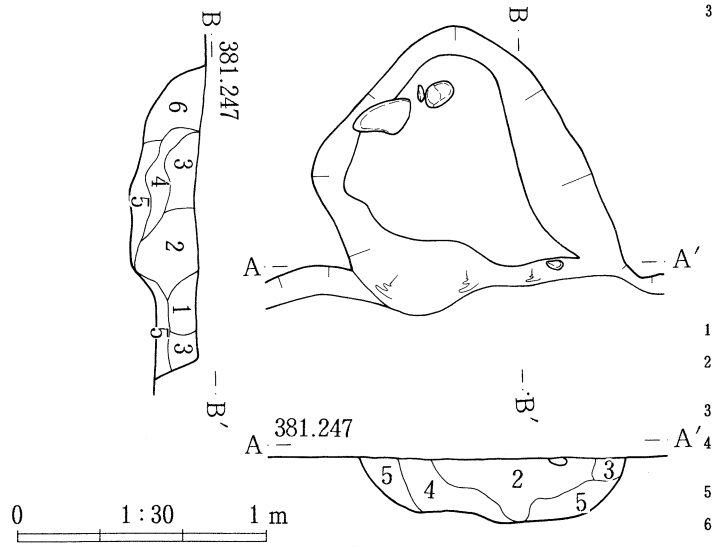
第28図　第14号住居址出土遺物

〈第14号住居址出土遺物一覧〉　（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	甑	6.6，9.4，5.0	金色雲母・白・黒砂粒を含む	にぶい黄褐色	(内)ヘラ磨き　(乳径)1.0cm (外)指撫で	4／5残
2	土師器	坏	(3.2)，—，—	金色雲母・赤・白色砂粒を含む	赤褐色～暗褐色 黒褐色	(内)ヘラ磨き (外)ヘラ削り	口縁部欠損



1、黒褐色土～砂粒・小礫を含み、灰色粘質土・黄褐色砂質土が斑状に混る。しまりややあり、粘性なし。
2、暗黄褐色砂質土～砂粒・小礫をやや多く含み、黒褐色土・黄褐色砂質土が斑状に混る。ややしまり、粘性なし。
3、黒色土～砂粒・小礫を含み、炭化物・灰色土・黄褐色砂質土が混る。しまりなく、粘性あり。



1、黒色土～焼土・炭化物・灰色土が多量に混る。しまりなく、粘性あり。
2、暗褐色土～焼土粒・炭化物を含み、灰色土・黒色土が斑状に混る。しまりあり、粘性あり。
3、黒褐色土～砂粒を多く含み、焼土粒・灰色土が僅かに混る。しまりあり、粘性あり。
4、黒褐色土～焼土粒・炭化物を多量に含み、黒褐色土・灰黄褐色土が斑状に混る。しまりややあり、粘性なし。
5、灰褐色砂質土～黒褐色土・黄褐色土が斑状に混る。しまりなく、粘性なし。
6、褐色土～砂粒を多く含み、暗褐色土が斑状に混る。しまりあり、粘性なし。

第29図　第14号住居址実測図

第15号住居址（第30図）

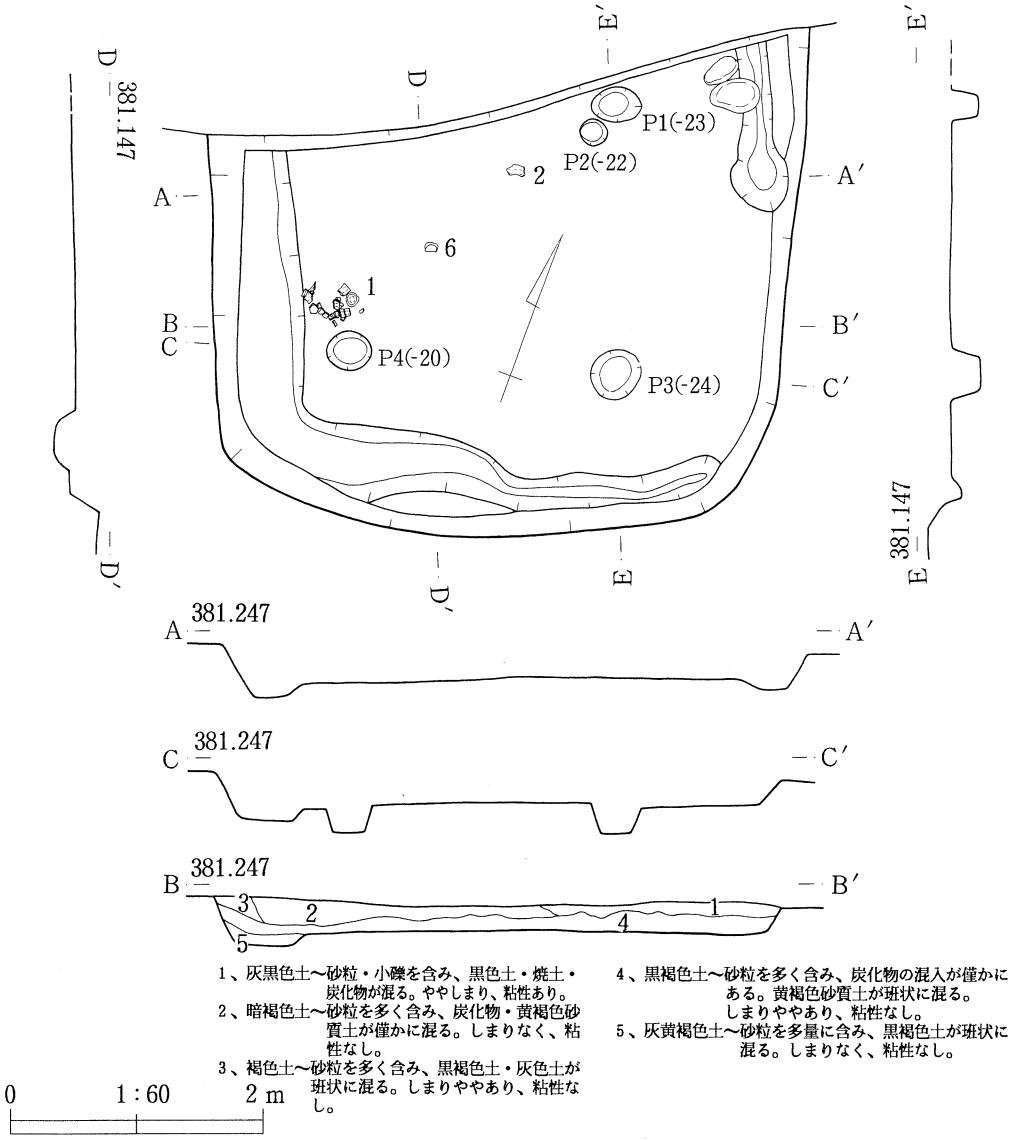
遺構確認に際して黄褐色砂質土中に黒褐色土の広がりを確認し、土層観察用のベルトを残して掘り下げを行う。北側約半分が調査区外に広がる。弥生時代後期の住居址である。

（位置）　第４区の中央に位置する。

（規模・形態）　東西4.71ｍ、南北4.13ｍを確認した。形態は隅丸方形となるだろう。

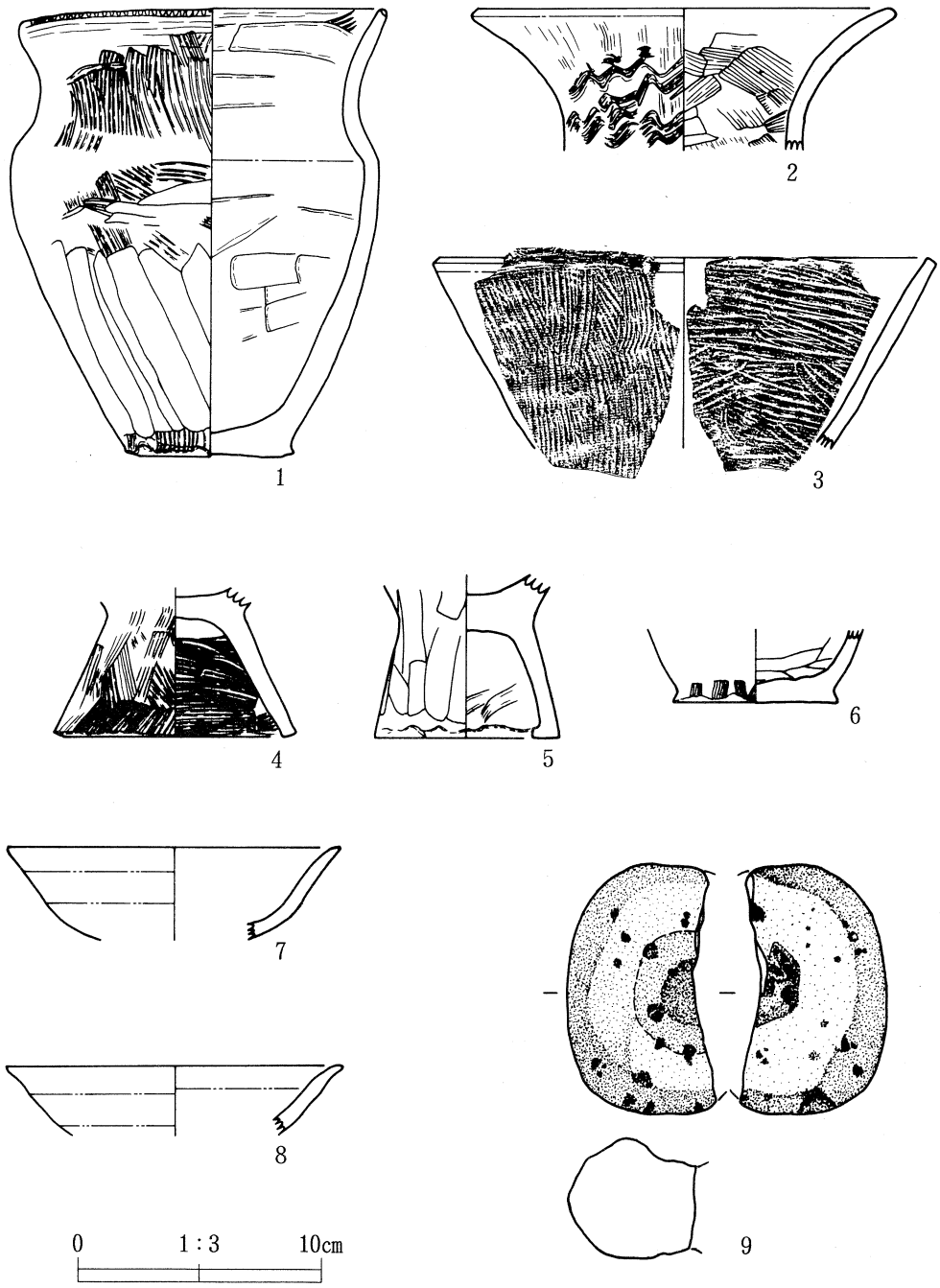
（覆土）　５層からなる。砂粒・礫を多く含み粘性のない覆土であった。

（内部施設）　ピットが４つ確認された。Ｐ１Ｆ径40×27㎝、Ｐ２は径22×21㎝、Ｐ３は径40×39㎝、Ｐ４は径36×30㎝を測り、Ｐ２以外平面形態・規模ともに大差ない。Ｐ１・３・４が主柱穴となるであろう。周溝が調査した範囲では住居西壁から南壁にかけてと東壁の一部に巡る。南



1、灰黒色土～砂粒・小礫を含み、黒色土・焼土・炭化物が混る。ややしまり、粘性あり。
2、暗褐色土～砂粒を多く含み、炭化物・黄褐色砂質土が僅かに混る。しまりなく、粘性なし。
3、褐色土～砂粒を多く含み、黒褐色土・灰色土が班状に混る。しまりややあり、粘性なし。
4、黒褐色土～砂粒を多く含み、炭化物の混入が僅かにある。黄褐色砂質土が班状に混る。しまりややあり、粘性なし。
5、灰黄褐色土～砂粒を多量に含み、黒褐色土が班状に混る。しまりなく、粘性なし。

第30図　第15号住居址実測図



第31図　第15号住居址出土遺物

西隅付近で最大幅58cm、南東隅付近で最小幅21cmを測り、深さは13cm程度である。壁高は西壁で30cm、南壁で23cm、東壁で18cmを測り、やや外傾して立ち上がる。床面には特に踏み固められた部分は認められなかった。

遺物（第31図）

覆土中からの遺物の出土は非常に少なかった。僅かに床面直上から１、２、６の３点が得られたのみである。この内、１はＰ４付近から出土した甕である。約1／3程度欠損する。頸部は縦方向の、胴部は横方向のハケメが施される。胴中位から底部までヘラナデが施される。２は住居中央から出土した壺の口縁部片である。外面ハケ整形の後、波状文が雑に施され、内面はハケ整形される。３は内外面ともハケ整形される鉢である。４、５は台付甕の脚台部である。４は５よりやや大きく開き、内外面ハケ整形される。５は外面ナデ整形され、端部は部分的に折り返されたようになる。７、８は坏は胎土に金色雲母を多量に含み、甲斐型土器以降に位置付けられる。

〈第15号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	甕	18.6，(15.2)，6.9	金色雲母・白・黒色砂粒を含む	にぶい黄褐色	(内)ヘラによる横撫で (外)口縁部刻み、横撫で、頸部～胴部上半刷毛目、胴部下半ヘラ撫で	3／4残
2	土師器	壺	(5.8)，(16.8)，—	金色雲母・石英・白黒色粒子を含む	にぶい褐色 橙色	(内)刷毛目 (外)刷毛整形後櫛描波状文	口縁部破片
3	土師器	鉢	(7.8)，(19.8)，—	金色雲母を多く含み、白・黒色粒子を含む	にぶい橙色 にぶい褐色	(内)刷毛整形後撫で (外)刷毛目	口縁部破片
4	土師器	台付甕	(6.1)，—，10.0	金色雲母・白・黒色粒子を含む	にぶい赤褐色	(内)刷毛目 (外)刷毛目	台部 4／5残
5	土師器	台付甕	(6.7)，—，9.4	金色雲母・白・黒色粒子を含む	にぶい褐色 褐色	(内)ヘラ撫で (外)ヘラ撫で	台部のみ残
6	土師器	甕	(3.0)，—，(6.8)	金色雲母・石英・白・黒色粒子を含む	褐色 にぶい褐色	(内)横撫で (外)刷毛目・撫で	底部破片
7	土師器	坏	(3.8)，(13.9)，—	金色雲母を多量に含む	黒褐色 褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で	口縁部破片
8	土師器	坏	(2.8)，(7.0)，—	金色雲母を多量に含む	黒褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で	口縁部破片
9	石器	凹石				石器観察表（Ｐ65）に一括する	

第16号住居址（第32図）

遺構確認に際して礫が多量に混じる黄褐色土中に黒褐色土の広がりを確認し、掘り下げを行なう。南側一部が調査区外に広がり、検出できなかった。奈良時代に位置付ける。

（位置）　第５区の東側に位置する。主軸方向はＮ－63°－Ｅである。

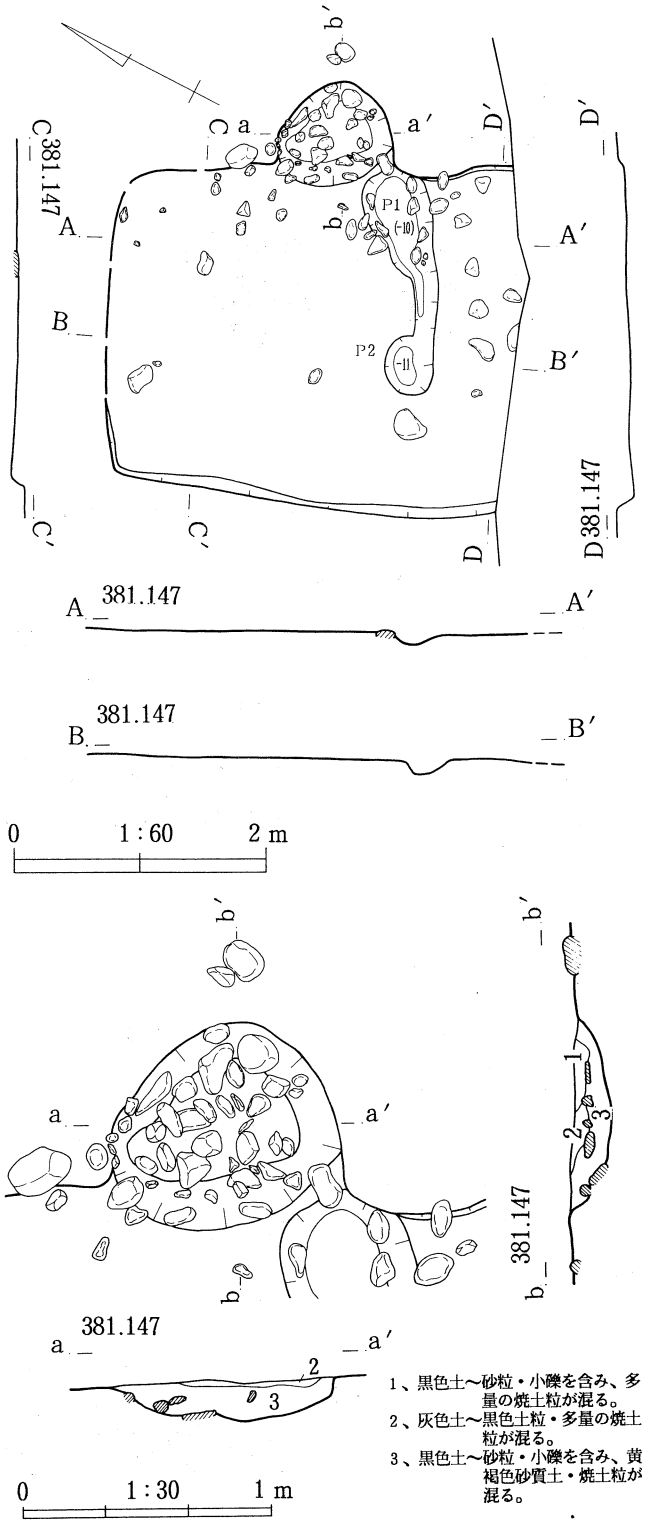
（規模・形態）　調査区外に一部広がるため定かではないが、東西方向2.77ｍ、南北方向3.04ｍを検出した。形態は隅丸方形となる。

（内部施設）　壁高は西壁で14㎝を測る以外、他は不明瞭な立ち上がりとなる。床面は西側がやや低くなる。ピットは２つ検出され、Ｐ１は径88×52㎝の平面長楕円形で、Ｐ２は径47×38㎝となり、両者は間仕切り溝らしきもので連結する。

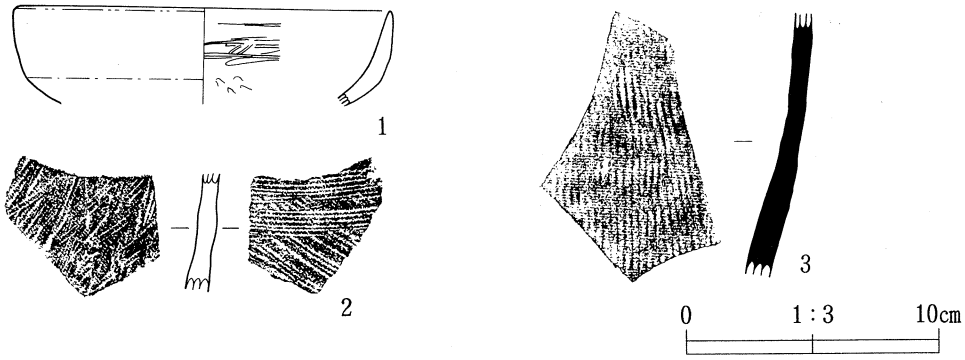
（カマド）　住居東壁ほぼ中央に検出された。長軸91㎝、短軸81㎝となり、深さは16㎝である。焼土粒が全体に散っていた。完掘後には地山中の礫が多数現れる結果となった。

遺物（第33図）

掘り込みが僅かしか確認できなかったこともあり、遺物の出土は非常に少なく細片ばかりであった。１は体部から口縁部への立ち上がりが垂直気味となる坏である。内面にヘラミガキが施される。



第32図　第16号住居址実測図



第33図　第16号住居址出土遺物

〈第16号住居址出土遺物一覧〉

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	(3.8), 15.0 , ——	赤色砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)ヘラ磨き、暗文あり 一部煤付着	口縁部破片
2	土師器	甕	—— , —— , ——	微砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内・外)刷毛目	破片
3	須恵器	甕	—— , —— , ——	白色粒子を含み密	褐灰色	(外)叩き目	破片

第２節　土坑と出土遺物

今回の調査では５基の土坑と集石土坑１基が検出された。以下土坑から説明していく。

第１号土坑（第34図）

第３区で確認する。平面形は円形を呈し、断面鍋底状となる。覆土は粘性の強い黒色土が大部分であった。規模は長径93cm、短径83cm、深さ40cmとなる。壁の立ち上がりは南側が緩やかである。遺物は細片となった土器片が数点出土したのみであり、図化できたのは「甲斐型」の坏の底部破片１点である。

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	(1.2), —— , ——	金色雲母、砂粒を含み密	明赤褐色 赤褐色	(内)ロクロ撫で (外)ヘラ削り	底部破片

第２号土坑（第34図）

第３区に位置する。規模は長径95cm、短径71cm、深さ36cmとなり、平面形は不整方形を、断面形は鍋底状を呈する。坑底はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは北壁が垂直となる。覆土は全体に黄褐色土粒が混じる粘性の強い黒色土であった。出土遺物は縄文土器・土師器が出土するが、すべて細片ばかりであった。図化したものは土師器坏と甕の底部片２点である。

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	(0.8), ―― , ――	金色雲母・赤・白・黒色粒子を含み密	橙色 明赤褐色	(内)ロクロ撫で (外)ヘラ撫で	底部破片
2	土師器	甕	(3.0), ―― ,(3.5)	金色雲母・白・黒色砂粒を含み密	暗褐色	(内)刷毛目 (外)ヘラ撫で	底部破片

第３号土坑（第34図）

第３区に位置し、第６号住の床面を掘り込んで構築されている。６号住の床面精査時に確認したもので、規模は長軸1.54m、短軸1.25m、深さ41cmを測る。平面形は不整円形、底部は一部袋状となり、坑底は凹凸となる。覆土中には炭化物・焼土が多く混じっていた。出土した遺物は僅かであった。図化したものは須恵器甕の胴下半部である。

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	須恵器	甕	(7.9), ―― , ――	金色雲母・白色粒子を含み密	灰色 オリーブ黒色	ロクロ整形	胴部破片

第４号土坑（第35図）

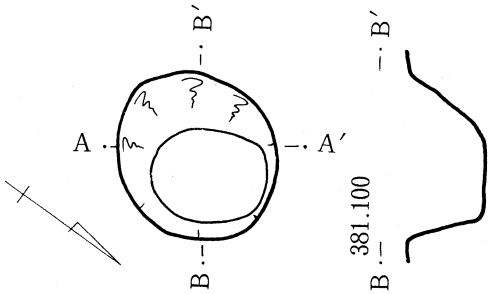
第４区に位置し、第15号住の横に存在する。規模は長軸1.13m、短軸1.07m、深さ21cmを測る。平面形はほぼ円形、断面皿状となり、坑底は平坦である。出土した遺物は図化したもののみであった。

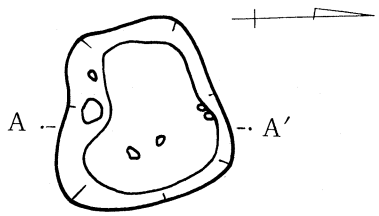
（単位　cm）

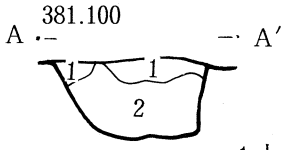
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面） （外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	須恵器	壺	(4.3), ―― , ――	白・黒色砂粒を含み密	灰白色 オリーブ黒色	(内)撫で (外)撫で自然釉	胴部破片

第５号土坑（第22図）

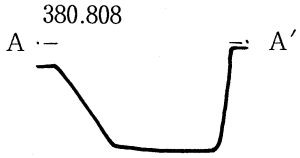
第２区に位置し、第11号住と重複する。南側半分は調査区外へ広がる。土層断面からは本土坑が切っていると理解できた。規模は東西1.79m、南北58cm、深さ48cmを確認した。平面はほぼ円形となるだろう。断面鍋底状となり、坑底はほぼ平坦となる。出土した遺物はなかった。







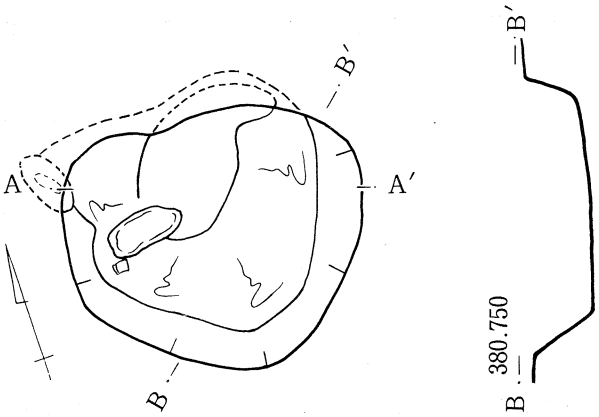
1土

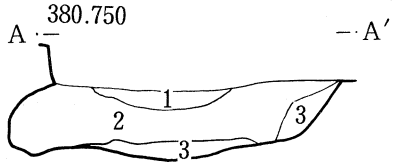


2土

1、暗褐色土～石英・砂粒を含み、橙色の土が
ブロック状に混る。しまりあり、粘性ややあり。

2、黒色土～石英・砂粒・小礫を含む。灰黄色砂質土がブロック状に混る。
しまりなし、粘性強、炭化物が混る。



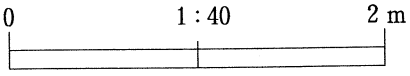


3土

1、黒褐色土～黄褐色土ブロック・炭化物が混る。
しまりなし、粘性あり。

2、黒褐色土～黄褐色土粒・炭化物・焼土粒が混る。
しまりなし、粘性あり。

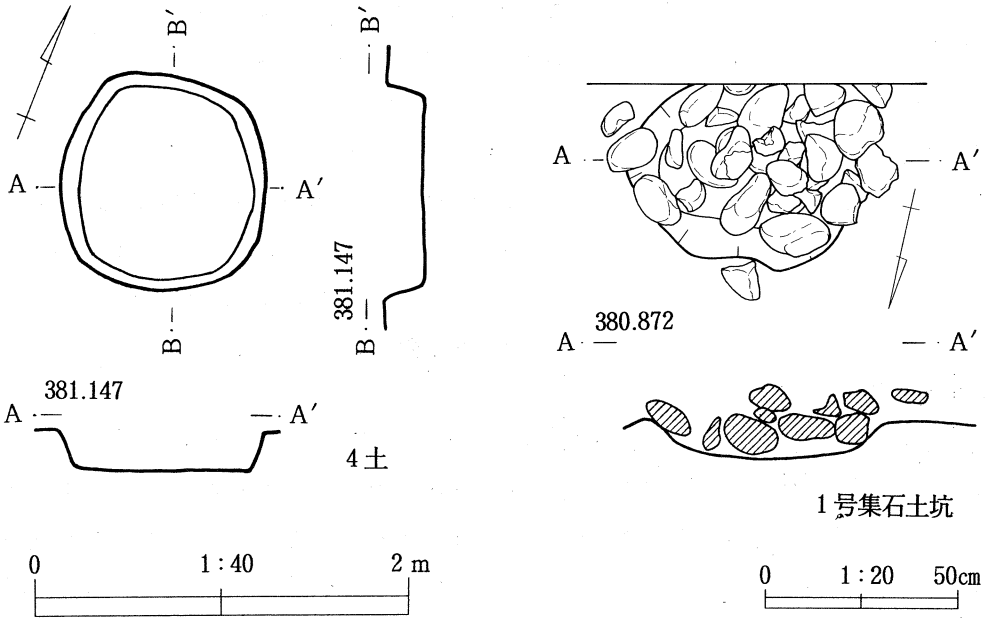
3、黒褐色土～黄褐色土ブロックが多量に混り、炭化物・焼
土粒を含む。しまりややあり、粘性あり。



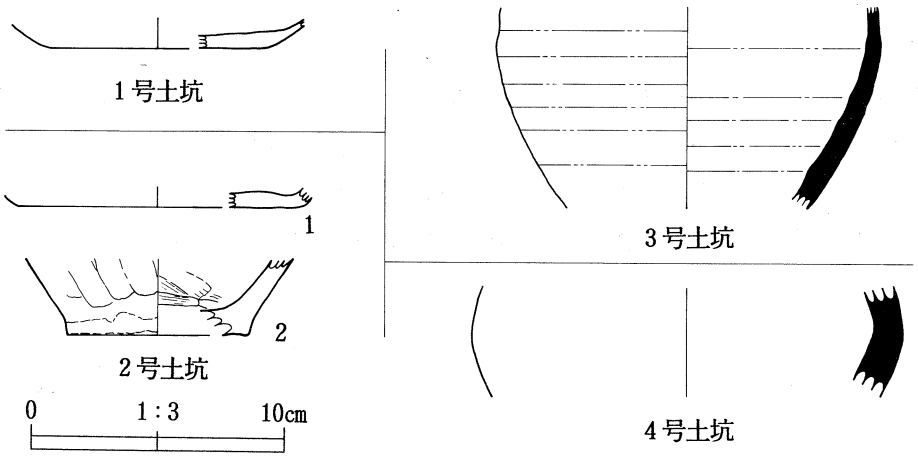
第34図　第1～3号土坑実測図

第１号集石土坑（第35図）

第２区に位置し、南側が一部調査区外へ広がる。10～30㎝の河原石を使用し、意図的な配置などは認められなかった。掘り込みは東西60㎝、南北49㎝、深さ９㎝を確認した。平面は不整円形、断面皿状となる。坑底はほぼ平坦となる。出土した遺物はなかった。



第35図　第４号土坑・第１号集石土坑実測図



第36図　第１～４号土坑出土遺物

第３節　溝状遺構と出土遺物

調査では４条の溝が確認された。以下番号順に説明していく。

第１号溝（第37・39図）

第２区の中央から検出し、調査区を南北方向にほぼ直線的にのびる。規模は北側で幅1.85ｍ、深さ50㎝、南側で幅2.16ｍ、深さ59㎝を測る。中央部分でやや浅くなるが、徐々に幅を広げながら南下する。覆土は黒褐色土を主体として、溝底には砂礫の堆積が確認された。遺物は縄文土器から土師質まで出土するが、いずれも細片ばかりであった。遺構の時期は出土遺物から中世以降に位置付ける。

第２号溝（第38・40図）

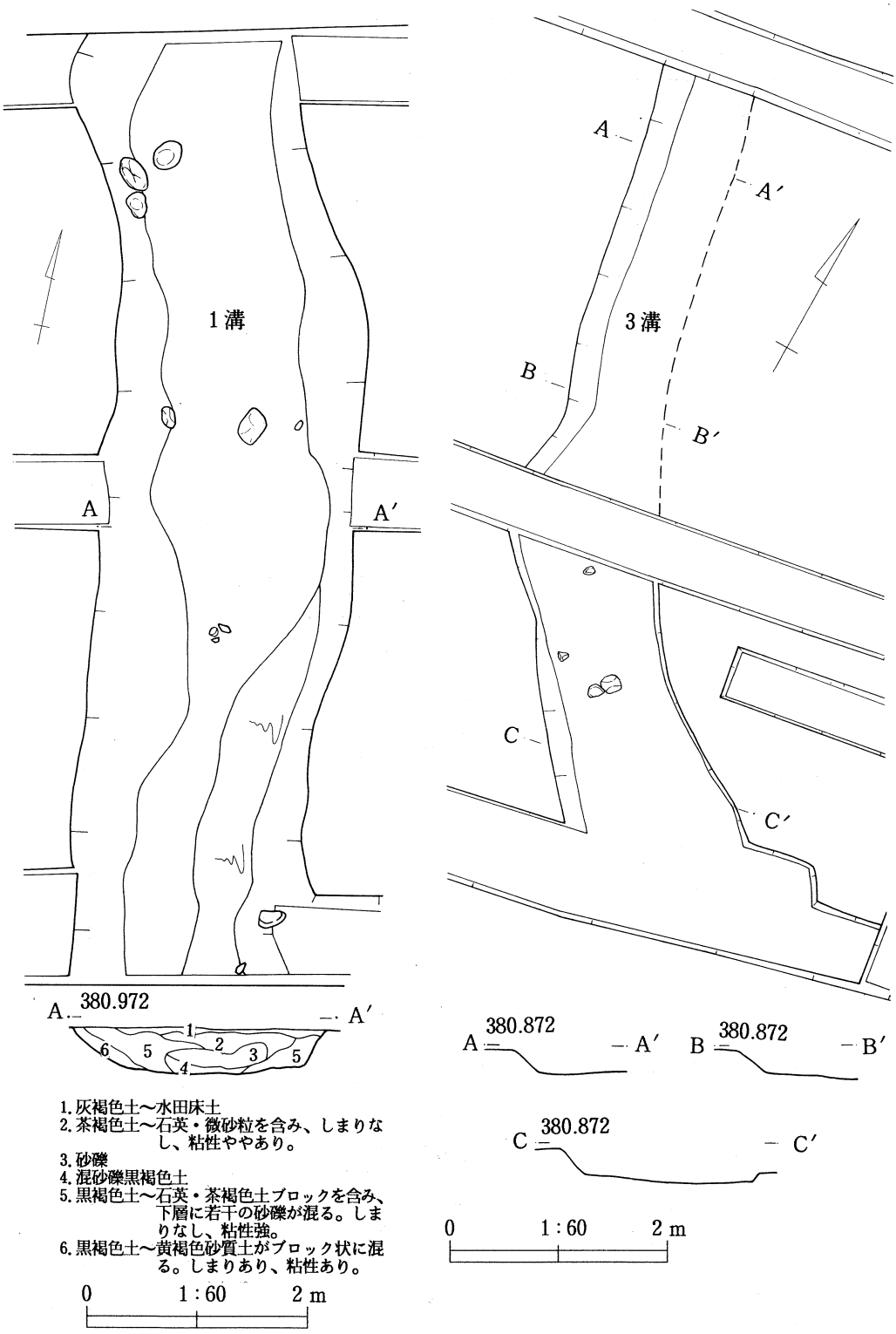
第２区に位置する。南北方向に走り、南端は11号住の手前で収束する。規模は北側で幅4.95ｍ、深さ36㎝、南側では幅1.20〜30㎝、深さ25㎝を測り、急激に幅を狭くする。覆土は黒褐色土が主体となる。出土遺物には縄文土器から土師質まで見られる。40図2.3は確認面からの出土であったが、これらの遺物から遺構の時期を11世紀前後に位置付けておく。

第３号溝（第37図）

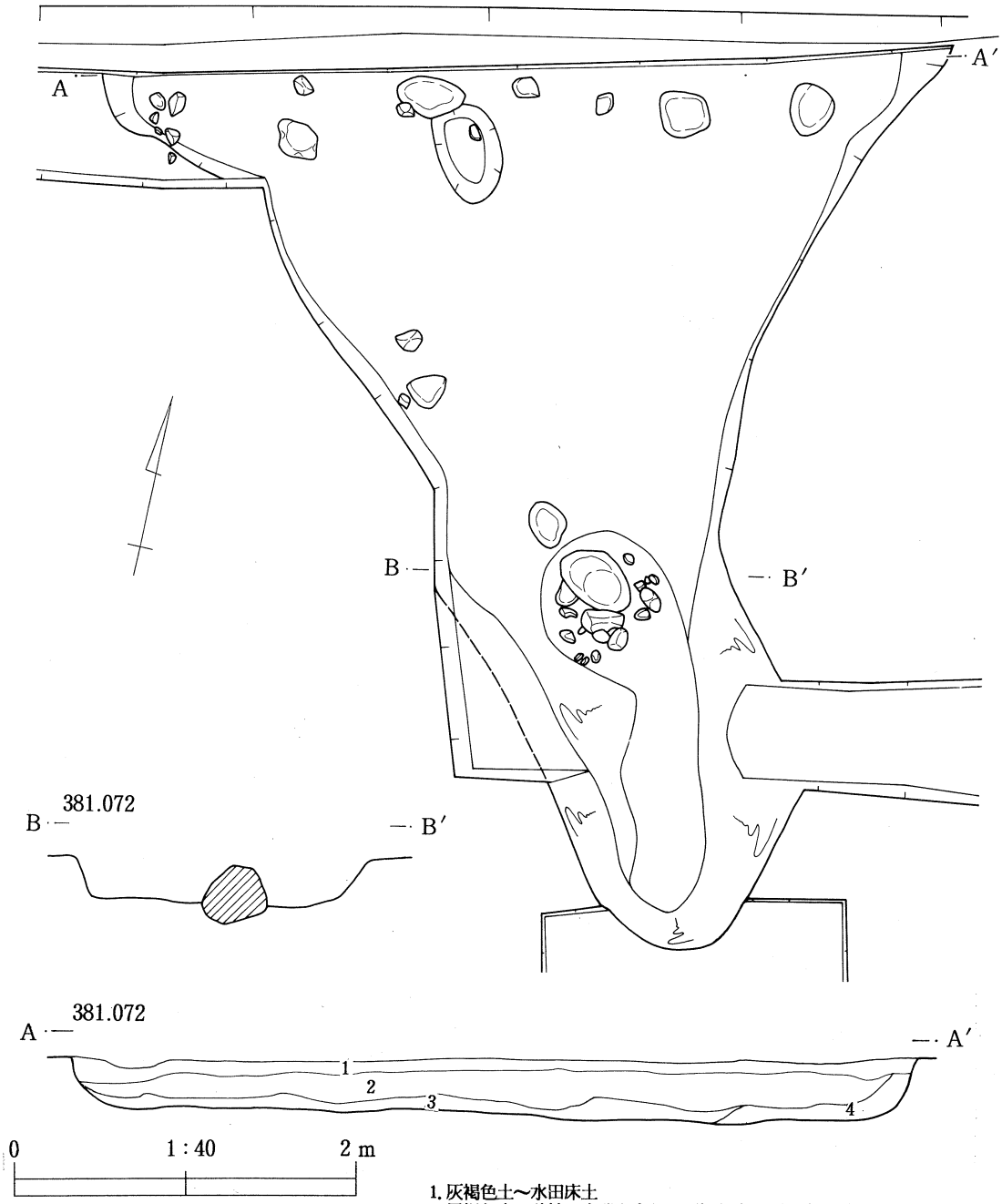
第２区に位置する。規模は幅１ｍ前後、深さ25㎝程度を測る。深さはほぼ一定を保つが、南に行くにしたがって幅がやや広くなる。東側の立ち上がりは低く一部不明瞭であった。覆土は砂礫が多量に混じる黒色土であった。本遺構の東側に水田遺構を確認している。当初、水田址の脇を沿うように遺構が検出されたため水田に伴う施設ではないかと考えたが、取水口などの施設が検出されなかったため、本遺構が水田水路等の水田址に伴うものとは確認出来なかった。遺物の出土は縄文土器から土師器まで見られるが、いずれも細片ばかりで図化には至らなかった。遺構の所属時期は平安時代以降に位置付けられる。

第４号溝（第41図）

第４区東端に位置する。調査区を斜行しながら南北方向にのびる。幅75〜107㎝、深さ40㎝前後を測り、幅・深さともにほぼ一定である。覆土はレンズ状の堆積が認められ、覆土中には挙程から幼児の頭程の礫が多数混じっていた。礫混じりの黄褐色土中に掘り込まれており、完掘後には地山中の礫が多数現れることとなった。出土遺物は非常に少なく細片と化したものばかりである。図化したのは弥生時代後期の甕の口縁部片と須恵器片のみである。遺構の時期は平安時代以降に位置付ける。

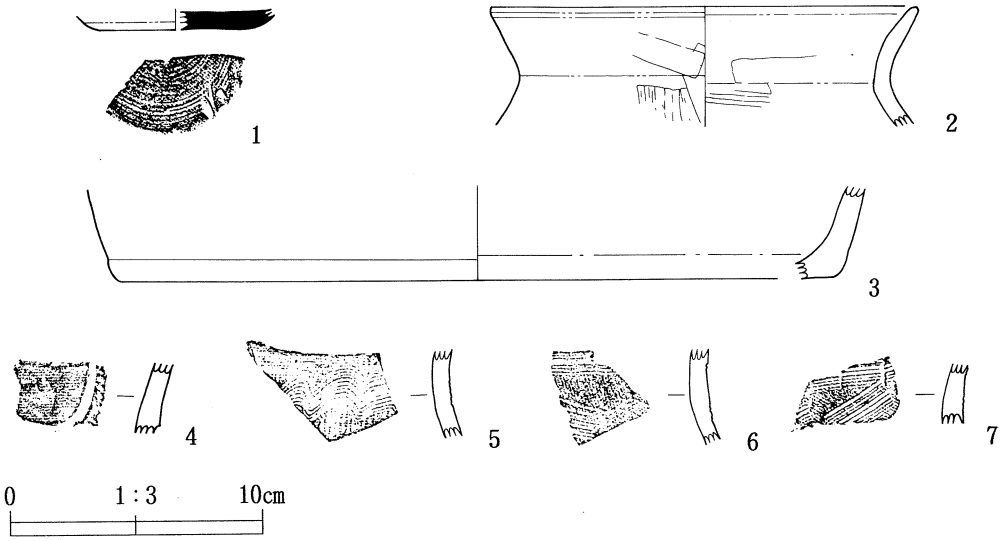


第37図　第1・3号溝実測図

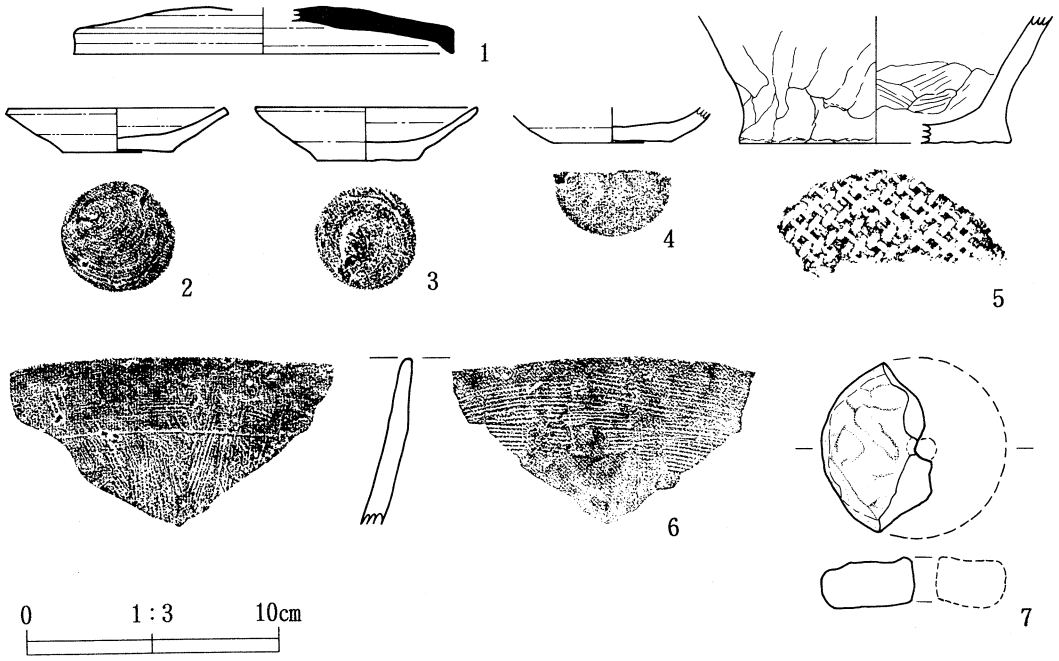


1. 灰褐色土～水田床土
2. 黒褐色土～砂粒・小礫を含む。灰褐色土・灰色土がブロック状に混る。しまりなし、粘性ややあり。
3. 黒褐色土～黄褐色土がブロック状に多量に混る。しまりなし、粘性ややあり。
4. 黒褐色土＋黄褐色土～微砂粒を多く含み、灰色土がブロック状に混る。しまり・粘性ややあり。

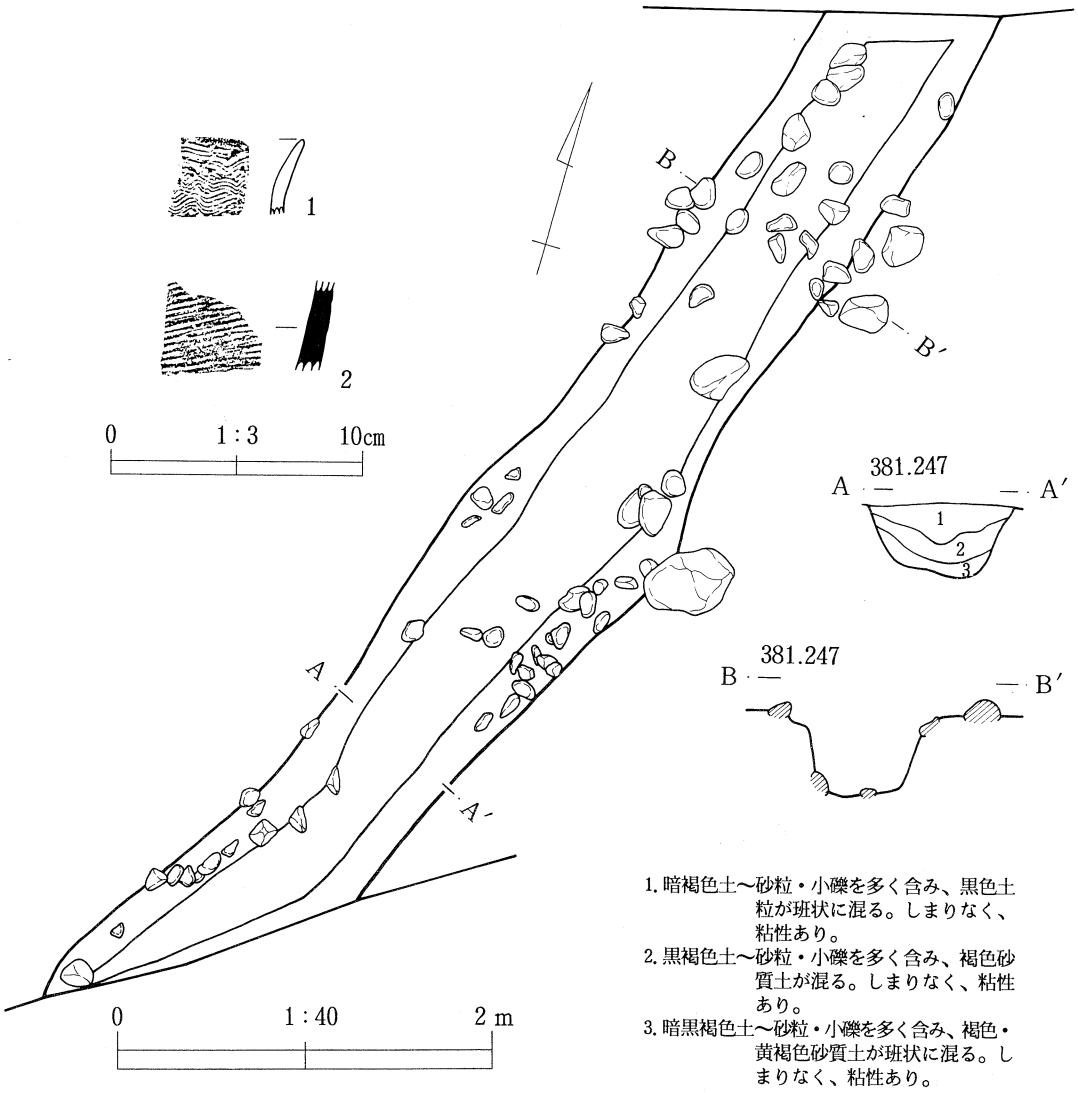
第38図　第２号溝実測図



第39図　第１号溝出土遺物



第40図　第２号溝出土遺物



第41図　第４号溝実測図・出土遺物

＜第１号溝出土遺物一覧＞

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	須恵器	坏	(0.8), ―― ,(6.0)	白・黒色粒子を含み密	灰色	(内)撫で (外)底部回転糸切り痕	底部破片
2	土師器	甕	(4.7),(16.8), ――	金色雲母、白・黒色粒子を含み密	灰褐色 褐色	(内)横撫で横刷毛目 (外)口縁部横撫で頸部縦刷毛目	口縁部破片
3	土師質	内耳鍋	(3.7), ―― ,(28.4)	金色雲母、黒色粒子を含み密	にぶい赤褐色 黒褐色	(内外)撫で	底部破片

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面 外面）	整形・特徴・その他	残存率
4	縄文土器	深鉢	―― , ―― , ――	白・黒色砂粒を含み密	茶褐色	沈線により曲線的な文様が抽出され、縄文が充填される	破片
5	弥生土器	甕	―― , ―― , ――	白・黒色砂粒を含み密	灰褐色	13条1単位の櫛描波状文	破片
6	弥生土器	甕	―― , ―― , ――	白・黒色砂粒を含み密	灰褐色 暗褐色	6条1単位の簾状文	破片
7	弥生土器	甕	―― , ―― , ――	黒色砂粒を含み密	にぶい褐色 褐色	簾状文・単線文	破片

＜第2号溝出土遺物一覧＞

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面 外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	須恵器	蓋	(1.8),(14.0), ――	白色粒子を含み密	黄灰色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で	1／8残
2	土師質	皿	1.7 , 8.7 , 4.5	金色雲母を多量に含む	にぶい灰褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	2／3残
3	土師質	皿	2.1 , 8.8 , 4.2	金色雲母を多量に含み、白・黒色砂粒を含む	にぶい黄褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	3／4残
4	土師質	皿	(1.1), ―― ,(4.4)	金色雲母、白・黒色砂粒を含む	黒褐色	(内)撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	底部破片
5	縄文土器	深鉢	(5.0), ―― ,(10.8)	石英・長石砂粒を含む	暗褐色	(内)撫で (外)撫で底部網代痕	底部破片
6	土師器	鉢	―― , ―― , ――	金色雲母・白・黒色粒子を含み密	にぶい褐色	(内)横刷毛目 (外)口縁部横撫で縦刷毛目	口縁部破片
7	土製品	紡錘車	(厚) (径) (2.0),(7.2), ――	金色雲母を多く含み密	にぶい赤褐色		1／3残

＜第4号溝出土遺物一覧＞

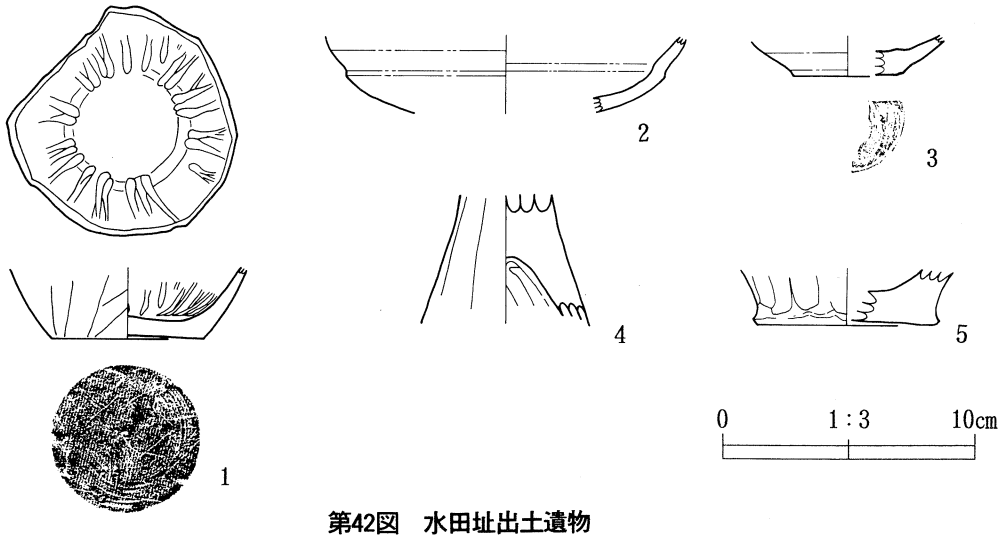
（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面 外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	弥生土器	甕	―― , ―― , ――	金色雲母、白色粒子を含み密	褐色	(内)撫で (外)櫛描波状文	破片
2	須恵器	甕	―― , ―― , ――	白色粒子を含み密	灰黄色 黄褐色	(内)撫で (外)叩き目	破片

第４節　水田址と出土遺物

第２区東側から水田址が検出された（第３図参照）。検出した規模は東西９ｍ、南北7.5ｍの約67.5㎡である。遺構確認用のトレンチ掘り下げに際して酸化鉄が沈積する褐色土を鍵層として確認したものである。畦畔が検出されなかったため１面のみ、しかも部分的な検出となろう。砂礫が堆積する第３号溝が水田脇から検出されたが、水田址に伴う水路であるか判断できなかった。土層断面からは後の掘り込みとは異なり同一面からの検出であった。他に水口なども検出されなかった。水田下には安定して黒色粘質土の堆積が見られ、湿潤性の高い低湿地に堆積した有機質を含む土壌が水田の出発点であったことが確認できる。水田面からの出土遺物は縄文時代から平安時代まで各時代の遺物を含み遺構の時期を特定できない。更に下層の黒色粘質土からも遺物の出土が見られたが、縄文土器から平安時代までの土器を含んでいた。

出土した遺物は大部分が細片ばかりであるが、実測可能なものをいくつか載せた（第42図）。１は甲斐型の坏である。体部外面ヘラケズリし、内面には暗文が施される。９世紀前半に位置付けられる。２・４は古墳時代後期の坏と高坏脚部であろう。３は底部に糸切り痕を残す皿となろう。11世紀代に位置付けられる。



第42図　水田址出土遺物

＜水田址出土遺物一覧＞　　（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	(2.8), ―― , 6.0	赤・白・黒色粒子を含み密	橙色	(内)暗文 (外)ヘラ削り底部回転糸切り後ヘラ削り	2／3残
2	土師器	坏	(3.0), ―― , ――	金色雲母、赤・白・黒色粒子を含み密	褐色	(内)横撫で (外)体部横撫で肩部ヘラ削り	体部破片
3	土師器	皿	(1.5), ―― ,(4.4)	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)横撫で (外)横撫で底部回転糸切り痕	底部～体部破片
4	土師器	高坏	(5.1), ―― , ――	金色雲母、赤・白色粒子を含み密	暗褐色 黒褐色	(内)ヘラ削り (外)ヘラ削り	脚部破片
5	土師器	甕	(2.2), ―― ,(7.4)	白・黒色砂粒を含み密	黒褐色	(内)撫で (外)撫で	底部破片

第５節　溝状凹地遺構と出土遺物

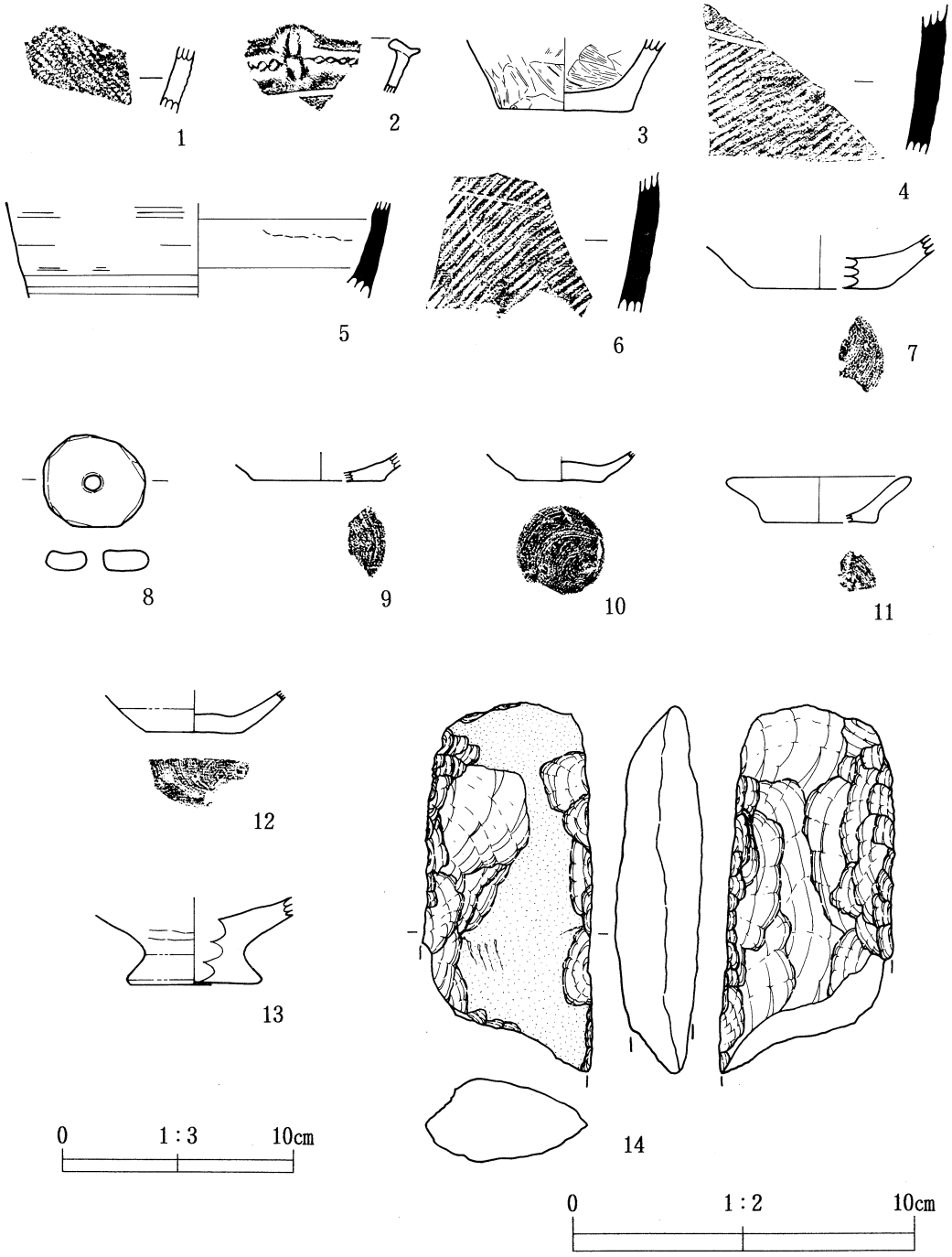
第４・５区の南側にまたがって検出された遺構である（第４図参照）。第５区調査当初は自然流路かと思い調査を行なったが、第４区調査時の土層観察の結果、砂礫の堆積が確認できず、むしろ絶えず流水していたというよりも、自然地形の落ち込みが滞水しながら埋没が進んだものと判断した。

出土遺物はいずれも細片と化しており、縄文土器～平安時代の土器まである（第43図）。１・２は縄文土器片を取り上げた。１には細かい縄文が施され、２の口縁部片には粘土紐が貼付される。２は堀之内式に位置付けられる。９～12には底部糸切り痕が残る皿を取り上げた。いずれも11世紀代に位置付けられる。14はホルンフェルス製の打製石斧である。

＜溝状凹地出土遺物一覧＞

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	縄文土器	深鉢	―，―，―	金色雲母、赤・白・黒色砂粒を含み密	にぶい赤褐色	単節ＬＲ縄文	破片
2	縄文土器	深鉢	―，―，―	白・黒色粒子を含み密	にぶい黄褐色	(外)口縁部隆帯貼付刻み	口縁部破片
3	土師器	壺	(3.1)，―，5.8	金色雲母、白色砂粒を含み密	にぶい褐色	(内)一部刷毛目撫で (外)ヘラ撫で	底部のみ残
4	須恵器	甕	―，―，―	白色粒子を含み密	黄灰色	(内)撫で (外)叩き目	破片
5	須恵器	甕	(4.1)，―，―	白色砂粒を含み密	黄灰色	(内)輪積痕 (外)ロクロ撫で	胴部破片
6	須恵器	甕	―，―，―	白色粒子を含み密	灰白色	(内)撫で (外)叩き目	破片
7	土師器	皿	(2.3)，―，6.0	赤・白・黒色砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	底部破片
8	土製品	紡錘車	(紡輪厚) 0.9，(紡輪径) 4.4	白・黒色砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(孔径)0.8 坏底部片を再利用	完形
9	土師器	皿	(1.2)，―，5.8	金色雲母を多量に含み密	にぶい赤褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	底部破片
10	土師器	皿	(1.1)，―，3.6	金色雲母を多量に含み密	にぶい褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	底部のみ残
11	土師器	皿	1.9，8.0，5.0	金色雲母を多量に含み密	にぶい褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	1／7残
12	土師器	皿	(1.8)，―，(4.2)	白・黒色砂粒を含み密	にぶい褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で底部回転糸切り痕	1／3残
13	土師器	柱状高台皿	(3.7)，―，(5.8)	金色雲母、赤・白・黒色粒子を含み密	明赤褐色	(内)撫で (外)撫で	1／4残
14	石器	打製石斧				石器観察表（Ｐ65）に一括する	



第43図　溝状凹地遺構出土遺物

第6節　遺構外出土遺物

ここでは各調査区ごとに遺構外出土遺物を取り上げる。出土遺物には縄文土器から土師質にわたって見られる。

第1区（第44図1～5）からは遺構の検出がなかったため、遺物の出土も多くはない。いずれも細片からの復元実測である。1は須恵器坏身の模倣坏で、口縁部が低く内傾しながら立ち上がる。2は底部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直立気味に立ち上がる。どちらも体部外面はヘラケズリされる。3・4は底部に木葉痕が残る甕である。1～4は古墳時代後期に位置付けられる。5の須恵器坏の底部は回転ヘラケズリされる。

第2区（第44図6～11）出土遺物として6点の土器をあげた。6は縄文土器、堀之内期の深鉢口縁部片、7は弥生時代後期の櫛描波状文が施される甕口縁部片である。波状文は間隔が長く間延びしたようになっている。11は弥生時代後期の甕底部であろう。8・10は古墳時代後期の椀・甕である。9は須恵器提瓶の体部片となる。外面に同心円状のカキメがある。

第3区（第45図12～第46図33）からは比較的遺物の出土が多かった。12～14は縄文土器を、15～18は弥生土器を、19～22は古墳時代後期の土器を、23以降は奈良・平安時代の土器をまとめた。33の手捏土器は胎土に金色雲母を多く含んでいる。

第4区（第46図34～47）からは縄文土器から内耳土器を取り上げた。34は加曽利EⅣ式に、35は称名寺式に比定できる。40は弥生後期の壺頸部片で、横線文が巡る。41は古墳時代後期の坏口縁部片である。44～46は甲斐型土器以降に位置付けられるものとなる。

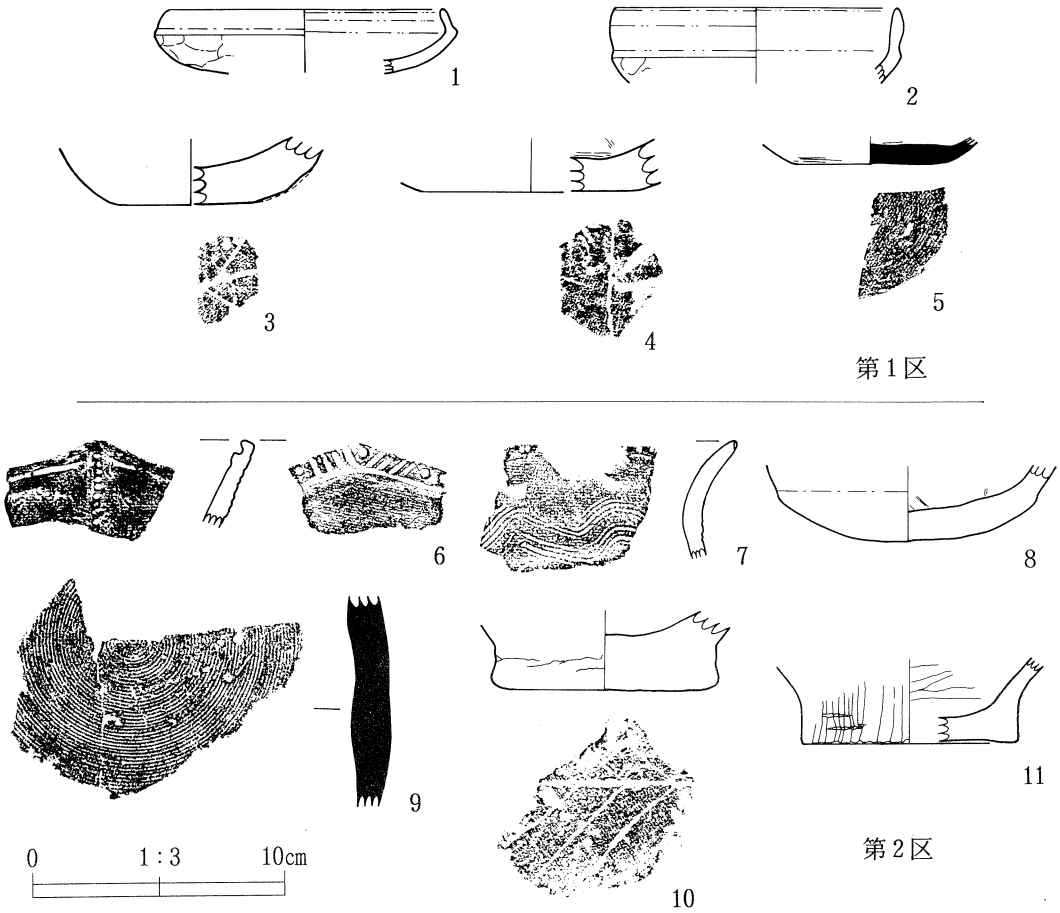
第5区（第46図48・49）からは口縁部が短く「く」の字状に外反する甕と柱状高台坏を取り上げた。

その他、黒曜石製の石鏃が2点、粘板岩製の磨製石鏃が1点、打製石斧が6点、用途不明の孔が貫通する磨石様の石器が2点出土する。

＜遺構外出土遺物一覧＞

（単位　cm）

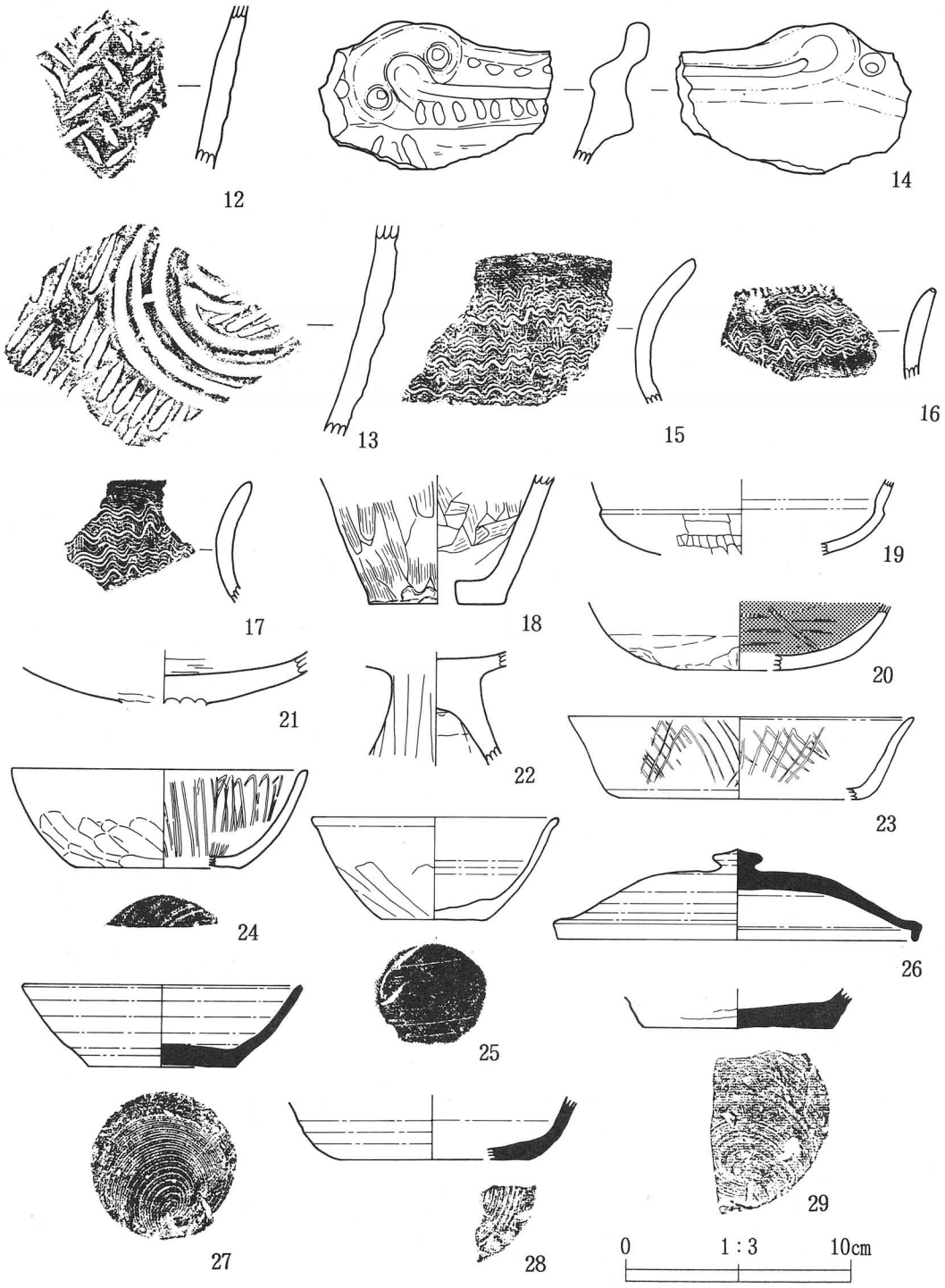
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
1	土師器	坏	(2.5), (10.8), ——	赤・白・黒色砂粒を含み密	黒色 灰褐色	(内)ヘラ撫で (外)口縁部撫で　体部ヘラ削り	口縁部破片
2	土師器	坏	(3.0), (11.2), ——	赤・白色砂粒を含み密	にぶい褐色 暗褐色	(内)撫で (外)口縁部撫で　体部ヘラ削り	口縁部破片
3	土師器	甕	(2.6), ——, 5.2	砂粒を含み密	明赤褐色	底部木葉痕	底部破片
4	土師器	甕	(2.1), ——, (8.8)	砂粒を含み密	にぶい橙色	底部木葉痕	底部破片
5	須恵器	坏	(1.1), ——, (5.8)	白色砂粒を多く含み密	黄灰色	(内)ロクロ撫で (外)底部回転ヘラ切り	底部破片
6	縄文土器	深鉢	——, ——, ——	白・黒色砂粒を含み密	灰褐色 黒褐色	(内)口縁部に刻みと円形の刺突文 (外)波状口縁、波頂より隆帯垂下、隆帯上に刻み	口縁部破片



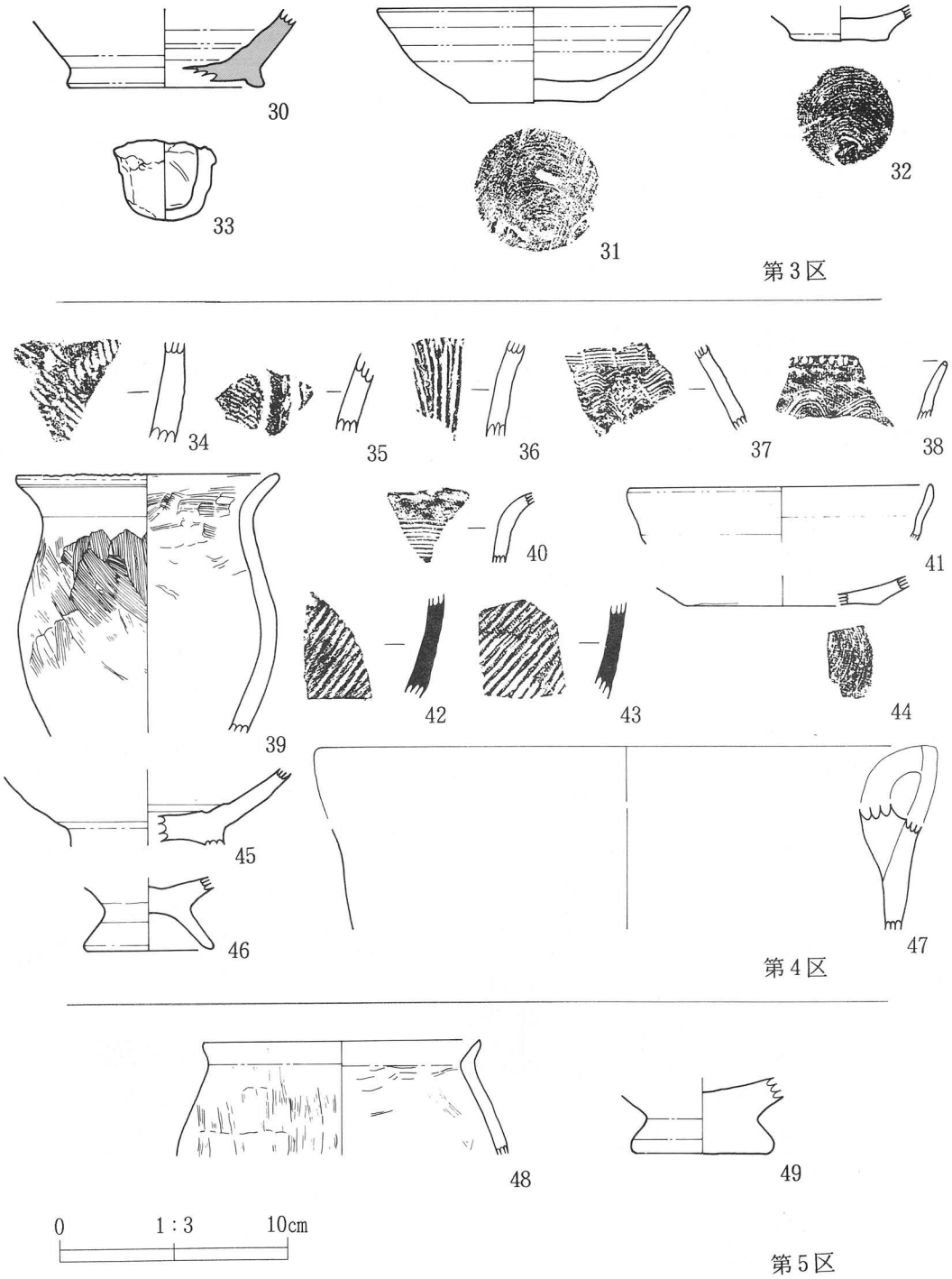
第44図　遺構外出土遺物　（第1・2区）

（単位　cm）

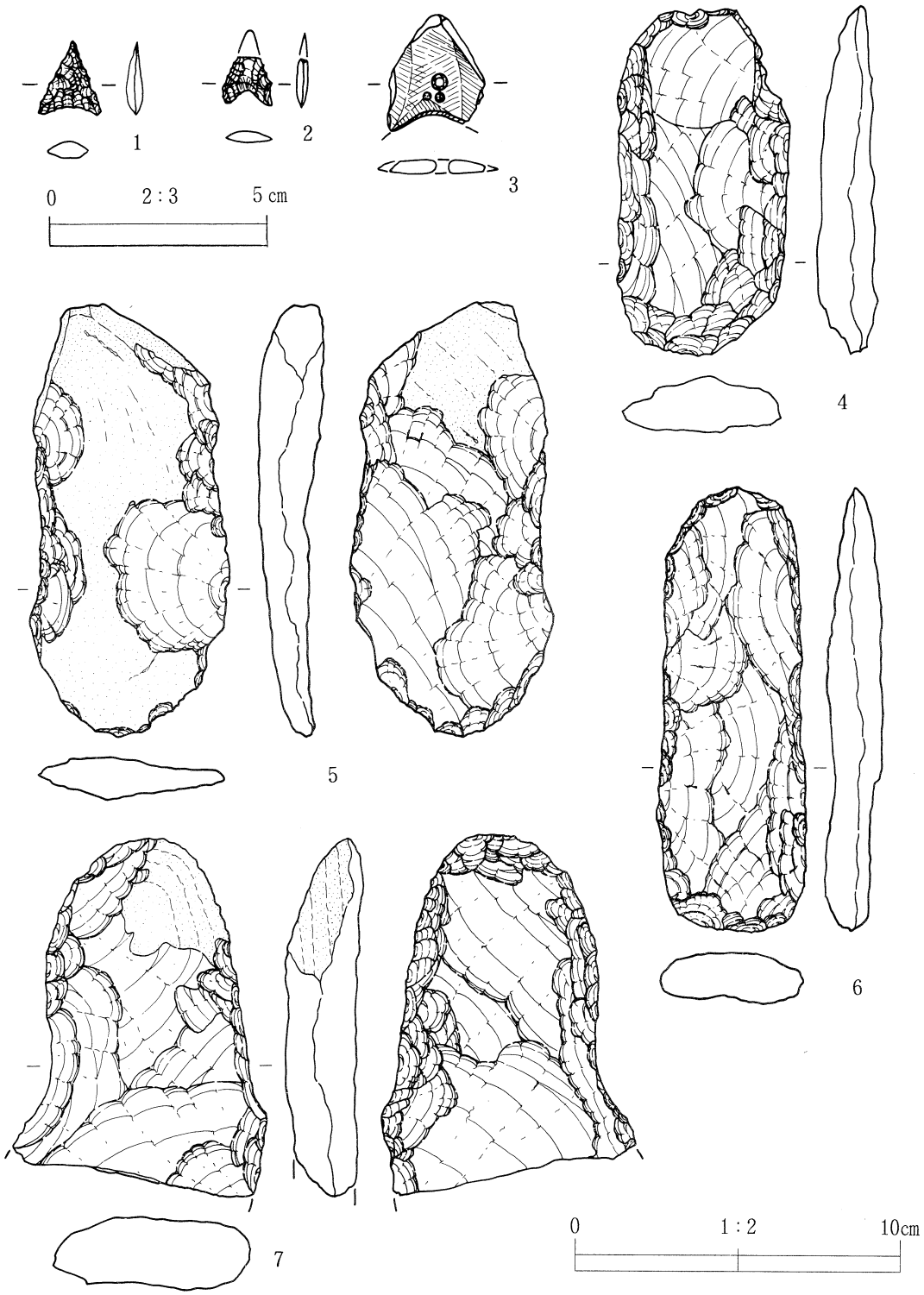
番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調（内面/外面）	整形・特徴・その他	残存率
7	弥生土器	甕	—，—，—	白・黒色砂粒を含み密	灰褐色	口縁部刻み 5条1単位の櫛描波状文	口縁部破片
8	土師質	椀	(3.1)，—，—	金色雲母、石英を含み密	褐色	(内外)磨き	底部破片
9	須恵器	提瓶	—，—，—	白色砂粒を含み密	灰青色	(外)同心円状の掻き目	破片
10	縄文土器	深鉢	(3.3)，—，(9.0)	赤・白・黒色粒子を含む	にぶい赤褐色	(内)撫で (外)底部木葉痕	底部破片
11	土師器	甕	(3.5)，—，(8.6)	金色雲母、白・黒色砂粒を含み密	にぶい褐色	(内)撫で (外)刷毛目底部磨き	底部破片
12	縄文土器	深鉢	—，—，—	赤・白・黒色砂粒を含み密	にぶい赤褐色	ハの字文	胴部破片
13	縄文土器	深鉢	—，—，—	白色砂粒を含み密	褐色	隆帯により曲線的な文様抽出 刺突文が充填	胴部破片



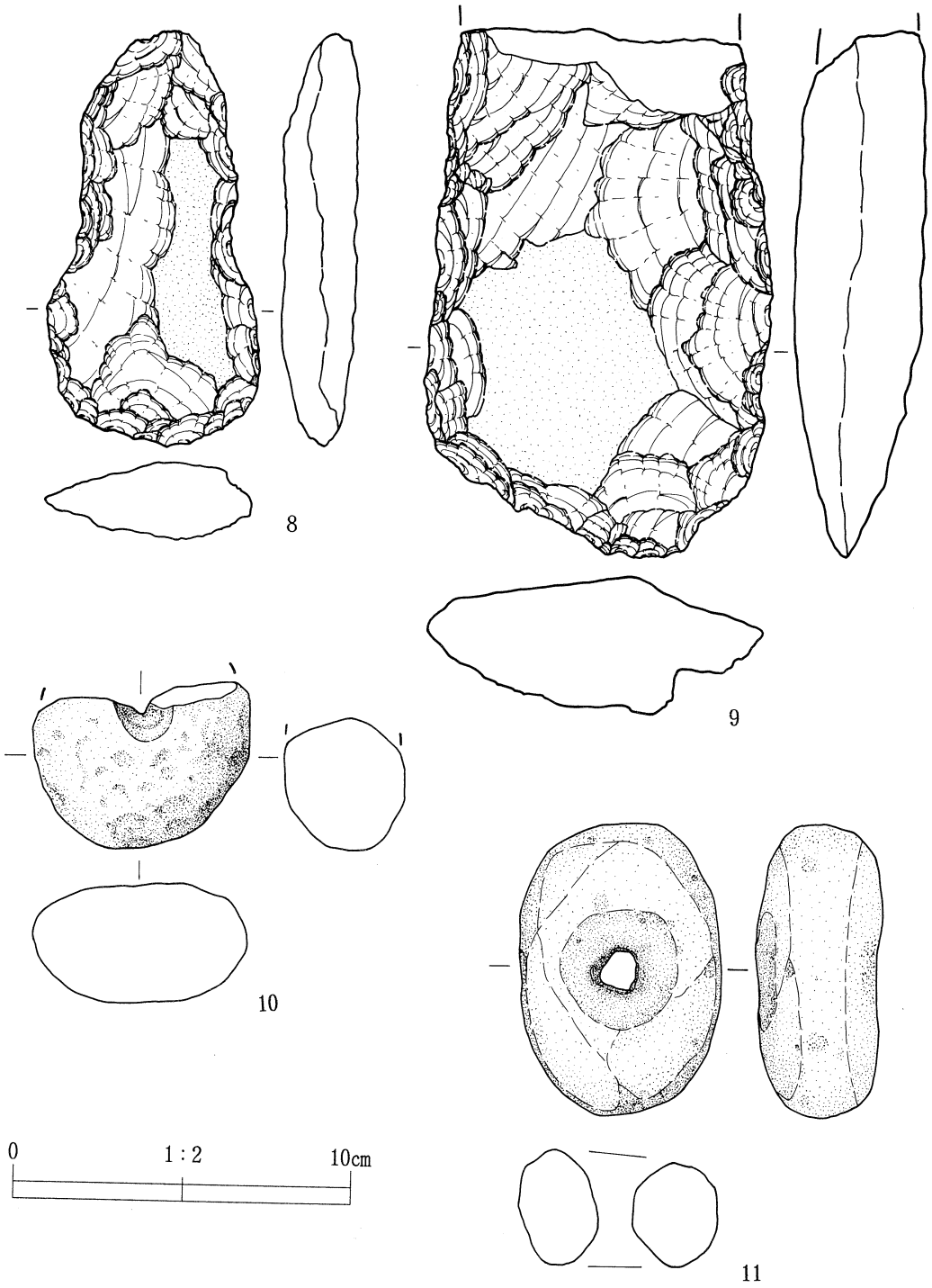
第45図　遺構外出土遺物　（第３区）



第46図　遺構外出土遺物　（第3・4・5区）



第47図　石　　器　(1)



第48図　石　　器　(2)

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面 外面）	整形・特徴・その他	残存率
14	縄文土器	深鉢	——，——，——	白・黒色砂粒を含み密	灰黄褐色	口縁部に刺突文と刻みがめぐる	口縁部破片
15	弥生土器	甕	——，——，——	細砂粒を含み密	にぶい橙色	(外)３条１単位の櫛描波状文	口縁部破片
16	弥生土器	甕	——，——，——	細砂粒を含み密	灰褐色	(外)口縁部刻み、３条１単位の櫛描波状文	口縁部破片
17	弥生土器	甕	——，——，——	細砂粒を含み密	にぶい橙色	(外)３条１単位の櫛描波状文	口縁部破片
18	土師器	甑	(5.6)，——，6.2	金色雲母、石英、白・黒色粒子を含み密	褐色	(内)ヘラ撫で (外)縦刷毛目	1／3残
19	土師器	坏	(3.3)，——，——	金色雲母、砂粒を含み密	にぶい赤褐色	(内)横撫で (外)体部横撫で底部ヘラ削り	破片
20	土師器	坏	(3.0)，——，——	赤色粒子を含み密	黒色 灰黄褐色	(内)ヘラ磨き、内黒 (外)撫でヘラ削り	1／4残
21	土師器	高坏	(2.4)，——，——	金色雲母、赤・白色砂粒を含み密	黒褐色	(内)撫で (外)ヘラ撫で	坏部破片
22	土師器	高坏	(5.0)，——，——	赤・白色砂粒を含み密	黒褐色 にぶい赤褐色	(内)撫で (外)ヘラ削り、赤彩	脚部破片
23	土師器	坏	(3.6)，(15.2)，(12.0)	金色雲母、赤色砂粒を含み密	明赤褐色	(内外)格子目暗文あり	口縁部破片
24	土師器	坏	4.3，(12.6)，(6.8)	砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)暗文あり (外)ヘラ削り	1／4残
25	土師器	坏	4.5，(11.0)，4.6	赤・白色粒子を含み密	浅黄橙色 橙色	(内)横撫で (外)口縁部横撫で体部ヘラ削り	4／5残
26	須恵器	蓋	4.0，(15.8)，(鈕径)2.2	赤・白色粒子を含み密	灰色	(内)ロクロ撫で (外)上部回転ヘラ削り	1／3残
27	須恵器	坏	3.6，(12.4)，6.5	赤・白色粒子を含み密	灰色 オリーブ黒色	(内)ロクロ撫で (外)底部回転糸切り痕	2／3残
28	須恵器	坏	(2.8)，——，(9.0)	白色粒子を含み密	にぶい黄橙色 灰オリーブ～にぶい褐色	(内)ロクロ撫で (外)底部回転糸切り痕	底部破片
29	須恵器	坏	(1.7)，——，(8.4)	白・黒色粒子を含み密	黄灰色	(内)ロクロ撫で (外)底部糸切り痕	底部破片
30	灰釉陶器	高台付坏	(3.4)，——，(8.6)	白・黒色粒子を含み密	にぶい黄褐色～にぶい緑色 灰オリーブ色	(内)施釉され表面ざらざらしている (外)ロクロ撫で、底部付高台	底部破片
31	土師質	坏	4.1，(13.8)，5.5	金色雲母を多量に含む	黒褐色 暗褐色	(内)ロクロ撫で (外)底部回転糸切り痕	1／2残
32	土師質	坏	(1.5)，——，4.4	金色雲母を多量に含む	にぶい赤褐色	(内)ロクロ撫で (外)底部回転糸切り痕	底部のみ残
33	手捏土器		3.5，4.3，3.0	金色雲母を多量に含む	にぶい赤褐色	(内)撫で (外)撫で指頭痕	ほぼ完形
34	縄文土器	深鉢	——，——，——	白・黒色砂粒を含み密	灰褐色	(内)撫で (外)無節ＬＲ縄文	破片
35	縄文土器	深鉢	——，——，——	白色粒子を含み密	赤褐色	(内)撫で (外)平行沈線による曲線的な文様、空白部単節ＬＲ縄文	破片
36	縄文土器	深鉢	——，——，——	赤・白・黒色砂粒を含み密	褐色	(内)撫で (外)櫛歯状工具による沈線	破片
37	弥生土器	甕	——，——，——	金色雲母、白・黒色砂粒を含み密	黒褐色	(内)撫で (外)簾状文、櫛描波状文	破片

（単位　cm）

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調 （内面 外面）	整形・特徴・その他	残存率
38	弥生土器	甕	―― , ―― , ――	砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)撫で (外)口縁部刻み、櫛描波状文	口縁部破片
39	土師器	甕	(11.4), 11.6 , ――	白色粒子を多く含み密	にぶい褐色	(内)横刷毛目 (外)口縁部刻み横撫で胴部刷毛目	口縁部～胴部1／3残
40	弥生土器	壺	―― , ―― , ――	金色雲母砂粒を含み密	暗赤褐色	(内)赤彩 (外)頸部９本の沈線、赤彩	破片
41	土師器	坏	(2.5), 6.6 , ――	微砂粒を含み密	黒褐色	(内)横撫で、ヘラ磨き (外)横撫で、ヘラ磨き	口縁部破片
42	須恵器	甕	―― , ―― , ――	砂粒を含み密	黄灰色	(内)ロクロ撫で (外)叩き目	破片
43	須恵器	甕	―― , ―― , ――	白・黒色砂粒を含み密	黄灰色	(内)ロクロ撫で (外)叩き目	破片
44	土師器	坏	(1.3), ―― ,(8.2)	微砂粒を含み密	にぶい橙色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で、底部回転糸切り痕	底部破片
45	土師質	高台付皿	(3.3), ―― , ――	金色雲母を多量に含み密	暗赤褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で	皿部破片
46	土師質	高台付皿	(3.2), ―― , 5.6	金色雲母を多量に含み密	皿部内側黒褐色 暗赤褐色	(内)ロクロ撫で (外)ロクロ撫で	台部4／5残
47	土師質	内耳鍋	(5.5), ―― , ――	赤・白・黒色砂粒を含み密	にぶい橙色 黒褐色	(内)ヘラ撫で (外)撫で	破片
48	土師器	甕	(5.0), 12.2 , ――	石英・砂粒を含み密	黒褐色	(内)ヘラ撫で (外)縦刷毛目	口縁部破片
49	土師器	柱状高台皿	(3.3), ―― ,(6.2)	金色雲母、赤・白・黒色砂粒を含み密	にぶい黄橙色	(外)底部回転糸切り痕(不鮮明)	底部～皿部破片

石器観察表

番号	出土位置	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	形態	備考
第7図6	1号住	打製石斧	(7.2)	(9.0)	1.9	(104.7)	頁岩	短冊形	
第8図7	2号住	〃	(8.2)	6.4	1.6	(112.4)	珪質頁岩	〃	
第13図6	5号住	磨石	(11.5)	6.6	4.7	(439.9)	石英安山岩		磨面1
〃 7	〃	石棒	(18.7)	(11.5)	8.8	(3,470.0)	輝石安山岩		
第23図2	11号住	打製石斧	8.5	5.35	1.3	50.7	頁岩		
〃 3	〃	磨石	17.0	9.0	5.4	1,137.8	石英角閃石安山岩		磨面2
第31図9	15号住	凹石	10.2	(6.1)	(4.9)	(327.5)	多孔質石英安山岩		
第43図14	溝状凹地	打製石斧	(10.6)	5.0	2.4	(153.3)	硬砂岩		
第47図1	2区	石鏃	1.67	1.45	0.37	0.5	黒曜石		
〃 2	3区	〃	(1.07)	1.12	0.21	(0.2)	黒曜石		
〃 3	〃	磨製石鏃	(2.66)	(2.18)	0.26	(2.1)	粘板岩		
〃 4	2区	打製石斧	10.6	5.3	1.9	108.0	砂質片岩	短冊形	
〃 5	3区	〃	13.2	6.2	2.1	164.5	砂質粘板岩	〃	
〃 6	〃	〃	13.6	4.6	1.8	113.2	千枚岩	〃	
〃 7	2区	〃	(11.0)	7.8	2.2	(219.5)	ホルンフェルス	撥形	
第48図8	3区	〃	12.1	6.3	2.2	188.2	千枚岩	〃	
〃 9	2区	〃	(15.4)	10.2	4.1	(718.1)	硬砂岩	短冊形	
〃 10	3区		(4.9)	6.4	3.6	(108.4)	角閃石石英安山岩		
〃 11	5区		8.6	5.9	3.75	172.0	玄武岩		

第4章　ま　と　め

弥生時代

今回の調査で検出された遺構は住居址6軒であった。いずれも弥生時代後期に位置付けられるものである。これによって市内で当該期に位置付けられる遺跡は6遺跡・27軒の住居址を数えることとなった。その全てが本遺跡も位置する塩川右岸の河岸段丘上である。検出した住居址は全て調査区外へ広がるため、その全体を把握することは困難である。住居の形態は小判形あるいは隅丸方形となり、11号住などは比較的大型の住居址となろう。出土した遺物はそれほど多くなく、10・12・15号住などから全体の器形が分かる土器が僅かに出土している。12号住出土の甕（第24図2）に見られる波状文は口縁部から胴中位にかけて施され、また15号住出土の壺（第31図2）に施される波状文は振動が大きく、斜行するなど乱れが感じ取れる。時間的にはより後出のものとなろう。更に15号住出土の甕（第31図1）など肩が比較的強く張り、口縁部から胴中位にかけてハケメを文様風に残している。プロポーションからは古相な点が窺えるが、ハケメを残すところなど時間的に新しさが感じられる。今回検出された住居址はいずれも弥生時代後期末に位置付けられよう。

古墳時代

今回の調査では古墳時代後期に位置付けられる住居址4軒を検出した。市内ではそれまで検出例の無かった当該期の遺構を昨年度の後田第2、坂井堂ノ前遺跡につづいて検出した。これまで他地域の例から推し測っていた当該期の様相を市内の資料から考察することが出来つつある。ここでは坂井堂ノ前遺跡も本遺跡と道路を隔てた反対側に位置するため、その成果をも含めて述べていく。本遺跡から検出した遺構は住居址4軒、坂井堂ノ前遺跡からは2軒の住居址が調査された。都合6軒の住居址を検出したことになる。住居址の規模は一辺4～5m程となる。出土した遺跡は土師器坏・埦・甕・壺・鉢・甑などがある。坏は丸底で体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が緩やかに内湾しながら外反し、口唇部に至り湾曲する内湾口縁坏が大部分となる。しかもこれら坏には既に偏平化の様相が窺われる。甕はほとんどが長胴となり、ハケ整形されたものが主体を占めるようだが、本遺跡6号住出土資料はヘラケズリされるものが多くなっている。8号住から出土する甕（第18図3）は最大径が口縁部にあり、既に長胴化が極限にまで達していることが知れる。本遺跡及び坂井堂ノ前遺跡出土土器は年代的には7世紀前葉に位置付けられよう。前述したように昨年度からの調査によって市内の歴史的空間期間が埋まりつつある。既に古墳時代前期には七里岩台地上に住居址約100軒を検出した坂井南遺跡が存在し、前期を通じ比較的安定した居住が認められる。その後中期の遺跡は市内では調査例が少なく、僅かに本遺跡から南東へ約900m、塩川の河岸段丘崖近くに位置し、住居址3軒を検出した枇杷塚遺跡のみが知られる。資料の絶対数が足りない現状で多くを語ることは慎まなければならないが、古墳時代中期以降そ

れまで前期を通じ七里岩台地上に存在した住居域は藤井平に移動し生産域と近接して、更に言えば土地とより緊密した状態となって経営が行われたと推測している。今回検出された水田址などは残念ながらその時期を特定できなかったが、集落の縁辺に存在する低湿地を利用して経営されており、こうした状況が古墳時代後期においても推定できるであろう。

奈良時代

今回の調査では奈良時代に位置付けられる居住址を２軒検出した。また坂井堂ノ前遺跡からも２軒の住居址を検出していることから、ここでもその成果を含めて述べていく。検出した住居址の規模は、一辺３～４ｍ程となり、カマドは東壁に作られている。出土した遺物は須恵器蓋・坏・甕・壺、土師器坏・甕・鉢などがある。特に坂井堂ノ前遺跡４号住からは盤状坏と甲斐型坏の出現期のもの及びロクロ整形土師器甕などが良好な一括資料となっている。時期的には両遺跡とも検出されたいずれの住居址も８世紀前半に位置付けられよう。特に甲斐型土器研究グループによる研究成果により、甲斐型土器の出現が従来より約50年溯る結果となり、それまで奈良時代におかれていた盤状坏も８世紀前半に押し込められる状況となった現在では奈良時代前半の土器様相について再考すべき時に来ていよう。更に今回古墳時代後期の住居址と共に奈良時代の住居址が検出されたことは注意を要する。市内において現在まで奈良時代の遺跡は藤井平を中心として検出されているが、古墳時代後期から引き続き居住が認められる遺跡の検出は坂井堂ノ前遺跡を含めた本遺跡のみである。特に調査面積約19,000㎡にも及び、奈良・平安時代の住居址417軒を検出した宮ノ前遺跡では６～７世紀代からの住居は認められず８世紀前半代から突如として生活の痕跡が現れる。こうした現象を報告者は開墾奨励政策による計画的移住とみて、宮ノ前遺跡を開墾集団の集落と解釈しているが、一方では本遺跡のような弥生時代に始まり、少なくとも古墳時代後期より連綿と形成され続けたいわば伝統的な集落も同時に存在したことになる。今後こうした２類型の集落が設定出来るのか事例の集積を待って考えてみるべきであろう。尚、これは過去の調査における地点・範囲の制約を、また古墳時代後期の遺跡が昨年度になってようやく検出されたこと等当然に考慮しなければならないが、宮ノ前遺跡における事例を勘案するならばなお一考を要すると思われる。

平安時代

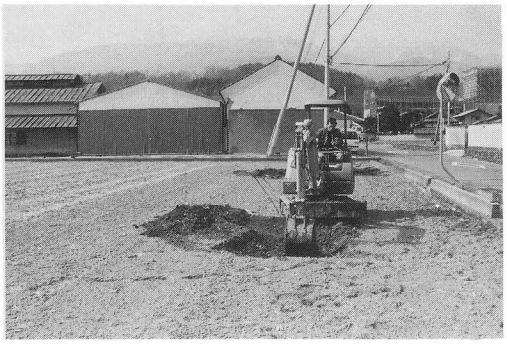
該期に位置付けられる遺構は１・３号住、１～４号土坑、４号溝などがある。１号住は11世紀前後に、３号住は年代決定にやや決めてを欠くが９世紀前半以降となろう。他は残念ながら年代決定には到らなかった。２軒の住居は重複関係にあるが、年代的に隔たりがある。また検出された水田址なども該期に位置付けられる可能性を持つが、年代的位置付けは出来なかった。今後の課題としておきたい。

最後に本遺跡から発見された遺構と遺物は各時代を解明するのに重要なものであり、本書が今後の調査・研究に少しでも資することが出来ればこの上ない喜びである。

図　　版

後田堂ノ前遺跡から富士山を望む

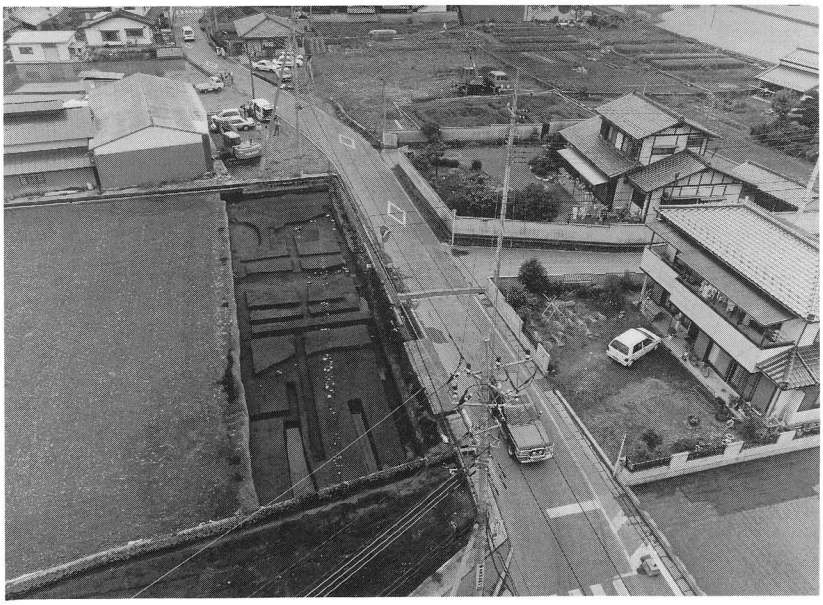
後田堂ノ前から茅ヶ岳を望む



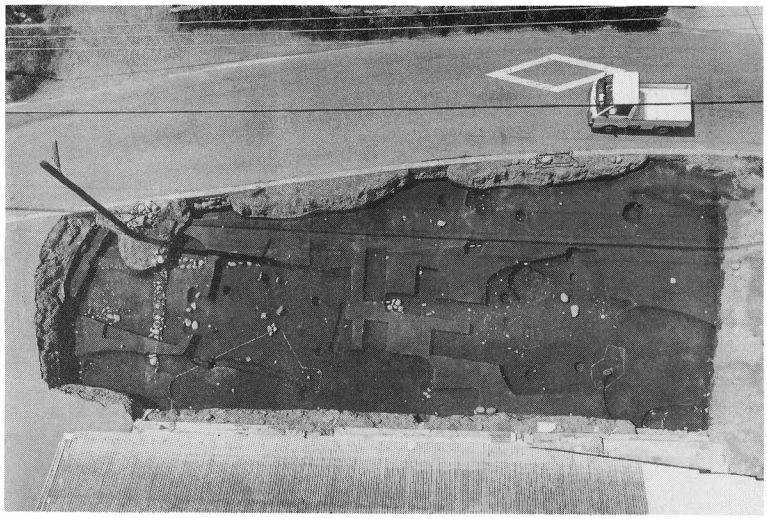
試掘調査

調査風景

調査区全景（1区）



調査区全景（2区）



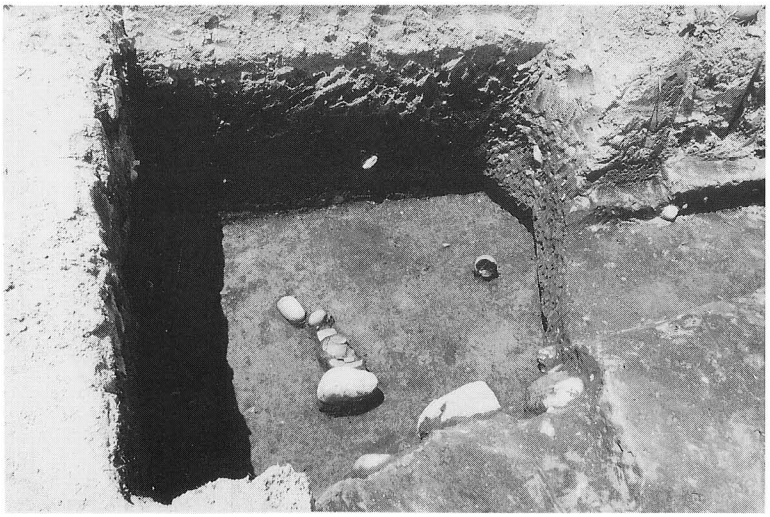
調査区全景(3区)

調査区全景(4区)

第1・2号住居址

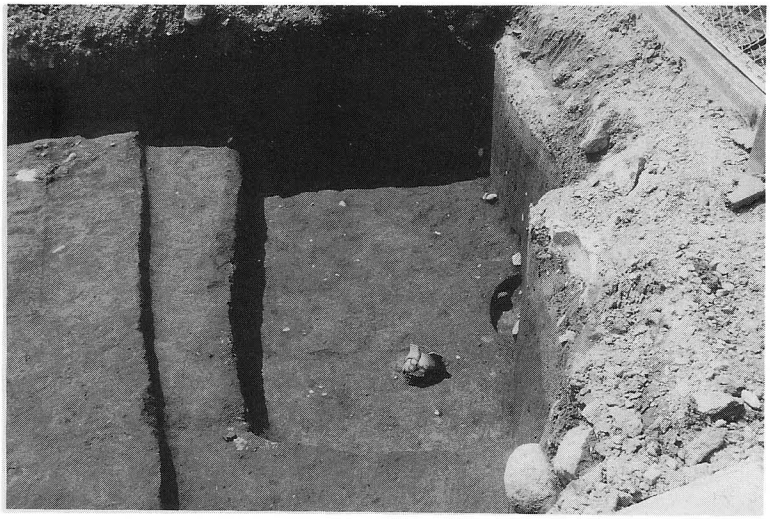
第 4 号 住 居 址

第 5 号 住 居 址



第 10 号 住 居 址

第 11 号 住 居 址



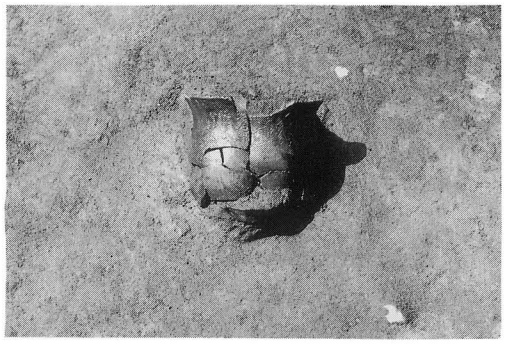
第 12 号 住 居 址

第 13 号 住 居 址

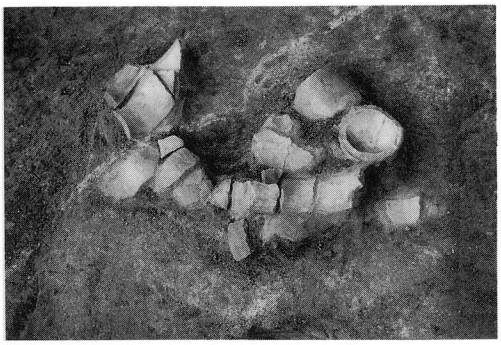
第 14 号 住 居 址

第 15 号 住 居 址

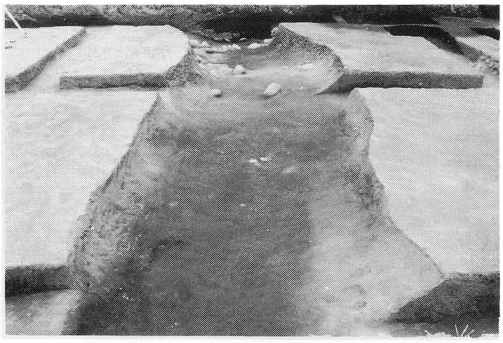
第 16 号 住 居 址



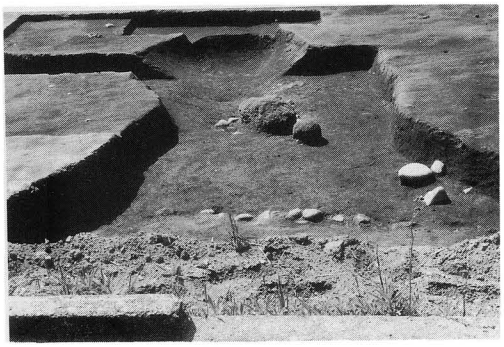
第12号住遺物出土状況



第15号住遺物出土状況



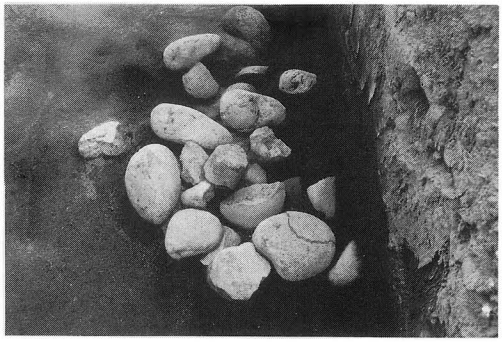
第１号溝



第２号溝

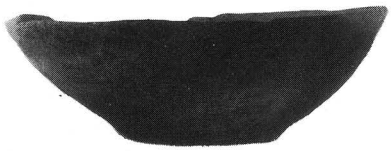
第３号溝

第４号溝

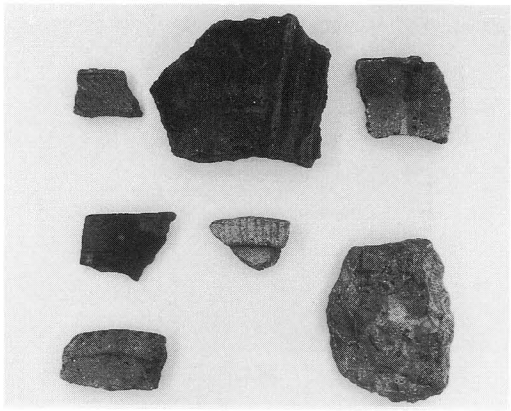


第１号集石土坑

調査風景

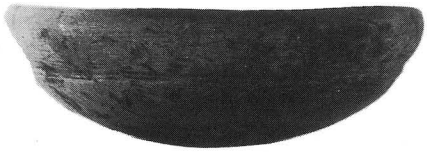


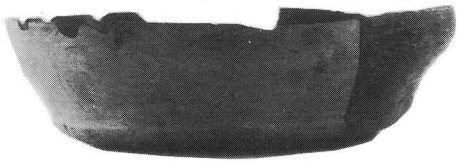
1 号住居址出土遺物

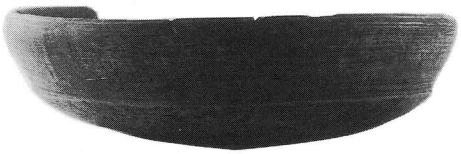


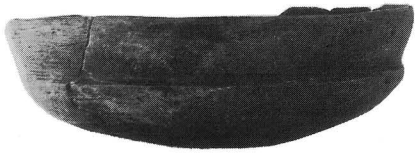
2 号住居址出土遺物

4 号住居址出土遺物





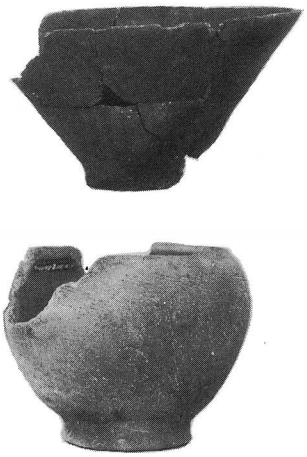




5 号住居址出土遺物

6 号住居址出土遺物

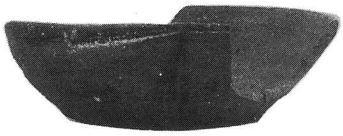
8 号住居址出土遺物

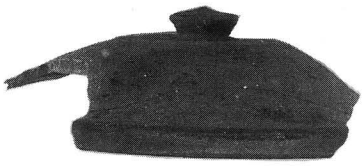


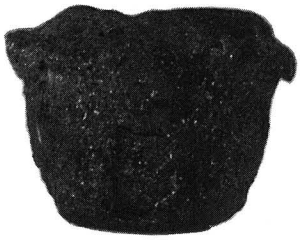
10号住居址出土遺物

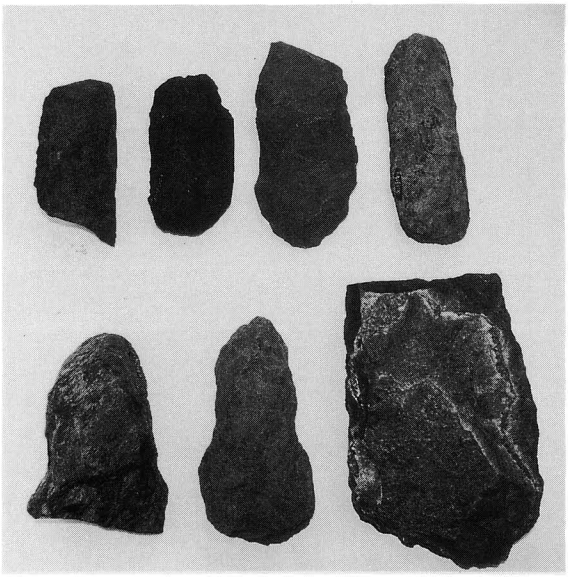
12号住居址出土遺物

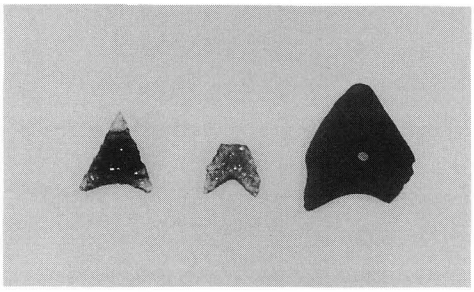
15号住居址出土遺物

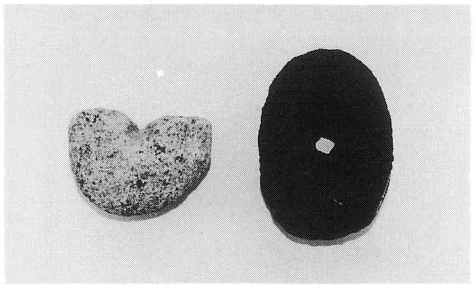












遺構外出土遺物

後田堂ノ前遺跡

発行日　平成９年３月31日

発　行　韮崎市遺跡調査会
韮崎市教育委員会
〒407 山梨県韮崎市水神一丁目３－１
TEL 0551－22－1111㈹

印　刷　アートプリント社